

神 祭

森 田 保 次

I 神 社

一、西 丘 神 社 郷社 西岡村赤城塚

祭日 三月四日、九月十九日

祭神 大巳貴命、豊城入彦命、高木神、磐裂神（以上旧赤城神社）

大日靈命、保食命（以上神明宮）

大雷命（雷電社 悪途）

菅原道真（天神社）

倉稻魂命（稻荷社 山崎）

弥都波能女命（水神社 末社）

木花咲耶姬命（浅間社 悪途）

猿田彦命（猿田彦社 悪途）

末社 道祖神社、湯殿神社、琴平神社

二、除 川 神 社 除川字口伝

祭神 大巳貴命 豊城入彦命 高木神 磐裂神 菅原道真 木花咲

耶姬命（浅間） 鷲宮神社 品陀別命（八幡社） 大山祇命

（山神） 大日靈命（神明社） 市杵島姬命（厳島社、弁天）

三、八 幡 宮 大 曲

四、長 柄 神 社 離字西新田蓼沼

祭日 九月十九日

祭神 事代主命 大日神社（湯殿山神社勧請）

末社 菅原神社、稻荷神社、道祖神

五、一 峯 神 社 峯

祭日 九月十九日

祭神 天津児屋根命 大日靈命 大物主命 大山昨命

末社 富森稻荷、天神社、稻荷社、浅間社、道祖神

六、加 茂 明 神 社 北海老瀬

祭神 別雷神

七、高 鳥 神 社 高 鳥

祭日 一月二十五日、三月二十五日

祭神 菅原道真、大国主命、伊弉册命、菊理姬命、事代主命、迦具

土命、石裂命、根裂命、弥都波能女命、菅田別命、倉稻魂命

大雷命、木花咲耶姬命、大山祇命、少那彦命、大巳貴命、素

盞鳴命、市杵島姬命、大山咋命、国常立命、大日靈命

祭神 事代主命

八、雷 電 神 社

板倉字雲間（はらぐら）

一四、八 坂 神 社

岩田字北通

祭日 正月十五日、四月朔日

祭神 素盞鳴命

祭神

火雷神、大雷神、別雷神、伊弉冊神、建角身神、天水分神、

菅原道真（以上合併前旧祭神）天御中主神、高皇產靈神、神

一五、神 明 宮

岩田字風張

皇產靈神、大日靈命、倉稻魂神（稻荷社、石塚） 大山咋命

祭神 大日靈命 豐受姬命

（日枝社、小太子） 弥都波能売神（水神、川入） 齊庭神

社（西原）

一六、浅 間 神 社

岩田字天神下

末社 菅原社、八幡社、稻荷社（特別保護建造物） 琴平

祭神 木花咲耶姬命

社 巖島社

九、長 柄 神 社

靱谷字北

一七、敵 島 神 社

内藏新田字原橋下

祭日 三月十九日

祭神 事代主命

一八、菅 原 神 社

内藏新田字瀬ヶ谷

一〇、淡 島 神 社

靱谷字中

祭神 少彦名命

一九、雷 電 神 社

西岡新田字恵途

一一、佐 多 彦 神 社

靱谷字内容

祭日 三月七日、九月十九日

祭神 猿田彦命

祭神 大雷神、保食神、菅原道真

一二、野 城 宮 神 社

靱谷字本郷

二〇、長 柄 神 社

細谷字宮前

祭神 武内宿弥

祭日 三月十日、九月十九日

一三、長 柄 神 社

岩田字鳶替

祭日 二月十日

Ⅱ 信仰関係のことば

- おくんち 秋祭。餅を供える。お供餅の外にあんころ餅（とりぐるみ）を作る。これが食料。九月九日（初ぐんち）九月十九日（中ぐんち）九月廿九日（しまいぐんち）このどの日か村によってちがう。夜はうどん。
- おひまち いろ／＼の祭の日。
- ものび おくんち、おひまち、その他かわりものつくって神仏に供え、労働を一日または半日休むので、あす日（遊日）ともいう。
- かわりもの 神仏の祭その他もの日に作る日常食とちがった食物。昔は麦飯に味噌汁と漬物が常食だったから、飯は米飯、小豆飯、赤飯もかわりもの。副食物は、けんちん、きんぴら、天ぷら（つけあげ）。
- あげもん 神仏に寄進の品。
- うかがい 神意を占うこと。
- えい 宵宮祭の晩。昼中に明日の本祭の準備をととのえ、夜は必ず「かわりもの」をととのえ、神棚に燈明をあげる。
- えんぎ 家の特異なしきたり。胡瓜を食はないとか、とうもろこしを作らないとかいうことが家によって守られる。
- おかまのだんご 十月十五日に釜神様に供える団子。釜神は非常な子福者とあって、小さん団子を沢山あげる。
- おがみ 神官、行者等の宣詞、祭文の類。
- おさご 神仏に詣る時に撒く米。
- おたきあげ 正月の松を集めて焚くどんど。
- おとか 狐のこと。おとかつき、おとか山。
- かざまつり 秋の取入前に行う風害除の祭。日取は定っていない、毎年ふれが出る。

- かびたりもち 十二月一日につく餅。
- さわり 物の祟りによって起る災厄。原因には、人の怨（生霊、死霊）動物の祟、木の伐採、移植、建築移転、神仏への非礼
- さんやまち 二十三夜待
- しっぽぎり 尾の先の切れて丸くなった蛇、神の使だといって子供も殺さない。
- しみずかり 初午にそなえる食物。大根をこれ専用の具でつきおろして煮て味をつける。これには節分の豆を必ず加える。
- しめす 神仏に供えた燈明を消すこと、決して口で吹きつけてはならない。
- せんだつ 富士、御岳等の行者。厄除、修祓等の信仰事務を頼む外ト占もやる。
- たつぜん 膳の底板の木目は必ず横にすべきもので、これを堅ることを忌む。
- てんじんやっこ ひよわの子を神仏の申子として、健康を祈る。天神さまにお願いした子は髪を右左だけ残してすったもの。
- てんのうさま おみこしのこと。
- どこうじん 土の神、時によって居場所がちがい、それを犯すとたたる。
- はっちようじめ お正月のお飾用として村社から頂いてくる幣束の一組
- まゆだんご まゆの形にこしらえた団子、正月の飾と、初午の供物。
- わらでっぼう 十月十日の晩（とうかんや）にわらを棒状に縄でしっかりまいて、それで地面をたたきまわるもの。
- やしきちんじゅ 屋敷内に祀った守り神。ふつうはいなり様と信じられ、家の先祖とは関係ない。普通宅地の北の隅にあり。その家がなくなってもこれは残る。
- あまごい ひでりで困った時、村中各戸一人参加する。水が多すぎ

るのが困る場合の多いこの土地では殆ど行わない。板倉の雷電神社は他地方の人たちが雨乞の際水をわけてやる。

○うじこ 氏子。現在では村民と範囲同じ。おびや（おびあき）の神参りに始まり、七五三、結婚当日は必ず参るが、外に定めて神に詣る日はない。氏子の中、神社を管理し、祭を計画、実施に任じるものが氏子惣代で、昔は家柄によって代々これに任じていたが、現在

調査こぼれ話 (7)

長良神社の祭典費

長良神社は海老瀬の本郷コーチの神社である。現在の本まつりは四月二十八日（もとは二月二十八日）、夏まつりは七月二十八日で、やくじんよけと称している。本郷は四コーチに分れていて、各コーチから一人ずつ祭典のトウヤクが出て、そのうちの一人がトウヤクトウバンになり、神主となる。このほかにトウバンというのが各コーチから一名ずつ四名で雑用をつとめる。次に、「長良社費台帳」（明治十七年八月につくられたもの）によつて、明治二十七年の長良神社の祭典費を記してみる。

長良社壹ヶ年度祭典費
 一金 五拾銭 旧正月十三日 御神酒料
 一金 拾銭 神官エノ納金
 一金 参銭 炭代
 一金 貳銭 半紙
 式月
 一金 拾五銭 ボンデン 御神酒料
 一金 八銭 神官へボンデン納金
 一金 貳銭 竹代
 参月
 一金 四銭 雷電神水嵐除御札料
 一金 貳拾五銭 貳月初寅 御神酒 肴ハ其当番ニ於テ之ヲ負担ス
 一金 貳拾五銭 三月中寅 御神酒料 肴ハ右同断
 一金 貳拾五銭 四月末寅 御神酒 肴ハ右同断
 五月
 一金 拾五銭 五月五日八張七五三 御神酒肴共

では材幹力量によつて割込める。然し、一旦この位置に割込むとその位置を家に確保したい気持はある。神官は板倉神社や高鳥神社の如き専属は例外で、今では祭毎に参加する一員に過ぎないから、神官と祭神との特別の縁はない。祭の費用は氏子に適宜割付ける。これを集める方法をさしという。

一金 八銭 神官ニ納金
 一金 四銭 竹代
 一金 五拾銭 御礼ぐり 御神酒料
 一金 拾銭 肴代
 六月
 一金 貳拾五銭 六月十五日御礼別家 御神酒料
 一金 拾銭 肴料
 一金 拾貳銭五厘 雷電神社代参詣人へ賽物銭トシテ呈シ
 一金 五拾銭 六月廿八日 疫神祭御酒料
 一金 貳拾銭 肴代料
 九月
 一金 五拾銭 九月十三日 御神酒代 肴ハ当番ニ於テ負担ス
 一金 拾銭 神官へ納金
 惣計金四円参拾参銭五厘
 規約証
 第壹条 長良社之祭典費ハ壹ヶ年度右之諸項ト相定候事
 第貳条 長良社所有地ヨリ之作得ヲ以テ一切長良社祭典費ニ充ツ
 第参条 壹ヶ年之祭典費ハ右之諸項ノ外猥リ支払フ事得ズ
 第四條 右諸項ノ外臨時祭典ハ特ニ惣会ヲ開キ協議スル事
 第五條 其年之当役ニ当リタル人ハ即チ小作ヲ徴収シ而シテ其ノ小作ヲ売却シ祭典費ヲ支払ヒ其ノ加不足ヲ明瞭ニシテ次ノ当役人等ニ引続キスル事
 右件々ヲ誓約候上ハ後日ニ至リ決テ違変致間敷因テ氏子中一同茲ニ署名捺印スル者ナリ
 明治廿七甲午年五月

松本市
 本与市
 外ニ二十三名連署省略
 (井田)

命 名

I 地 名

一、旧伊奈良地区

1 岩 田

花和田、寄居、寺山、井戸畑、相ノ谷、沼田、姥木、曾根、草倉、向原、天神下、天神台、宿浦、通南、東廓、北通、北浦、館街道、五味ノ木、西久保、市川田、道明、山ノ内、小橋、八反、骨稽、五反田、間堀、下山、下山浦、小平、鳶替、粃谷、観音林、本合、新田前、風張、長良、越中内、船山前、沼向、上川田、精進場、下川田、浮戸前

2 粃 谷

松前、北後、北、鎌田、ながれ、菰田、浦田、かば、小ざいけ、遠板、向根、雷電ふち、高田、中堤、慶長、ぐみの木、原道、北曾根、北菌、堀前、辻、大之田、えびすくい、佃田、町田、焼石、本内、宮ノ脇、早沼、権現塚、後安、道六神、薬師堂、宮前、中、新井、畑ケ中、大寄、中目、河崎、栗崎、つぼしり、内谷、沼尻、新田裏、間谷、本郷、木ノ神、花見道、神明、大林、西林、中ノ条、中原、浮戸、獅子見

鹿見、尉渡野、飯島

森 田 保 次

3 内藏新田

瀬谷具、三十日、大橋、百田内、原橋下、中道、八反田、樋口、佐渡、竜ヶ淵、鹿見、大林間、枝沼

4 板 倉

小保呂、貝柄、江上戸、藤株、台、中宮、土橋、東谷、藏殿、棧敷、北木戸、元屋敷、越潮台、沼通、川入、宮廻、中宮、屋敷東、仏木、漆畑、薬師堂、宮前、樋口畑、内谷、塚越、内御手洗沼、外御手洗沼、中島、曾根、長良前、藤ノ木、(内藤ノ木、外藤ノ木)、徳摩、花輪田、稻荷木、寺裏、下宿、石塚谷、稻荷塚、丸田、川入、裏谷、宿、大林、長林、稻荷林、大谷内、中耕地、大境、京塚、寄居、天神下、愛宕前、城ノ森、大同前、雲間、入ノ山、間ノ谷、伊勢前、宮下御手洗、入ノ山、南下保、大宿坊、西原、小蓬、亥ノ子、榎戸、雲間寄合、林崎、槐、戸、小太子、山王裏、石塚、茶ノ木畑、大新田、立野、谷中、高間々、竜ヶ淵

二、旧大箇野地区

1 飯野

登戸、馬除、悪戸、城、瀬井呂、城ノ内、川岸、
辻、新、大道、車口、南越光、松ノ木、本、
中、侍、辺、念行寺、岡、北越光、合ノ谷、伊勢ノ木、
浦川田

2 大高島

島悪戸、本郷悪途、本郷、本島、八反、沼、権現、
坪呂、梁田、宇那根、高島、北根、番塚、谷中、
薬師裏、深吉、丸谷新田、洗下、丸谷裏

3 下五箇

五箇、川入、小合地、富士宮、中道、株木、曾沼、
樋ノ口前、樋ノ口、北坪、北田、中曾根、谷新田、中妻、
越戸、上五箇、宇那根、堤外

三、旧海老瀬地区

間田、淵ノ上、峯、天神悪途、上新田悪途、上新田、通、
八軒、通裏、道悦、三五郎、中新田、棧敷、中下、
洗代、細谷、通続、下新田、土部、小橋、離山、
山口、宿小橋、原太、中山、日影、桑ノ袋、東谷、
頼母子、横手、本郷、仲伊谷田、山ノ神、仲谷田、沼郷、
向曾根、枝沼、仲伊谷田悪戸、大谷、北

四、旧西谷田地区

1 除川

大卷、こいだまり、樋口、平沼、どぶ、こい沼、久こや、
谷中、砂子、ざっこ沼、間々下、頭沼、西原、こつ沼、
山崎下、北、地藏堂、ねずみ塚、渋井、こしまき、あかきくぼ、
西原、しほい、口伝、ひの木、山ノ木、伊勢原、天神前、
天神東、天神合、天神台、川戸、北悪途、小悪途、北悪途、
堤外、北原、八幡東、とつとこ、谷合、おりもと、北谷、
鷺前、八幡北、八幡前、西久保、山ノ神前、尾崎、尾崎前、
船渡上、悪途折本、堤内、船渡下、よこつつみ、入悪途、
赤羽根、ながれ

2 西岡

坂下、前原、原、悪途、中妻、台、中岡、神明西、
寺ノ下、赤城塚

3 西岡新田

山崎、新田前、三条目、かき田、あいの田、長岡東、亀子、
和田、悪途

4 大曲

永沼、新道、中小蓋、三ツ又、飯島、三正房、西正房、
内田、川田、大原、枝沼

5 大荷場おおにんば

曾根南、浮ハレ、道下、堀下、道東、道西、中道、
川田、上下、枝沼

6 細谷

高間、押切、蔵屋敷、松倉、大井柄、曲が、宮前、

枝沼

7 離

西新田、とりのおき、道下、ながれ、申起、や中、獄の沖、瀬戸、橋場、沼向、麦生、上、内屋敷、中、屋敷内、下、とさ屋敷、舟口、蓼沼、弥五宮、わせひし、みのわ、宮内、道陸神、大荷場、悪途、枝沼

五、地名について

1、この辺上・下というのは、前橋地方で赤城を中心に北を上、南を下とするのと違い、川の流れを基準にするから、西が上、東が下である。家についても、かみんち(上の家)しもんち(下の家)という。

2、川、岡、神社等を中心に東西南北の外、南が前、北が裏(浦)または瀬戸等名づける。

3、各村にある「あく」と(悪途、悪戸)は、この辺では普通名詞で、「今年の洪水はでかかったから、またあくが大変できた」というように用いる。洪水の濁流が川岸に沈澱させた泥が積んで出来た所で、かなり広い地域を多い時は十センチ以上つみ上げ、よく肥えた土なので作物がよくできる。

4、や(谷)というのも下邑楽に多い地形で、低湿な排水の悪い所だから耕作には困難だけれど、作物はよくできる。下邑楽全体が昔はこのや(谷)であり、中でも現板倉町に含まれる地域は、板倉沼周辺の谷であった。大正年間にできた邑楽郡誌に「板倉は昔イトラといい伊度良の字を当てている中、これをイタクラと読むようになり今のように板倉となった」とあるが、偶然かも知れないが、イトラはアイヌ語で(バチエラ「辞典」)「河の大きいなる部分(湖の如き)」とある。

5、きには、耕地の目標に残した木の外に処という意味で用いた所がある。

6、おきには、居住地から遠くはなれた位置にできた田の外に、開墾地にも申おこし、午おきという風に名づけた。

7、ママという地形は、僅かにあつて地名になっている。

8、新道は、しんどうと言えは県道のこと、しんみちといえは、新し道である。

9、コーチは耕地と書けば、耕作地のものであるが、大字の中の小区分、居住地、宅地の集団の名である。「おらがこうち」等という。

10、海老瀬の地名については、勝道上人が日光へ行く途中この地で洪水に逢い渡りなやんでいると、海老が集まり、その背をわたって越えたといい地名伝説があるが、地図を見ればわかる通り、この辺を大洪水が浸せば、ちょうど海老のような形に水から残るこうちがあるのである。

II 人物評価、あだ名の資料

あだ名の問題は土地の人たちが、話すのを憚るので、別に方言の方からその資料を集めて見た。

○あおんぞう 血色の悪い人に対するさげすみの語。

○あまじよう 甘性。食物の嗜好が塩気の淡いのを好むこと。あまざの強いのを好むのとは違う。「甘性は貧乏性」という俚言があり、農民は一般に辛性である。

○あらっばぎ 粗暴でとかく蛮力を振いたがる性格。行動にもいう。

○いいかげん 言動に戯気が多く。真面目に正面通り受取りにくい人物。

○いし 汝という意味の代名詞。上邑楽では「にし」といったが、今は全く用いられなくなったのに、この地域では今も「いし」を君、お前の代りに用いている。

○いちだいうるぬき うるぬきは農業で作物を間引く意味の方言で、身代を祖父から孫へゆずり、子を除く相続法。二代目が娘へ婿を取

つた場合等まゝ行われる。祖父が健在中子が先に死んで、やむを得ず家督が孫に行くといった事態にはこういわない。

○いっぶりゆう 一徹頑固に一風変つた態度や趣味を押し通す人物。断じて時流を追わないとか、人が右と言えば故ら左という類。

○うずごへえご 幼少な子供が沢山いて、いつもわいわいしている家庭。十才を頭に五人の子供とか、親が若くてまだ幼児が居るのに、長男の嫁もどん／＼産みはじめたといった家庭の風景。

○うっそり ほんやりほどではないが、細かいことに気のつかない人物。

○うつつやりっこ 捨児。

○うずぶれ 寒がりや。醜いほど着重ね、とかく火のそばにばかり寄りたがり、働くのを厭う人。

○うらへら 表裏のある人物。

○えもち 家持隠居の略。隠居があととりを立てゝ一家を創立した分家の称。

○おうだい 物の使い方におうようで、やかましいことを言わない性格。振舞事や手伝人等に食物等を余るほど出し、寒い時には薪炭をどんどん焚いても文句を言わない。

○おしやんぐり 反つたようなできのわるい顔。

○おぞぼか 利口馬鹿。おぞいば賢いひの方言。人並以上の才能があり本人もそれを自覚していながら、困つたことばかりしかず人物。

○おてんたら へつらいもの。

○かえりんぼう 訛ってけえりんぼう。一旦嫁して出戻っている女。

○かたばりっか 一度言出したら誰の言うこともきかないかたくなな意地っばり。

○かんしや 思慮周密な人。

○ぎご 頑固意地っ張りの性格で言動に融通性のない人、かたばりっかより始末が悪い。

○ぎすっか 自己の背景、地位、財産、教養を鼻にかけて生意気な振舞う人物の態度。

○ぎやくえん 死んだ兄の妻とめあうこと。無論弟は兄の一切の権利義務をつぐ。当人同志の意志が全然無視されることは普通ではないが、家の都合が主とされた便法である。

○きよしよっぺ 潔癖家。特に食物、食器について病的なほど気になる性格。

○ぐしよう ぐしよつたれともいい、心得てはいるが実行できない、気力の弱い性格。

○ぐれもく ならずものというほどではないが、言うことにもするところにも信頼性がなく、正業はあつてもあまり精を出さない人物。

○けち 吝嗇のことではない。風変わりで、変てこな言動ばかりする人物

○ごごうおしみ 骨の折れる仕事をいやがって何とか工夫してはのがれようとする、性格的な骨惜しみ。

○さまくや 小才がきゝ小器用なのを頼みとして、事ある毎に何とかうまく凌ぎぬける人物。

○ざつぺえ 雑輩かもしれない。分際というほどの意味で「子供のざつぺえに、生意気だぞ」という風に使う。

○じゅうくう よけいなでしゃばりや、小しゃくでませたこと。子供のくせに大人のまねばかりしたがったり、頼まれもしないのに人の世話をやくような動作。

○しよたれ なり形も、することも、しまりがなくてだらしない人物。

○しよつぺえなし つまらないことをする人物。だめとわかっていることをほんやりくりかえしたり、下らないことを無考えに口に出して人を怒らせたりする人物。

○しんたく 新たにできた分家。居宅と多少の財産を伴う。子供が自

力で持った家は村内に居住していてもしんたくといわれない。

○すたりはらい 手のつかないほど不良化した人物。いつも迷惑をか
けられる側からの評言。

○すえふるむこ でたり入ったりおちつかない婿。

○せこしり 寸暇を惜しんで働らく人。

○そっびょくりん よく間違いをおこす、早のみこみで軽はずみな人
物。

○たなつちり 出っ尻のこと。

○だぼう 役にたたい人物。

○たまか けちというほどではないが、物を使うのに細心の注意を
払い、極度に無駄をさけると共に、万一を慮って物の用意に油断の
ないこと。

○だんなかぶ 村一般から「旦那」と敬称される貫録。いくら身上を
仕出しても「何さん」と名前で呼ばれ、村中誰も旦那と呼ぶものは
無い中に、いくら零落しても村中旦那と呼ぶ家柄があった。

○ぢだま 太っているが、ずんぐりと短かく年寄りみている人物。

○ぢはえ 土地っ子ということ。

○ぢゃきぢゃき 名実伴った一流の人物。

○ぢゃん 父親を子供の呼ぶ名、母のおつかあと共に、これが農村
の一般で、おとつあん、おつかやんは、少数の上級家庭に限られ
ていたが、今は共にすたれて、かあちゃん、とうちゃんが普通にな
った。

○ちようせえぼう お人よしをいいことにして、大勢が無遠慮に利用
する人物。いやな仕事。面倒な仕事をみんなおつかぶせる。

○ちよちよう 軽卒で物好で、しなくてもいい仕事に手を出しては失
敗する人物。

○ちよろつけ 目のはなせないほど、小まめにうごきまわる子供。

○づわる 陰険、意地悪、薄情等によって、とかく警戒を要する性

格の人物。

○つっかけまんが お互の責任なのはわかってはいるのに、自分だけは
免れて誰かにやってもらおうとつとめること。

○てくねえ 片手不自由の人。

○でびてえ おでこ。

○どうけ 馬鹿にちかい愚かしい人物、道化ともちがふ。どうすけ
ともいう。

○としよりこども 老年になると子供のようにはにかえるというこ
と。

○なんかん むつかしもの。何にでも必ず文句があつて承諾させるの
に骨の折れる人物「なんかんばあが、やつと折れた」

○にせえ 青二歳の略らしい。若者を未熟者と押えていう。

○のうてんき 普通のものならばあぶながつて手を出さないことを平
気でやる人物、無鉄砲とも山かんともちがう。

○のつきらぼう 人前に出てあまり腰をかめない無骨もの

○のてつくり 向う見ずの無鉄砲。あぶな知らずの実行家。かなわ
ない相手とわかつてはいるのに喧嘩を吹っかける人物。

○のんぐり 大事が目前に迫っても、それが兆候だけではそれと気が
つかないといった鈍感な人物。

○はってんか 一軒の家でも集団でも権力家が二人以上あつて、何に
つけてもまとまりのわるいこと。

又、一人で何もかも引取ってきりまわすことを「はってんかきら
す」という。

○はとこ 親同志がいとこの場合、つまり、またいとこのこと。家
同志の間に別な深いつながりがない場合、親戚づきあいははとこに
はなくなってしまう。いとこ、はとこは道端の犬の糞という。例え
ば、祖母の生家だけは、祖母の甥の子の代でも祖母の健在の間幸不
幸の通知をするが甥の子が嫁に行くまではつきあわれない。

○はなつばろ 食意地のいやしくきたないもの。

○ひけつとり 鶏の一羽が何かの事情で仲間はずれになり、餌を食うにも遊ぶにも仲間と一所に振舞えなくなったのを言うのだが、転じて、何事も控へ目に遠慮勝ちの態度をいう。

○ひだりっこぎ 左利のこと、みぎっこぎは用いない。

○ひょうげもん 固い約束、申合せを急に大した理由もないのに破る、不測な人物、あてにできない「きゆうにひよげちやって」と動詞にも使う。

○びり 順位の最後。びりつけつ。びりつかず、ともいう。蚕の上りそこないの不良や、男女私通事件にもいう。

○べこ 順位の最後。しっぺこ。

○へだつたなか 一家親族中の血縁のない間柄。ぎりぎりの問題になると、つなりの強さはしんに及ばないものと信じられている。

○へんぼらい なまあって「へんぼれ」入用で困っていると思つて物を贈れば、つり返すといつた変りもの。

○ほつくそ 急に身代を仕出しながら、衣食住の一切が昔の窮乏時代の状態を少しも改めないもの。農業で作る物資は有り余り俵等は土間に山と積んであつても、食器調度の類は余分のもがまるでなく臨時に来客等あれば近所へ借りにいくといつた家。ほつくそだいじん。

○ほつとれ 老いて役に立たなくなった人物、来元は卵を産まなくなつた老雞の称から転じたもの。

○みためし 親が伴の嫁を入れるのに不安な場合の条件で、わるかつたら一定の期間内に破談にする不安定な嫁。「一年間はみためしというこでやつときまつた」

○みより 親戚、血縁関係一切を包括する語。何かの縁のつながりのあるものは総てみよりである。

○むてっこじ 無鉄砲で意地張りの人物。周到な準備工作を面倒がっ

て一挙に無理押しにやる人物。年端も行かない子供に思い通にやらせようと大人も堪えないような折檻をするような親。

○むふつきよ 無口で無愛相な人物、その裏には好人物を暗黙に承認されている含みがある。

○めしくいともち 老年になつて公然とはあるが非公式に容れた配遇者。

○もうぞうもん つまらない非常識なことばかりやる人物。もうぞつことという語もある。発明工夫も成功して人を驚かすに至らず失敗ばかりしている中は、もうぞつことと評される。

○もかもか 人をだましてはうまいことをやらうと、いつも企らんでいるような人物。

○もちあいじんしょう もらつたでもなく、くれたでもなく、男女両方で持寄つて作つた家庭。であいじんしょう。

○やきもちっこ 子の無い家庭で養子をもらつたあとで生れた実子、養子をもらうとこれができるといふので実子ほしさにわざともらうといふこともある。

○やせつほね 労働に慣れないものや、病身のものが、止むを得ない事情で重労働をする時に、その様子に同情していう。

○やぶれまんが やけ気味の乱暴な言動。相談事をぶちこわすために非理は承知ではく暴論。

○やゝんが 条理の通らない言動。前項とちがひ、本人には不条理の自覚がない。

○やろろ 野郎、男の子のこと。やろろの癖にとか、家はやろろべえでとかいう。

○よくつたかり よくばりのこと。

○よどれ 1、品性のよくないやくざなもの。2、役に立たない人物や物。

○よめご 嫁のこと。姑の健在中は何人の子の母となつてもよめご

である。

○わかいんきよ 子の方が親を家に残して別居すること。普通一家の折合が悪く、風波の絶えない時の窮余の方法で、いいこととは考えられていない。大てい嫁姑の折合が原因だから、嫁の里からの仕送りがないと続かない生活である。

○わたりもん 何処の馬の骨ともわからない素性不明の外来者
○わる 不良人物。

調査こぼれ話 (8)

村人足

むかしは村人夫といった。仕事としては、道普請・堀さらい・神社や寺の屋根替えなどがある。最近では、時期などについては、伍長があつまって区長とともに相談してきめている。

かたいことをいってもなか／＼実行できないので、懲罰はない。費用は等級わりで割りつけて、区費として徴集する。

村人足にはよんどころない事情のほかは出る。人足に出れば現在では五十円支給している。やむをえないときには女でも出た。

堀はらひは春の彼岸頃した。湘大雨がふると堀がかぶってしまったので、排水堀をはらった。このときは、竹の先に鎌をゆわいつけてほり草を刈った。これももがりといった。

道普請は村道までした。

海老瀬地区では村人足のことをヤクといい、誰がでてもしっかりた。義務ヤクということがある。

(大曲での聞き書)

(井田)

調査こぼれ話 (9)

性信上人坐像発見

調査第一日、女子美術大永井信一教授等の彫刻班は思わぬ大きな発見をした。それは、大木板倉宇大同の宝福寺太子堂から性信房の坐像が発見されたことである。

この像は、木彫坐像で破損度もひどいが、体内銘と底板銘で鎌倉時代の作が立証され、真宗関係の像として貴重である。更に親鸞上人の妻恵信尼の記した日記の「佐貫というところで云々」のことも親鸞回心の場所として問題にされたところであるが、この地方に親鸞が関東でもっとも信頼していた性信の像が発見されたことはその裏付資料としても貴重である。次にその判読し得た銘文を記すと左のとおりである。

底板の銘文

上野国佐貫庄板倉法福寺先師横管根「性信上人御影第三度御彩色畢」

三度□□□延文六年辛丑二月十八日

為御師□□□仏菩提弘化三丙午年 浅草報忍□□町田十兵衛

体内の銘文

応永十六年癸丑三月廿八日第五ケ度採色畢

住持英忍修之 壇那妙海

御彫肖貴命□作□□□□

全□真別□□佐貫氏□□□□ 良有光□□

文明六年十月廿八日修之住持榮□□□

明徳三年壬申十二月八日第四ケ度採色畢

住持英賢修之堂□□

壇那佐師作俵有美縁子細有懸図

□□□儀大功之間如形施丹青者也□□□□

空忍□□□□

(近藤)

伝説・怪異・禁忌

長良様

邑楽郡の東南部には長良神社（又は長柄）の分布が多い。藤原長良なる中央の公卿を祭神とし、土地とその人との関係をやや無理に結びつけて説明して居るが、私は久しくこれは「長柄の人柱」の伝説が流入、定着したものが成長したのではないかと疑っていた。しかるに最近、近藤喜博氏が見事にこの事を説明つけられたので永年の疑問を一時に解き得て喜びに堪えなかつた。

しかし乍ら同地方に実際に長良なるものが治水の為め犠牲者となつた伝説があつたならと思つて、今回の伝説調査に注意していたのであるが、幸せにもたつた一話であるが之を採集する事が出来た。海老瀬の下に於て一老人の言に洪水を防ぐ種々の方法を述べられた中に、「堤防を作る時にナガラ様を入れると崩れないようになるので、いよ／＼の時はそうしたという。」と聞いた。これこそ、この利根、渡良瀬の合流地域に多くの長良神社の存在を解く鍵であらねばならない。多年の洪水の暴威とその惨害は幾多の防禦方法を考えたであらうが、畢竟は人力の限りを尽し、神秘の力にすがる迄に至つたに相違なく、堤防の人柱は現実に行われたものと私は信ずる。その人柱が神として仰がれるに至るのは当然であつたらうし、中央の長柄の人柱の説話の流入と共に、この犠牲者はナガラ様という代名詞によつて呼ばれたのに相違ない。これが長良神社となり、その祭神が歴史的人名に置き替えられた（その間に勿論長い年月と、平和時代の分社の多くが生じた後）のは時間の変化による結

果に他あるまい。

石亀

叡谷の安楽寺に光明真言を刻んだ立派な石塔があり、その台石に大きな石亀の姿が刻られている。これは銘文から云つても時代から云つても住職御自身も云われているが光明真言の供養塔以外の何物でもないのであるが、水害過多の土地らしい伝説が出来ている。

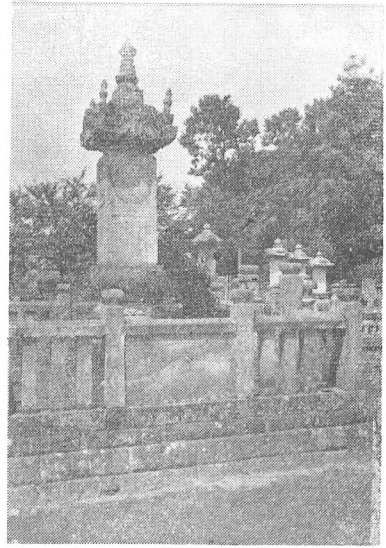
伝説 寛文年間（塔に寛文十一年の記銘がある）荒井常右衛門なる漁



叡谷安楽寺の亀のこ様
（宮田茂撮影）

師があり、早沼（ヒヌマ）に金の光の立つのを見た。側によつてみると、石の大き亀であつた。奇瑞として村民と共に上げて安楽寺の境内へ祀つた。其の後又大水があつた時、この亀が

今井善一郎
上野勇



「洪水に浮出た石亀」にのる
金光明真言塔

浮き出した。多くの
人と共に光
明真言を唱
えて元の処
へ祭り上げ
た。動かぬ
様にと上に
大きな石塔
をのせてお
さえた。こ

の時亀に万能（農具）をつきさして引きよせたという穴が、今も石亀の尻の方にある。

この石亀は風邪の神様で毎月一日及び三月十五日が縁日で、焼き餅（ウドン粉か米の粉をこねてやいたもの）を上げ、竹筒に酒を入れたのを供えなどした。又オミエ（絵馬）なども多く上っていた。

この光明真言の立派な石塔はおそらく水害の鎮圧を祈念して立てられたものと解されるが、その年号から云っても、この説の発生は余り古くないものと解され、そのストーリーメーカーも大凡の方向がうかゞえるように思われる。それは隣村赤羽に楠木正成の首級を祀ったという楠木神社の旧別当宝秀寺がこの安楽寺の末寺であり、安楽寺にも楠木様の首をかくしたという話があるという点などからみて、一連の説話運搬者がこの地に住んで居たという推測がほのうかゞえるのである。楠木神社は旧名野木神社である。

行人塚

行人塚は現在では伝説というより、信仰史の史実として研究すべきものとなっている。しかし文字に記されない史実は伝説の発生が容易で、

やはり一部分は伝説化されて語られているものが多い。

現在邑栗地方の山岳信仰には富士信仰が多く、これはおそらく徳川期の中頃から流行したらしく板倉町にも数箇の富士塚と浅間神社が存在している。しかしその以前又ある期間は富士信仰の流行に移行する間、出羽三山の信仰がこの地方にやゝ弘通していたものと思われる。その証明が行人塚である。

海老瀬地区中新田の長良神社の小丘は元來行人塚であったろう。その塚辺に遺存する古石碑には正徳から、宝曆、明和、寛延の頃迄、賢海、胎藏海、正海、金剛海等戒号に海字を用いて明らかに羽黒行人たる事を示している。又一生仙行とか別行とか称しておそらく穀断ち其の他の一生の戒行をつづけた行人のこゝに住んだ事を証明している。

こゝの行人塚は外に行人沼が存在している。これは行人が永年かゝって築いた堤が基礎になった池で、洪水に対するこれら宗教家の苦辛の様が偲ばれる。故老の言に行人が堤を守る一つの手段は経塚の作製であった。小石の一個に一字ずつ経文を書いて埋め、その功験によって堤防を守ろうとするのである。行人池の畔にはその遺存も認められた。今一つの方法は人柱であったらしい。所謂ナガラ様になるのは行人の仕事であったという。板倉町に行人塚の多いのはこの種の特種原因のある事は認めてよいかと思う。

大荷場の行人塚はその部落の南方の田の中にあつた。今、大日如来らしい像を彫った小石碑が残って居り「為長海菩提、千時延宝五丁酉年拾月吉日」とある。この塚は昭和五、六年頃開田して平にされたがその時錫杖、硯、摺鉢等が出土し、摺鉢の中に文字を書いた石が出たという。石碑からみると墓地の如く、石経から見ると経塚の如くも考えられる。伝説は中山長兵衛なる京都の公卿（という話）が流れついて、こゝで修業しながら死んだという。この行人様は数十年前は賽者非常に多く、念仏講中等も特別の和讃迄作って之を信仰し、堂宇も作られた程であつたが、今はむしろ忘れられて田の中に孤影を立てゝいる。これも遺物から

みておそらく何かの念願のための信仰遺跡にちがひなく、勿論羽黒行人の仕業である。おそらくはやはり治水と関係あるのであろう。

高鳥の行人塚は村の馬捨場という最も嫌悪されるような処にある。しかしこれは後者の地に前者が作られたのでなく、前者の跡の淋しさが後者に用いられたのであろう。今も荒蕪の草原に廃棄された地蔵が臥れている。この製作された寛延の頃は寒念仏供養の為に作られたのであるが、それでも古い行人の精神遺跡は「諸定に入って苦を離れしむ、衆生を度して能く引導す」と僅かに台石の額銘に読みとる事が出来る。即ちこゝでも行人は定に入って衆生をわたす行跡をつんだのであつたらうと推測されるのである。こゝには伝説は煙滅していた。

自理伝説

行人塚に所謂行人塚伝説（自理伝説）が認められなかった代りに、他に一つ自理伝説を聞いた。但し、疑うらくはこれも亦行人塚の一つであるのではないかと思う。

伝説、大曲りの大日堂の北に三ヶ月様が祭つてある。こゝに祀られている人は大塚某氏の祖であるが、土中に生き乍ら埋められて「念仏がやみ鉦の音が絶えたら死んだと思え」とて入定したという。

青竜権現（一峯神）

権現様の正体

峯の大塚某氏の祖先の家に美女が訪ねて来て、泊めて貰いたいと云つた。泊めてくれれば家を栄えさせてくれるという。泊めた夜、見るなどいうのに見たくなって、その娘を見たら白い大蛇であった。それからその家は栄えなくなつたという。

◎この伝説は神婚説話が崩れたものと思われる。

鶏 禁 忌

峯の権現様は鶏を嫌う。峯の部落では鶏をかわない。飼うと蛇が出てのんでしまう。この部落は雀も住まない。神社にあげた散米（オサゴ）

もなくならずにある。

赤 不 浄

権現様は赤不浄が大嫌いである。女人の月のさわりの時は参詣してはいけない。学校の先生が御参りしようとして恰度月水中で石段を上れなかつた事がある。

又、出産のあつた家では二十一日間参拝出来ない。鰻西の神主さんが、こゝで拜んでいる中に急に寒気がして来ていられなくなつたので家に帰つたら赤ん坊が出来ていたという。

権 現 沼

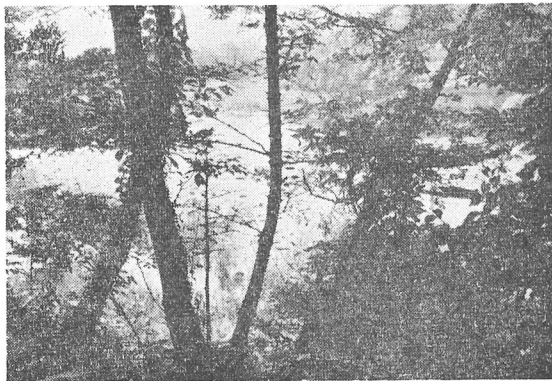
昔、大水があつて、あちこちの山が崩れたり流れたりした。椿の流山はその時流れていった山で、残つたのが離れ山となり、その跡が権現沼となつた。

△こゝに青竜権現の伝説と伝承をよせてみたが、この外、別記の椀貸し、ウナル木、竜灯籠等もこの権現関係の伝説である事を付記しておく。

椀 貸

峯の一峯神社の御手洗（ミタラセ）に膳棚という処がある。小さな池であるが、こゝは椀、膳やお椀を貸した処で、何人前貸してほしいと紙に書いて、この池の崖から投入れると必要なだけ貸してくれたという。

山口某という家で椀の蓋をとつておいた処、その後貸さ



「椀貸伝説」のある膳棚のある沼

なくなつた。その家は火災にあつたが、その椀の蓋は今も残つてゐるという。

同一の話は又次のようにも伝えられている。

峯の権現沼は竜宮へつゞいてゐた。その膳棚という処に大きな亀が住んで居り、膳碗の貸借りをたのむと竜宮から運んでくれた。ある家でオヒラのカサ（蓋）を記念にしまつておいたところ、その後亀が出なくなつてしまつた。

弘法

九十九谷

昔弘法様が霊場さがしにこの土地に来た。八十八谷あれば霊場になるので、霊場にされては困るので、アマンジャクが一谷かくした。弘法様が勘定したが、八十七谷しかないので、八十八谷ある高野山へ行つて霊場を開いたという。

海老背

弘法様が霊場さがしに来た時、アマンジャクに谷をかくされたので、渡良瀬川が余り広くて越せなかつた。困つていたら、一匹の海老が出て来てその背中にのせて、今の頼母子の辺から藤岡の方へ渡してやつた。そこでこの辺の村をエビのセというのである。

戌の日

島での云い伝えによると、この辺で戌の日に麦まきしないわけは、昔弘法様が支那へ渡つて麦を見て、余りめづらしい作物なので（その時分日本に麦はなかつたという）種をもらつてこようとしたら支那では許さないで内緒にフンドシの中へ入れて来た。それで麦にはフンドシがかゝつてゐる。その時犬が吠えたので止むなくその犬を殺して種をとつて来た。その為め今も戌の日に麦蒔きしない。この日に麦蒔きすると麦畑を犬が踏み荒すという。

蚊の住まぬミツカ

板倉地方には洪水時避難場所である水塚は非常に多い。水塚は平常は格別の工作物たくたいの小山となり、木殊に竹の生えているのが多い。従つて大部分の水塚は夏は当然蚊が多い。この中にあつて中新田の小林利郎氏方の水塚だけは不思議に蚊がいない。

これは昔弘法大師がこの地方に来た時、小林氏方の水塚に一夜の宿をとつた。しかるに蚊が多くて眠れない。そこで弘法様は加持してこの塚に蚊をいなくして下さつたという。それ以来この塚には蚊がいないのである。

枝垂桜

山口の学校へ前の枝垂桜は弘法様の生き枝という。弘法の杖をさしたのが根ついたのである。

忌み田（聖田）

ジャボン田

中新田字三五郎にある田。この田を買い又は耕作すると運が悪くなると思はれてゐる。この田を買つた人はよく寺を頼んで供養などしたが、やはり不幸が多かつた。ある時代は青年が作つた事があつたが、支部長さんが死んだ。土地改良をしたが、誰もがきらつて、換地の際にも少しでもこの田が自分のところに入るのをきらつて、この田だけは昔のままの形になつてゐるといふ。今は松安寺で作つてゐる。

伝説には、昔この田に堀があつて、その堀で六部がのたれ死した処だといふ。

富士見田

靱谷の字堀前の中にある。古く富士塚があり、石宮もあつた。二坪ばかりの池が残つてゐたが、その周囲に田があり、一頃は柳が生え旗など上られてゐた。

この田を田植えする時濁り水に富士山の姿が映つたといふ。この田も耕作者や所有者に不運を与えるといふ。二、三年作つては他に移る場合

が多い。某針医が買った事があつたが、娘が馬鹿になり血統が絶えたという。

なお、靱谷の隣の石塚での伝承によると、ある坊さんが諸国を漫遊して修行中、ここで病気で死んだ。供養してくれる人がいない。坊さんが死んだところに田圃ができ、そこをつくって供養してもらうために富士見田という。この名のいわれは、坊さんの死後を供養してくれたならばぶじに田圃がつくれるといういみ（カード）。

エンギ田（ジャンボン田）

石塚から飯島へ行く途中にある。昭和六年に千江田村の人の立てた「禪山大神」という石碑が立っている。この田は既に伝説は失われているが、これも奇妙に不運のまつわりついている田で、その不幸の状況を記すと、Aは息子が死んでBに売り、Bも亦子供が死んでCに売り、Cは内儀さんがポックリ死んでDに売り、Dは親と内儀が死に、Eに渡るとその内儀さんが半年程病んだのでFに売り、Fは買ったが内儀さんに死なれてGに売ったという。これはごく抽象的に記したのであるが、信仰と心理作用の重複はこの種迷信を極度に重複させている。

インネン畑

これは樋の口にあり、つぶれ屋の跡で墓碑が二、三本ある。やはりインネン話がついていて手を出す人がなかったが、N氏が耕作しているが現在は何の不幸もない。一反五、六畝の畑である。

◎樋の口にメクラッパタとて之を作ると盲目になるといふ畑の事を聞いたが、右のインネン畑との関係を知らない。

◎大久保にもイミ田のある由。

不幸田（海老瀬北）

百五十年位前、鉄玉坊なる者居り、此の地に堂宇を建立して住し、信徒二十名余、しかし住職と折合いわるく、信徒に土地を与えて立去つた。この土地を耕すものに不幸たえず、今は正明院の所有となつてゐる（カード）。

異 樹

下新田の百日紅

下新田にカイン坊という僧の杖が根ついたといふ百日紅がある。

ウナル木

峯の一峯神社の太木にウナル木があつた。日が暴れるとウナリ、夜があけるとならない。戦争の央頃からうならなくなった。これは蛇がうなるのだらうといふことであつた。昔は白い蛇が住んでいた。

竜灯の樅

野木の明神様（栃木県下都賀郡野木村には七人の娘があり、七ヶ所の神様に祭られてある。青竜権現もその娘の一人なので明神様は馬に乗つて娘の処を廻ってくるのだが、その明神様のお帰りの時にはこの権現様の樅の木の上に御灯明があがる。これは明神様が娘にあいにきたしるしである。明神様には乳の形をしたこぶの出来る木がある。

ボデの木（菩提樹）

風張にある木で、高野山からもつて来たといふ云い伝えがある。周囲は畑で墓地が一方にあつた。この木は切れば勿論、落葉や枝をとつても不幸がくるという。近年こゝに用水堀がほられたが、この木はさけて通つた。堀ろうとして子供がヤケドした人などもある。今の木は古い木のヒコバエであるといふ。

菅原道真の伝説（高鳥）

その一

ここの斎藤屋敷の人は絵かきであつた、その人が菅原道真公のおすがたを二幅かいた。ところがなんとしても目が入らなかつた。それで二十一日間天神様に願をかけて断食をした。そして、わしの目と道真公の目を入れかえてくれといつた。二十一日たつてその絵に目が入つた。ところがまもなく絵かきの両眼がつぶれたといふ。

齋藤家には現在道真公のおすがたが一幅ある。三十三年目ごとに御開帳のとき、御神酒をあげると、おすがたの眼があかくなるという。

(小野田平一氏のはなし)

その二

もと神心がさかんだったころ、二十一日の断食をして、毎晩丑の刻に高鳥天神にお参りした(これはどこの人だかわからぬ)。二十一日の満願の夜、その人がお参りに来たとき、天神様の大門の梅の木の枝に白装束の人がいて、その人が、どこへ行くのかと聞いた、その人が、こういわけてお参りに来たという、白装束の人は、おれは道真だ、といった。そしてここから帰っていいという。その人は折角来たのだからお宮へ行くというと、白装束は二人で行こうといって、お参りし、お参りすると同時に白装束は消えてしまったという。そのとき、その人は身の毛がよだつおもいだったが、それで、願いがかなったと思ったという。

(矢島福次郎氏のはなし)

(以上二話、井田)

足利尊氏の子孫(靱谷本郷前)

足利尊氏の家臣が飯島山におちのびてきて、ここの土地に住みついたといわれている。そのためここには、丸に二つびぎの足利の紋がのこっている(カード)。

増田氏のこと(岩田本合)

この辺に増田の姓が多いのは、豊臣秀吉の五奉行の一人増田左衛門長盛という人が、関ヶ原の戦いにやぶれてこの辺におちついたためという(カード)。

大荷場の富士山のうつる田

浅間様の所の田に水があつて、そこに富士山のかげがさしたという。(カード)

天神様の赤い石

高鳥宿の、いま畑になっている所に稲荷様がまつつてあつたが、毎年流されるので高い土地をもっていくのだが、金がなくて土地を買えない。そこで稲荷様の土台の赤い石を天神様に買ってもらつて引越した。今でも天神様の庭にその赤い石があるという(カード)。

おとうか山(岩田鷲替)

今から七年前、土手があつてそこにおとうかの果が沢山あり、そこをおとか山といつていた。今では稲荷様をまつつてあり、夜なきの稲荷様と呼んでいる(カード)。

天が堀(西岡と新田の間)

天の天の川が移つてできたのが天が堀という(カード)。

オトウミヨウ

栃木県下都賀郡の明神様(野木神社)と一峯様は仲がよく、十一月二十七日にお客に出かけ、十二月三日にお帰りになる。この時一峯権現の境内にあるモミの木の頂上にお燈明があがるという。

チ　　ヅ　　ク

一峯権現は血伏をきらい、女の月のもの時は石段までしか行けない。これ以上行くと下駄が割れる。昔神主さんが神社で寒けがしたので帰ったら孫が生れたこともあり、学校の女教師がお参りしようとしたら途中で下駄がかけ、借りて出かけると石段を一段上ったところでまたかけたという。

狐の泣声

峯では不思議なことがある時は狐が三回堤防でないた。これは富士講

の先達がいたので狐がついてきたためであろうという。今でも狐のメド（穴）が残っている。

再 生

埼玉県小室の財産家の壇那が死んだ時、足へコムロと書いて葬ったら栃木県へくれた娘の家の犬の足の下にコムロと書いてある犬が生れた。三、四才の子供が死ぬと、粟を一握り入れてやり、その勘定が出来ないうちは生れてくるんじゃないよといってうめた（原宿）。（以上近藤義雄資料）

オトカ 昔はよくオトカにばかされた。某が佐野の高橋へ粉ひきに行っておそくなって、山崎屋の所まで来ると、お湯に入りたくなかったので、車をおきっぱなしで、「ぬるいや、ぬるいや」と裸になっていると、「なにしてるんだ」と声をかけられ、たまげて家へ帰った。

油揚げを持つてるときととられた。

オトカがヒヤールと弱くなる。

月夜の晩に、自分の先の方を、いい娘が通る。曲り角に来ると、消える。それからがおっかねえ。一緒に行くけれども、何としても追いつかねえ。

夜道を歩いていると、いつの間にか蠟燭をとられる。煙草をいやがるので、役場につとめている時、ゴロヘドン、ゴロヘドンと声をかけられた。出たなと思つて、煙管で煙草をのむと、あたりが見えて来た。

オトカは前、むじなは後にいただきます。（離）某が夜、ひとりでおそく帰って来て広いやなかを通った。道が途中で判らなくなつた。どこへ行つても、家の方の道に見え、どう考えても判らない。一晚中茅の中を歩いていた。夜が明けて、ガンづいた。着物が左前になつて来た。

魚を買つて来るととられる。

オクリイタチ たちが送つてくることがある。

キツネノヨメイリ 夜遠くの方にちらちら火が燃えている。出世前に見

なければ見ない。

ヒダマ 人のタマセが出る。ヒダマがとぶと、一、二日に死ぬ。青いノロを引いて横に行く。

ヒトダマ・カネダマ ノロを引かない。うなる（北海老瀬）

オトカ 秋の彼岸ごろ、秋蕎麦の中を、オトカにまやがされて、「おお深え、おお深え」つて、沼ん中歩くように、昼間歩いているものがあった（浮戸）

むじな むじなはしつぽで戸を叩く。「誰だ」つても返事がないのが、むじなだ。

むじなは、死ぬまでマヤカス。

むじなに、カツキをふっかけられると、つかれる（種之口）（以上上野勇資料）。

III まじない

○ミケゴ （ものもらい）みを半分水に見せる。

○ヤンメ 唐辛子、大豆、綿などで目をなせて、さんだわらにのせて、送り出す。

○おこり 朝早く起きて、さんだわらの上で、三度ぐらいドンデンゲエリスル（ササラケエル）と、おこらない。

たまがすとおこらない。

○しゃっくり たまがせばいい。

茶碗の上に箸を十文字において、四方から水をのむと、ハシノシタミズをのんだのでなおる。

○かくらん 胡瓜のしんを足の裏につける。管笠をかぶせ、水をかける。

○ライサマ 軒下に草刈鎌を、竿につけてたてた（離）

○おこり 先達様に拜んでもらう。

○コーデ 手つくびに炙をすえる。

末っ子に麻糸でしばってもらう。

五霞村の一色様の麻糸を借り、なおると倍にして返す。

○ヤンメ 唐辛子と綿で目をなぜ、棒のさきにし、道ばたに送り出す。

○え ぼ 米をつけ、ながしに埋める。

盆様のおがらでつく。

○うせもの オカギサマをしばっておく。見つかったらほどく。掌につばきをつけ、指ではじき、つばきのとんだ方をさがす。

○バヒカゼ (ジフテリヤ) 馬という字を、三つさかさに書いてはる。

○やけど 「猿沢の池の大蛇が、やけどして、水なき時に、あびらおん」と、三回唱えて、息を吹きかける。

○落雷よけ 正月様の繩をもすと落ちない。

○イチバンガネ 賀茂神社のかねを、イチバンガネといって、最初に叩くと縁起がいい。

○家鴨の卵を食べると中気にならない。

○トロイモを食べた茶碗で茶をのむと、中気になる。

○宇都宮の羽黒山から、糲種を借りて来てまくと、こくがとれる。

○乳の出がわるいと、のぎの明神様に願をかける。

○と げ 大越村外野の地藏様に申し上げる。

○夜泣き 古河の田町の稲荷様の枕を借りて来る。箱枕の俵のようなもの。泣きやむと、二つにして返す。(北海老頼)

○雹が降ると、釜のふたを外に投げ出す。

○落雷よけ 長竿に、鎌と碗とをつけてたてる。「カマワン」という。鎌の刃を上に向け、ぶつきるようにする。

線香を立てる。

田にライサマがさがると、早く見つけて、雷電様から、ハッチョージメをもらって来てはる。かまわねえと、葉が赤くなるのがひろがる。

○かくらん 親が管笠をかぶせ、三杯井戸水をかけるとぬける。

朝っぱら早く床をはなれて留守にする。

○おこり 新しい仏の七本木を、人の知らぬ間にとって来て、寝ている人の枕の下に、知らぬ間におっかう。

若荷のきに針をさす。

夜氏神様へ行つて、ドンデンゲエリをし、デヌケマイリといって、行った道を帰らない。

ねぎ畑に入るな。入るとひつかえつて来る。

たまがす。

笹の葉をまげておく。

水害がなくなると一緒に、おこりもなくなった。

○はやりめ 豆をいったのを、おひねりにして、目をこすりながら行き、行った道を帰らない。

着物の下ん前を、目だといって縫う。「なおればぬぎます」といって三針ぬう。

○ミケゴ つげのくしで、目のそばをこする。

みを半分、井戸に見せる。

みをかぶると出来る。

○バヒカゼ 馬頭観音を、七場所ぐらい廻る。かからないように、赤い紙に、馬の字を三つ書いてとほぐちにはる。

○い ぼ 竹の上下にだんごをつけ、地藏様より高くしてあげる。

○夜泣き 屋敷稲荷に、豆腐をあげる。

○うせもの カギツルシを、かんじんよりでしぼる。

○かやの実は、十二指腸のくすり(浮戸)

○トリセキ(百日咳) みにく橋の水のあかを、とって来てのませればなおる。

柳生の明神様の麻を借りて来て、まけばなおる。

○コーデ 末の子に、たてまいの時の麻で、はしごをくぐすか、障子

のまどからしばってもらう。

○ダイバムシ あぶより小さい、しっぽの長い虫で、馬の耳に入ると、気がいのようになる。葬礼の時、四方にたてる赤い切を、たてがみにまくといいというので、葬式がすむとおととりでとった。

「大津東町」と書いた腹がけをかける。

熊谷の大桑の観音様の笹をもらって来て、馬に食べさせると、丈夫になる(樋之口)
(以上上野勇資料)

Ⅲ 禁忌その他

○ミクンチ(三九日―旧の九月九、十九、二十九日)

茄子を食べば健康だ。

○秋茄子嫁にくれるな

○茄子を食べると声が悪くなる

○白南天を煎じて食べると、声がよくなる。

○耳たぶの大きいのは金が出来る。

○獅子鼻を、かかに持てば金がたまる。悪魔よけになるから。

○歯が短いと長生する。

○井出では八っ頭を作らない、作ると主人が死ぬ。

○大曲、大荷場では、とうぎみを作っちゃわるい。八幡様が目をついたから

○海老瀬では、鶏をかわない。鶏の餌にするんだといって作ったが、すぐやめてしまった。

○海老瀬、北村では、餅つきに、ネネッコをつぶしたとか、火事になつたとかで餅をつかない。ヒゴトでも起つた時、個人だけでない。

○初午の日には、火にたたとって、風呂をたてない。

○戌の日に麦まきをするとすれば、犬の分として、三ぼちだけまく。

○はんげには、田おかの両方はしない。片方ならいい。

○巳の日には、彘をすえない(北海老瀬)。

○初午にお湯をたてると、火事になる。

○戌の日には、犬の分として、三つ株まくが、麦まきはしない。

○卯の日には、田植えをしない。

○巳の日には餅つきをしない。もしまちげえがあると、近所のでえに、何

といわれるか、そのうちに火柱がたつ(離)

○イスス(石臼)にのると、背が伸びない。

○盆に水浴びると、かっぱにひかれる。

○さといもを作らない。まじったといつて作るものもある。

○初午に湯はたてない。

○はんげに、田植えをしない(浮戸)

○道祖神がびっこで、とうもろこしのかげに隠れて、弁天様を追っかけてので、とうもろこしを作らない。

○新井では、とうぎみを作らない。

○谷新田、飯塚では、ねぎを作らない。

○北村では、きみを作らない。畑にはえてもわるい。

○峯では、鶏をかわない。権現様の蛇をかつちらかす。

○青大将を殺さない。しまへびは見かけ放題殺した。

○いたちに、道をきられるとわるい。

○いたちがふりかえつてみると、マミヤにつばをつける。

○掌に字を書くもんじゃねえ。

○胡瓜の丸切りは天王様の八坂の紋と同じだから食べない。(樋之口)

(以上、上野勇資料)

言語関係資料

上野 勇

一、方言

○「板倉シイシイ、海老瀬ナイナイ、西谷田ゲエゲエ」といって、字の出来ない人は、

ソオダシイ、アノシイ

ソオダナイ、アノナイ

ソオダゲエ、アノゲエ

というふうにいって、有線(放送)が出来てからシイだの、ゲエだのといつたのでは、かからないから少なくなって来た。

○高崎の兵隊に入った時、「エエラ暑イ、エエラ寒イ」というように、すぐエエラ、エエラというので、邑楽郡ではなくて、エエラグンだといわれた(離)。

○マサカ マサカ暑イ マサカ強イと、マサカをよく使うので、「マサカって坂は、どんな坂だ」といわれる(北海老瀬)

二、農業

○オヤシラズコシラズ 田が遠いので、朝めし前にのらに出て、星が出てから帰って来るので、いそがしい時は、親子が顔を合せなかった。

(浮戸)

○ムギノテツポオカツギ よくつけないで、真中に黒い筋のついている

麦。

○クサル 昔は田にヒヤッタラ最後、ウジョウジョひるにつかれた。ひるが血を吸って、唐辛子みたいになって落ちる。今はひるがいなくなっただけでもいい。背がちいさいと、へそまでクサッタ(ぬれた)稲が水をかぶると、バサラッてねちまう。水が出ると、ところどころに、ピロンピロンと残る。

○ユギリッコロシ 昔は一日に二度夜なべをする。朝も暗いから。その苦勞を人に話すこともなく、ユギリッコロシて死んだ。

○シゴミ 湛水。シゴミでとれない。

○ガツツアラ ブツツアラ ボツツアラ 今は動力だからないが、稲麦の穂のよく落ちないものをいう。

○ヤヤンゲ 今日(今日は)寄り合いで、上も下もねえ、ヤヤンゲになる。麦が倒れて、ヤヤンゲになる(北海老瀬)。

三、行事その他

○イキトオバ 三十三年忌の時、椿の片面を削ってたてる。椿の木がなければ、葉をとって来て、他の幹につけてたてる。

○フゴツパタキ 麦まきが終わったあとの祝。

○スミツカリ 初午の時の料理、スミツカリがすむと、大根の役目は果たしたという。年越しの豆、人蔘、塩引、酒粕で作る。

○ニビタン 十月正月のおえびす様の赤飯につきものの煮つけ。人蔘、

大根を短冊形に切り、うすい醬油で煮る。イビ(海老)も入れる。おえびす様にあげたのを、「百万石とりましよう、一千万石とりましよう」と唱えてから食べる。

○ダイマナコ 二月八日、十二月八日には、だんごを作り、トボダンゴといつて、柱と壁の間ここにさす。この晩には、ダイマナコが来るから、音をたてるなどという。嫁さんにも、よなべをさせるなどというので、ネロハ(寝る早)という。

○ススナデ 十二月十四日の煤払い。前の晩に、米の粉に、中にさつまのあんを入れたのを焼いて食べ食べ、ススナデをした。砂糖がなくなつたので、縁起だか止めた。終戦がきりかいで変つた(離)。

○ヤクジンガミ 二月八日、十二月八日には、ヤクジンガミが通る。ヤクジンガミが、かごやに助けられたので、目印に、かごをたてておけば、寄らずに通る。ヒトツマナコノダンジロオが来るぞといった。ヨオカダンゴを作る(北老海瀬)。

○コトハジメ 二月八日、だんごを作る。七日の晩に、かどぐちに、長竿の先にミケ(目籠)をつけて立てる。「早くダイマンたてろ」という。ミケは、目がえれえから、鬼が来ても逃げる(浮戸)。ヒトツメダマノダンジユウロオが来る。ヤクジンガミが来て、はんこをおして病気にするというので、はきものをおっこみ、早寝をする(樋之口)。

○コトジマイ 十二月八日。オナベをおそくまでさせるのは、かわいそうだから、ネロハといつて、早じまいにした。新薬が出来る、十五夜から少しでもオナベをするものだったが、今はテレビがオナベ(樋之口)。

四、身 体

○ウマノツムジ 人の額にあるつむじ。二つつむじがあるのは、意地っぱり、きかんぼうだという。

○ドンリユウボオズ 太田の吞竜様に申し上げて、女の子も七つまで、刺刀ですつて、がり坊主にしておいた(北海老瀬)。

○チンゲ 子どものほんのくぼに残す毛。サカナクウケとも。これを残すと、さかなが食えないといつて残す。全部すると、坊主みてえだ。

○テンジンヤッコ たかとの天神様に申し上げて、学問が出来るように、ヤッコをぶらさげる。両方のみあげのところを、奴のようにすり残す(浮戸)。

○トトゲ 鼻血の時に引くととまる。いろりに子どもが、ころがりこむ時に、トトゲをつかまえて出す(樋之口)。

五、童 詞

○「ムグツチョ、ムグツチョ、ムグツチョの頭に火がついた、くぐめばなおる」
ムグツチョ(鳩)を見つけると唱える

六、しやれ・ことわざ

○雷電神社のかつおぎで、うだつがあがらねえ。

○貧乏稲荷で、うだつがあがらねえ。

○焼けた稲荷で、とりえ(鳥居)がねえ。

○オシブチあてられたように、頭があがらねえ。

○オシブチ 垣根の両側からあてるあて木。

○川向うの放れ馬で、どうともいねえ。

○ギャーロのつらに小便で、シャーシャーしてる。

○うそと坊主の頭、いったことがねえ。

○年寄りの菜びたしで、ひとつちぼりだ。

仕事がもう少しで終る時にいう。年寄りだからざっとしぼる。

○死んでから使えるのは、鯛の頭べえだ（離）

○葦切が土用に入ったようだ。

葦切は土用になると鳴かなくなるように、しゃべっていたのが、急にだまる。

○もすが鳴くみてえだ。もすが鳴くみてえにうるせえ。

○なりふりほれるなら、雷にほれる。

あんまり着飾った人がいいという、こういう（北海老瀬）。

○あたりまえの庚神様。

きまりきっていること（浮戸）。

○貧乏人の祝儀で、ながもちがねえ。

○屋台の提灯で、ぶらぶらしてる。

○密柑のだいで、からたち。

ただ立っていて一人前（樋之口）

七、なぞ

○破れ障子とかけて、継子ととく。その心は見るたびにはり（貼り）たくなる。

○屋根の上のもぐらとかけて、石童丸ととく。その心は、ちち（土・父）をたずねる。

○共同便所とかけて、出雲の大社ととく。その心は、よろずのかみがみ（紙・神）が集る。

○隣の家のあがりはなへ行っても、上らずに帰って来るもの何だ。はきもの（北海老瀬）。

○いたずら小僧とかけて、共同便所ととく。その心は、方々のお尻が来る。

○山桜とかけて、出っ歯ととく。その心は、花（鼻）より葉（歯）がさき（樋之口）。

調査こぼれ話 (10)

土用のよし切

海老瀬の堤防にのぼって見ると赤麻沼遊水池のあなたは、ぼうつとかすんで見えないけれど、見える範囲は一面の葦である。葦をヤというのか、葦の生えているあたりは、ヤチ、ヤパタケといわれている。連日の日でりにほこりっぽい草に腰をおろして、いま聞いたばかりの「土用の葦切」ということを思い出していた。いままで葦切といえば、ギョギョシ、ギョギョシと、まことにぎょうぎょうしく鳴きたてるものと思っていなかったが、土用に入ると鳴かなくなるという。それで。いままでしゃべっていた者が急にだまってしまうことを、土地のしゃれことばで「葦切が土用に入ったよう裂」という。時まさに土用。涼しい利根から、鶴のくちばしの板倉まで来てみると、一生のうちに、こんな暑いおもいをするのは何回だろうと嘆きたくなるほどの暑さだった、しかし、次第にふえて行く収穫は、暑さを上まわる醍醐味を味あわせてくれる。短いしゃれも、その土地独特のものには、いいしれぬ味がある。葦切の声を聞かない土地は、このしゃれは通用しない。

「ささらの太鼓でドッチカ、ドッチカ」というしゃれも、獅子舞が行なわれているこの土地ではいきいきしている。共同調査中、泊めていただいたのは雷電神社。二日の夜は雷雨の実演まであったが、「なりふりほれるなら、カミナリサマにほれる」ということばも、この土地で聞くと実感が湧く。あまり着かざった人がいいということになってひやかすのだろうと思うが、雷様とは深い縁のある土地である。

（昭和三十五年八月三十日、上毛新聞掲載 上野）

板倉町教育振興協議会郷土調査部

一、厄除け

(厄年の人 厄神除け)

- 大師様にお参りする。(板倉川入南)
- 厄除けに行くと言って遠くの神社に参拝に行く。(山口)
- 筑波山にお参りに行く。(東の中新田)
- 筑波山に行つて拝んでもらう。(板倉大林)
- 岩田の筑波山へ正月の十四日に行き年をとつて厄年を逃がれる。(板倉大同・靱谷薬師堂)
- 筑波山へ行つて豆まきをしてくる。(新田)
- 女三十三才の時、鱗形模様の品を身につける(帯が一番多い、また腰巻などあり)(板倉・高鳥・飯野・除川・新田・大曲)
- △形模様の着物を着ると厄除けになる。(大曲)
- 菱形模様の帯や腰巻を身につけると厄除けになる。(靱谷中)
- 年令を書き先達にたきあげてもらふ。(東の中新田・岩田)
- 雷電様でお札をうける。(板倉)
- 成田様にお参りに行く。厄除け護摩をたく。(板倉・除川・新田・大曲・細谷・離)
- 神社参拝に行き、品物をすてる。(板倉雲間)
- 雷電神社の輪くぐりに行つて持ち物を捨てる。(飯野)
- そうりやく様に子供の着物を持って行つて拝んでもらう。(板倉・靱谷中)
- お経の本で頭をなでる。(靱谷薬師堂)
- 年とり二度豆を投げる。(板倉稲荷木)
- 年に二回節分をする。(大荷場)
- 生まれ年の守り本尊のお札をうけ、肌身はなさず持つている。(岩田原宿上)
- 芸人を頼んで厄除けする。(岩田)
- 寄席(芝居とか浪花節、その他の演芸)をして厄除けする。(除川・西岡新田)
- 五十五才の時、ダンゴを五十五ヶ食べる。(五十五ダンゴという)。(全地域)
- 豆を焼いて三本辻へ置いてくる。(大久保)
- 自分の持ち物を道路に捨てる。(大久保・谷新田・丸谷・宇奈根・西岡大曲)
- 年越しの豆の中にお金を入れて、四つ辻に送り出す。(大久保)
- 節分の夜、いり豆を除年の数だけ半紙に危み、道かどに捨てる。(高鳥)
- 自分の年より一つ大きく近所の神社に行つて年をとつてくる。(飯野)
- 鯉のしつぽを入口に貼る。(飯野)
- 家の入口にニンニクを下げる。(飯野・除川・大曲)
- 辻にニギリ飯とお金を置く。(飯野)
- 神社で厄除け護摩をたいてもらう。(除川・西岡)
- 豆まきをする。(全地域)
- 村境の道路の左右に青竹をたて、ナワを一本ひいてシメを張る(ハッチョウジメという)(板倉・南地区全域・北地区全域)
- 村境にゾウリをつるす。(靱谷・薬師堂・稲荷木)
- 佐野の元三大師に行つてダルマを買つて落とす、拾つた人に厄が行く。(山口)
- 三日の日に元三大師に行つてガマ口を落す。(靱谷薬師堂)
- 元三大師にお参りし、厄除けのお札をもらい、いつも携行している。(岩田)
- 元三大師に行つて厄落しをしてくる。(岩田)
- 元三大師に悪い事が起こらないようお参りしてくる。(除川・大曲)
- 元三大師で祈祷してもらふ。(新田・離)
- 元三大師のお札を軒下に貼つておく。(新田)
- 厄除の札を玄関に貼る。(山口・板倉石塚)
- 厄除け大師様に行つて厄除けしてくる。(通り)

○節分にイワシの頭を家の入口にさしておく。(板倉川入南・細谷・離)

○家のまわりの四方にシメを張って拝む。(板倉大同)

○神主に拜んでもらう。(板倉大同西・細谷・大曲・離)

○二月八日の朝早く竹竿の先にミケをたてる。(下五箇・大曲)

○村の道角に雷電様のお札をたてる。(板倉)

○神様の姿を作りそれでもじなう。(大同西)

○病気の入らないように村はずれにぼんでんする。(板倉)

○厄神除けの百万遍をする。(岩田新田)

○獅子舞を頭にかぶせる。(岩田)

○行者に厄除けしてもらう。(岩田)

○旧の節句に耕地の若衆が数珠を持つて一軒一軒まわり、最後に村はずれの辻に厄神を送り出す。(靱谷)

○四月八日が厄神除けの日で、ササラが一軒一軒まわって厄神を払う。(靱谷)

○はまいいに行く。(北地区の新田)

○薬師様に行き、自分の年だけ豆を投げる。(大曲)

○塩を投げる(まく)。(大曲・除川)

○浅草の観音様を拝む。(靱谷)

○富士浅間様の拝みをうける。(除川)

○先達様にコンジンの様のある方を拝んでもらう。(除川・西岡)

○屋敷稲荷様へ水と米などを上げて拝む。(除川)

○だいはんにやがまわってくる。(新田)

一、長居の客

○ホウキをさかさに立てる。(全地区)

A 立てる場所

1 客に見えない所(殆んど全地域)

2 座敷の入口(岩田・樋の口・飯野)

3 座敷のすみ(大荷場・飯野)

4 隣の部屋(板倉・大久保)

5 障子のかげ(板倉・中下・飯野・島・下五箇・高島)

6 戸口(家の入口)(下五箇谷新田)

B 附属するもの、附属すること。

1 手ぬぐいをかぶせる。ほうかむり。(全地域)

2 うちわであおぐ(山口・板倉岩田風・張飯野・宇奈根・大荷場)

3 投げる(北海老瀬)

4 手まねぎする(中下)

5 着物を着せて「どうぞお客様お帰りますって下さい」と三回おじぎする(岩田)

6 座敷をはく(岩田・下五箇)

7 座敷をはく真似する(北海老瀬)

8 風呂敷をかぶせる(中下・高島)

9 着物をかける(飯野岡村)

○家の前に塩をまく。(板倉・飯野)

○ホウキをたてて下駄に灸をする。(北海老瀬)

○下駄の裏に灸をする。(樋の口・新田)

○部屋の外で家の人が何回かせきばらにする。(丸谷)

○客の靴の中に線香を立てる。(樋の口・飯野・下五箇)

○靴へ灸をする。(西岡)

三、体のよわい子供

○呑竜様に申上げて七才まで坊主にしておく(呑竜坊主)男の子は頭の後の毛を少しそり残し、女の子は丸坊主にする。(全地域)

○呑竜様にお参りに行く。(全地域)

○天神様に丈夫に育つよう祈る。(北海老瀬・岩田原宿・南地区全域)

○天神様に申上げ、七才までぼう主にする(天神ぼう主)。(山口・小保)

呂・中新田・飯野・上五箇)

○天神様に申上げて掃除当番をさせる。(板倉中)

○名前を男女とりかえてつける。(女は男の名前をつける)。(山口・峯板倉雲間・高島・飯野)

○麻の葉の着物をさせる。(峯)

○稲荷様をたのむ。(板倉)

○氏神様をたのむ。(板倉)

○頭の中心をそり、こう葉をそこにはり、毒素を吸い出させる。(靱谷)

○子育鬼怒神にお参りする。(内蔵新田)

○子育観音に行ってお願ひする。(板倉)

○行者に拜んでもらう。(岩田)

○手の平に虫の字を書く。(島)

○便所の中に竹を入れ、その竹に入つたつゆをのむ(下五箇)。

○女の子に男の着物を着せる。(飯野)

○巡礼となつて四国の金比羅様にお参りする。(除川)

○子育地藏に線香と上げ物をして供養する。(除川)

○かんまじないをしてもらう。(新田)

○ねずみの焼いたものを食べさせる。(新田)

○もちを長くとっておき、ねる前に少しずつ食べさせる。(新田)

四、子供の夜泣き

- 稲荷参りをする。(全地域)
- 稲荷様にトウフをあげる。(全地域)
- 稲荷様に油揚げをあげる。(頼母子高鳥・上五箇・宇奈根・板倉川入・雲間・靱谷)
- 稲荷様に申上げ、治ったらトウフと油揚げをあげる。(大同・石塚・大林)
- 稲荷様に小旗をあげる。(峯)
- 稲荷様にニンジン^ニをあげる。(北海老瀬、西岡)
- 稲荷様のまくらを借りてきてさせる。(下五箇・谷新田)
- 稲荷様へ赤飯をあげる。(西岡)
- 家の稲荷様をよく掃除する。(大荷場)
- 氏神様をよく掃除してお参りする。(頼母子)
- 氏神様に赤飯をあげる約束をしてお願いする。(山口)
- 氏神様に泣かないように頼む。(頼母子・中下・上新田)
- 氏神様を拜む(西岡新田)
- 氏神様に一週間同じ時間にお参りする。(大曲)
- ふじ稲荷のまくらを借りてさせ、治つたら二つ作って返す。(北海老瀬)
- 権現様の枕を借りてさせ、治つたら倍にして返す。(山口・本郷)
- 浅間様の枕を借りてさせる(峯)
- 八幡様に米を上げて治るよう^にに拜む。(小保呂)
- 八幡様にトウフをあげる。(板倉)
- 小さな枕を作って地藏様にあげる。(通り)
- 夜泣き地藏にお願^いし、治ったらトウフをあげる。(離・岩田)
- 枕元に鬼の絵を紙に書いてさかさにはる。(中新田・離)
- 鬼の念仏の絵を枕の下に入れる。(岩田・原宿)
- ふとんの下に位はいを敷きこむ。(北海老瀬)
- 仏様に線香をあげる。(本郷)
- 線香に火をつけて、それを持って家のまわりを三回まわる。(大久保)
- 子供の手の平にスミをぬる。(岩田原宿)
- トウフの角を切ってお月様にあげ、治つたら全部あげる。(川入・岩田原宿)
- 屋根屋のゾウリを借りて枕にする。(板倉川入)
- おむつを夜外にほさない。(下新田 島・大久保・高鳥・下五箇・上五箇 飯野・大曲・板倉川入・雲間)
- 子供を天井にぶらさげる。(除川)
- 押んだ紙を泣く子の下に入れる。(除川)
- 坊主に拝んでもらう。(除川)
- 大工のはいたワラジを枕にしてねる。(細谷)
- かきつるしをしぼる。(細谷)
- 手を塩で洗う。(細谷)
- ふとんの下にナイフを入れる。(離)
- 「猿沢の池のほとりに住むきつね、親は泣いても子供は泣きまいぞ、アブラオンケンソワカ」と三度唱える。(除川・西岡)
- 「猿沢のねださの下にそのきつね、昼は泣けども夜は泣くな、アブランケンソオワカ」と唱える。(飯野)
- 「猿沢の池のほとりに泣くきつね、己泣くともこの子泣かすな」と唱える。(靱谷)
- 「猿沢の池のほとりに泣くきつね、あの子泣かすともこの子泣かすな」と唱える。(靱谷松崎)
- 「浅間山の白ぎつね、昼は泣いても夜は泣くまい」と泣く子にまたがり、一息のうちに三回となえる。(靱谷浮戸)
- 「河原で泣くきつね、三声泣いたらこれ泣くな」と唱える。(板倉・石塚)
- 「しのだの森の白ぎつね、昼は泣けども夜は泣くまい」という文字の赤い字で三行に書いて、子供の元におく。(大荷場)
- 「猿しまや、猿を泣かすともこの子供泣かすな」と書きふとんの下に入れる。(板倉宿)
- 「柳の下に泣く蛙、あの子泣かすなこの子泣かすな」と書き枕の下に入れる。(岩田原宿)
- 「アブランケンソワカ」と三回となえる(靱谷下)

五、蛇に関するもの

- しようぶと餅草を屋根などにさす。(北海老瀬)
- 五月の節句のしようぶを湯の中に入れる。(頼母子)
- しようぶを方々の神棚に上げる。(山口)
- しようぶと餅草を置くと蛇が近寄らない。(峯)
- 蛇が来たらしようぶを見せる。(下五箇)
- 煙草をまいておく。(北海老瀬)
- 煙草の煙を出すと逃げる。(山口・新田)
- 煙草のヤニをつけておく。(山口・西岡)
- 「今度姿を見せると命がないぞ」と煙草の煙をふくと逃げる。(板倉)
- 正月の十五日の朝十時前に、家のまわりを水をはきまわりまくと、蛇が家の中に入らない。(北海老瀬)

○半紙をたたんでつるしておく。(下
新田)

○蛇は赤いものが好きであるから、赤
をまとわない。(北海老瀬)

○「今度現われたら殺してやる」とい
うと二度と姿を見せない。(頼母子
大曲・除川)

○線香をやすと蛇が来ない。(山口・
西地区全域・除川・大荷場・細谷)

○正月、あずき(小豆)のおかゆの汁
を家のまわりにまいておくとき蛇が
入らない。(峯)

○七草がゆを家のまわりにまいておく
と蛇が入らない。(宇奈根)

○蛇を見たとき指を三回まわす。(通
り)

○蛇のカラを首に巻く。(峯)

○鉄製のものを見せると来なくなる。
(板倉)

○半死の蛇の頭に馬ふんをのせれば生
き、山椒をのせれば生きた蛇も死
ぬ。(板倉大林)

○冬至の朝燃やした灰を家のまわりに
まくと近寄らない。(靱谷)

○行者に見てもらい除けをすと出な
い。(岩田)

○蛇の抜けがらを妊産婦のお腹に巻く
とお産が軽い。(飯野・大久保)

○親指を四本の指でつつむと蛇が逃げ
る。(上五箇)

○正月にあげたおしらきを四日の日に
さげて洗ひ、その水を家のまわりに
まく。(飯野)

○夜ほうずきをふくと蛇が来る。(大
久保)

○女の人は蛇にねらわれないように、
しょうぶ湯に入る。(下五箇)

○蛇を指さしたら、自分の年の数だけ
つばをかける。(下五箇)

○火を燃やすとこない。(除川)

○蛇の通る道に裏白の草をおく。(新
田)

○正月十五日、おかざりを燃やした灰
をとって水に入れ、その水をまくと
蛇が来ない。(大荷場)

○塩をまく。(細谷)

○氏神様を拜む。(細谷)

○蛇を指すと手がくさるから、人に手
を踏んでもらう。(大久保・高鳥・
樋の口)

△まじない以外のもの
○蛇を指すと指がくさる。(下新田
大久保・高鳥・樋の口)

○蛇の夢を見る。

1 お金を拾う、(靱谷薬師堂・板
倉川入)

2 誰にも話さないでよくと金があ
まる。(島・樋の口・飯野)

3 よい事がある。(板倉・丸谷)

4 誰にも言わないで三回おくとお

金をひろう。(山口)

5 朝誰にも言わないで、家のまわ
りを息つかず三回まわるとお金
が入る。(内蔵新田)

○蛇を食べると精がつく。(板倉)

○母屋にいる青大将で尾の切れたのを
「主」といつて殺さない。(岩田原
宿)

○蛇を踏むとげが生える。(板倉)

六、物をなくした時

○かきつるしをしる。(全地域)

A しるもの

1 縄でしる。(北海老瀬・南地
区全域・西岡新田・大曲)

2 わら(わらのミゴ)でしる。
(北海老瀬・西地区全域・南地
区一円・除川・西岡新田)

3 紙(紙をねじつて、こより)
(西地区・南地区・除川・離
島)

4 稲の穂(西地区)

5 ひも(西地区)

B しらばつてから

1 考える。

2 見つければほどく。

C かぎつるしの別名

おかまさま(岩田原宿・東地区)

いろりの神様(内蔵新田)

かまどの神様(中新田)

※「針をなくした時」と制限のあるも
のあり。(内蔵新田)

○おかまさまに頼む。(北海老瀬・山
口・頼母子・除川)

○かぎつるしをさかきにし、見つかつ
たらもとの通りになすと頼む。
(通り)

○手の平につばきを置き、指でたた
てそのつばの飛んだ方向にある。
(全地域)

○たたき方

1 一本指でたたき、つばの多く飛
んだ方向。(下新田)

2 二本指でたたき。(山口・中下)

3 三回たたき。(板倉中・稲荷木
岩田原宿)

○棒を立てて倒れた方向を探す。(中
下・板倉雲間・岩田原宿・靱谷・下
五箇・飯野)

○ハサミをなくした時は、切れない古
いハサミを棚にしぼつてのせてお
く。(板倉稲荷木・岩田原宿)

○男が左上を見て、女が右下を見て探
す。(板倉雲間)

○稲荷様にお参りをし、できるようにお
願ひする。出たら油揚げを上げる。

(板倉川入)

出たらトウフを上げる。(靱谷浮
戸)

○トウフ「丁、油揚三枚を上げるから、明日の朝までに見つかると、期限をきめて稲荷様にお願います。(宇奈根)

○大神宮様と屋敷八幡様に申上げる。

(板倉川入)

○祈祷師(先達)に拜んでもらう。

(岩田原宿・谷新田・下五箇・飯野・離・西岡・大曲・新田)

○自分の持ち物をすべてさかさまにする。(飯野)

○着物のすそを三針ぬう。(下五箇)

○おかね様にワラを結びつけて拝む。

(除川)

○神社を拝む。(除川)

○えびす様に見つかればダンゴを上げますと拝む。(新田)

七、雷 除 け

○カヤ(麻ガヤがよい)の中に入る。

(全地域)

○行う事柄

1 線香をたてる。(北海老瀬・板倉石塚・下五箇・大曲・離)

2 線香をたてて「くわばら、くわばら」と唱える。(下五箇・宇奈根・離)

3 年越の豆を食べる。(鳥・丸谷下五箇・飯野)

4 火のついてない線香をあげる。

5 「くわばら、くわばら」と唱える。(岩田下山・原宿)

6 北を向き、手を合唱して三回拜む。(板倉雲岡)

○線香を立てる。(全地域)

○あげる場所

1 火鉢にあげる。(山口・板倉大同・岩田・鳥・飯野)

2 仏様にあげる。(通り・板倉・岩田原宿・大久保・新田)

3 三本あげる。(通り)

4 沢山あげる。(大久保)

5 床間(板倉石塚)

6 雷電様のお札にあげる。(板倉川入・稲荷木・靱谷)

7 大神宮様に立てる。(靱谷・上新田・大荷場)

8 三本立てて表に出しておく。(靱谷)

9 正月十四日にあげた花をとっておいで、火鉢でもやす。(北海老瀬・西岡)

10 正月様にあげた花に火をつけて、庭へ投げる。(新田)

11 正月十五日にあげたかいかき棒と、花をもして煙をたてる。(離)

12 竹ざおの先に草刈り鎌(草取り鎌)と桑の木(葉)をさかさしにしばりつけて立てる。(下新田・山口・中新田・板倉大同・岩田・靱谷・内蔵新

田)

○竹ざおの先に草刈り鎌をさかさしはって立てる。(南地区全域・西岡除川・新田・大荷場・細谷)

○雷が鳴っているとき、菅原道真公をお祈りする。(北海老瀬)

○家の中で煙をいぶす。(北海老瀬)

○正月に神様に供えた棚(ヨシ又はワラであんだもの)を燃やし、線香をあけて拝む。(山口)

○庭で火を燃やして煙をあげる。(飯野)

○線香を立て、煙ののって帰って下ざいと祈る。(飯野)

○「遠くのくわばら」と三回唱える。(北海老瀬、西岡)

○桑畑に行く。行けなかつたら「くわばら、くわばら」と唱える。(飯野)

○燈明をあげて、「雲雷鼓製電降雹澍大雨念彼観音力応時得消散」と三回唱える。(本郷・峯・板倉大同・岩田・靱谷)

○雷電神社に関するもの

1 線香を立て、拝む。(高鳥・大曲)

2 日参番する(お参りに行く)(峯・西岡新田)

3 お札をたてる。(高鳥・飯野)

4 お札を畑の中にしたてる。(板倉

5 お札を入口の戸にはさんでおく。(岩田原宿)

6 雷電様の方を向いて「くわばら、くわばら」と唱える。(除川)

○雷電木を燃やす(峯)

○雷電木を植える。(大曲)

○年越しの豆を食べる。(小保呂・鳥丸谷・下五箇・飯野・除川・大曲)

○くわ畑に鎌をしぼる。(小保呂)

○ランプのホヤを縁の下までたらず。(飯野)

○雷が鳴りだしたら神社に行つて、雨降りミコシ(雨降り大杉様)をかっいで、鐘をたゝいて田ぼ道をまわつて歩く。(樋の口)

○観音様を拝む。(新田)

○年越しの豆を初雷の時トポロにまく。(西岡)

○ローソクをたてる。(除川)

○入口で柳の木をたくと、雷様がそのにおいを嫌つてそこには落ちない。(板倉大同)

○雷の落ちた所に竹を四本立て、シメ縄を張つておくと、そこには落ちない。(板倉川入・靱谷)

○節分の豆をとっておき、雷が鳴つたとき食べる。(板倉川入・岩田・靱谷)

○「大木のもとより、小木のもと」と

唱える。(板倉雲間・岩田)

八、ひょう除け

○サン俵を庭に投げる。(板倉石塚離)

○すり鉢とすり棒を庭に出す。(川又・岩田)

○バケツを出してたゞく。(靱谷)

○シメを立てる。(岩田・靱谷)

○榛名神社にお参りする。(西岡)

○榛名神社のお札をたてる。(新田)

○線香を立てる。(西岡)

○野良で火を燃す(新田)

○雷電様のお札を畑に立てる。(通り板倉川入・岩田原宿・靱谷・島・大久保・谷新田・樋の口・除川)

○釜のふたを外に(庭に)投げ出す。(全地域)

裏がえしにして(東地区全域・岩田下山・大荷場)

ころがす(大曲)

○鐘をたゞく(板倉大同・谷新田・新田)

虎の日にたゞく(北海道)

○念仏鐘を千回たゞく。(板倉川入)

○鉄びんのふたをたゞく。(西岡)

○竹を二本畑にさし、シメを三所につける。(大荷場)

○庭にこざるをおく。(離)

○ナベのふたを庭にさかきにして投げる。(下新田・頼母子・峯・中新田)

小保呂・上新田・離

○雷電様を拜む。(大曲)

○雷電様で祈禱した旗を日参して、一軒くまなくまわす。(下新田)

○釜のふたを外に出して、まんじろくまんじろくという。(通り)

○大勢で数珠をまわしながら、鐘をならして祈禱する。(中下)

○稲荷様にトウフをあげる。(大曲)

○お盆を庭におく。(大荷場)

○百万遍をする。(全地域)

○おばあさん達が長良神社に集って、三日三晩おてん念仏を申す。ぼんてんを一軒一本ずつ配つて立てる。(おしめのついたよしに)(中新田)

○念仏をする。(細谷)

○お宮に寄つて皆で鐘と太鼓をたゞく。(頼母子)

九、病気、身体異常

(1) 黒子(ほくろ)

東地区

○糸へ墨をつけて通せばなおる。(山口)

○灰と石灰をまぜてつける。(下新田)

○アンモニアに餅米を冷してつける。(下新田)

○なめくじをつけ灰をつける。(山

口・峯)

○南むきの観音様の前に立つて瓜の葉を三枚とってきて自分のほくろをなでる。(上新田)

西地区

○黒子の上に墨をぬる。(板倉大同・大林・石塚・靱谷中)

○黒子の隣にその黒子と同じ大きさの墨をぬる。(岩田原宿)

○こぶ観音にたのむ(見せる)(板倉中三・雲間・川入南・石塚・岩田本合)

○まむしの油をぬる。(岩田骨碇)

○黒子のところに手拭をのせる。(板倉)

南地区

○白米を水につけておいて、その水をつける。(鳥)

○米粒をさくさんでひやしてそれをつける。(宇奈根)

○こまの花をもんでつける。(飯野、新村)

○ほくろ地蔵に祈る。(飯野木下)

北地区

○こぶの観音様にこぶだといっておとしもらう。(西岡)

○おきゆうをすえる。(除川)

○なすをきってつける。(除川)

○なすの汁をつける。(西岡)

○祈とうしてもらう。(新田)

○地藏様にタスキをあげる。(新田)

○ガマの油をつける。(大曲)

○人の見ていない所で、ナスの中味をホクロの上にすりこむ。(細谷)

○わらみごをはさみで切り、そのとがりでとる。(細谷)

○蛇のぬけがらをつける。(細谷)

○盆に作つたナスの馬のへたを切つてホクロにつける。(離)

(2) 目かいこ(みけこ)

東地区

○井戸へみを半分見せ直つたら全部見せる。(北海道・山口・峯・本郷)

頼母子・通り・中下・小保呂・上新田)

○井戸へかごを半分見せ直してくれれば全部見せますという。(北海道・山口・通り)

○障子の外から物もらう。(北海道)

○ミケをかぶつてわらのみご先をしぼる。二人いて、一人は「みけごをつりに来ましたつて下さい」と言つて、みけごの出来ている方の目の方のみけの穴から、わらのみごを入れて引き出す。(北海道)

○着物のつまをつまみ糸で固くしぱり、直ぐばほどぎますと云う。

(北海老瀬下新田)

○頭をとかすくして火にあぶってその「目かいご」をさする。(本郷)

○井戸で目の前を三回しぼる。(中新田)

○みをかぶって井戸の中を見る。(小保呂)

西地区

○井戸の神様にミを半分見せて直つたら全部見せる(全地域)

(ミを「箕」或いは「身」という表記が見られる)

○井戸をのぞきミであおぐ。(岩田)

○井戸にミをかぶって見せる。(板倉)

○木櫛のみをたたみにこすり、目の上に当てる。(岩田下山・原宿)

(竹の櫛というのものもある。板倉雲間)

○着物の下前の襟をしぼって、治ればほどく。(板倉)

○着物の下前を目だつ糸で三針ぬい、治つたらほどく。(板倉)

○藁で輪を作つて目の前に出し呪文となえる。(岩田下山)

○へそに塩をぬり込む。(板倉大同)

○川へ行って目から小豆を落す。(岩田原宿)

南地区

○井戸にミを半分見せて直つたら全部見せるからと言つて井戸神様に申し上げる。(全地域)

○井戸に目を片方見せ、直つたら両方見せる。(飯野新田・岡村)

○ミケをかぶって表わらでつつく。(大久保・高鳥・谷新田)

○ゆずのとげでさす。(大久保)

○壁に入っているわらでみけごを三べんつつく。(高鳥)

○涙袋を松の葉でさす。(高鳥)

○立っている桐の木を後に背負つて「この目が直ればほおにいただきます(普通にだく)」と申し上げる。(高鳥・飯野本上)

○女の人のくしをたたみでこすり、そのくしで目かいごの所をなでる。(高鳥)

○ミをかぶって井戸のまわりをまわる。(種口の口)

○ミケをかぶって穴からみごでつつくまねをする。(種口の口・下五箇)

○みごで目かいごをつる、そして「お前は何するの、おれはみけごをつるんだ」と三回言う。(種口の口)

○たたみのへりを一本抜いて目をつつ

く。(下五箇)

○表わらの先でみけごをつつく。(宇奈根)

○着物のつまを紺の糸で三まわりまわしていぼにいわく。直つたらほどく。(飯野)

○着物の下前を目立つ糸で三針ぬい、直れば抜くと申上げる。(種口の口)

○万年ぼうきのしゆろを涙穴にさすまねをする。(飯野岡村)

北地区

○櫛をやり、目のふちを三回なでる。(離)

○つげの櫛を火であぶって三回なでる。(離)

○井戸の神に見せ、直つたらまた見せる。(除川・細谷)

○背骨のまん中をはりでさす。(細谷)

○おきゆうする。(細谷)

○ミケゴに針をさし根を取る。(細谷)

○障子のやぶれから物をもろう。(細谷)

○みごでつつつく。(大荷場)

○井戸の中に半分顔をのぞかせ、なおつたら全部見せるといつてのぞく。(大曲)

○糸で輪を作つて「みけごやーい」とよんでもらい「はい」と答えて輪を

結んでもらうとなくなる。(大曲)

○ミをかぶってお神にお参りする。(大曲)

○上目に来たら右上の着物のすそのつまをしぼる。(大曲)

○ミケをかぶってみごでつつく。(大曲)

○ざるをかぶりざるの目からわらのみごを通してみけごの出来ている人が「あなたは何をするのですか」頼まれた人が「みけごをつけに来たんです」と三回言つてみけごを引つばる。(新田)

○つげのくしをたたみの黒いへりですり、あつくしてみけごに三回つける。(西岡)

○あずきを井戸の中になげるとなえごとをする。(西岡)

○背中を三本ぬく。(西岡)

○めやにをわたにつけ、家の角先にぼうの先につけ立てる。(除川)

○障子の穴からにぎりめしをもろう。(除川)

○ごむのくしを目にあてるとなおる。(除川)

(3) よこね

東地区

○しゝぼてんをつける(サボテンのこ

とらしい)。(頼母子)

○足の親指を黒い糸で三まわりまわしてしぼる。(中新田)

○どくだみをせんじて多量に飲ませる。(上新田)

西地区

○いつししょうけんめい働かせる。(板倉 稲荷木・岩田)

○印肉(朱肉)をその部分にぬる(靱谷)

南地区

○かまどのスミを三回ぬる。(島・樋の口)

○親指のもとをぬい糸で三回まわしてしぼる。(上五箇・飯野辻)

○ずがい骨を煎じて飲む。(飯野・新村)

○食前に茶葉をかむ。(飯野本下)

北地区

○水仙の玉をすってご飯粒とねりませして紙にのしてそれをはっておく。(西岡)

○水仙の玉を酢とうどん粉でねりませる。(大曲)

○生(なま)のあずきを三つ飲む。(細谷)

(4) あ ざ

東地区

○生れた土地の墓地の土をあざのあるところにはりつける。(山口)

○蛇のぬけがらでなでる。(本郷)

○すずりのすみでぬるとなおる。(上新田)

西地区

○くるみの木の実をつける(板倉 稲荷木)

○卵のからをあざにする。(板倉 中三)

○水をつけてこする。(岩田 原宿)

○すをつける。(板倉 大同)

北地区

○らんとぼの土でこする。(大 荷場)

○もぐらまたはえもりの黒焼きのすみをつける。(大曲)

○墨をぬっておく。(新田)

○産後親の血で一週間ふいてくれればなおる。(細谷)

○つばきをつける。(大曲)

南地区

○かまどのスミをぬる。(島)

○生まれた時あざがあつたら親のおりものをつける。(樋の口)

○米粒をかんてつける。(飯野 本上)

○新しい仏を埋めた土をあざの所につける。(飯野 本上)

○三日月様を信仰する。(飯野)

(5) し び れ

東地区

○おでこを三度なめる。(北海道 瀬・頼母子)

○額に三回つばをつける。(北海道 瀬 下新田・山口・通り・中新田)

○親指と人さし指に何かはさむ。(北海道 老瀬)

○額にわらを三センチ位切ってつばをつけてはって置く。(山口)

○しびれたところにごみをつける。(北海道 老瀬)

○つばを足を三回つける。(北海道 老瀬 本郷)

○鼻すじを三回なでる。(本郷)

○おでこにつばで十という字をかく。(頼母子・上新田)

○鼻の上につばをつける。(山口)

○指先で舌をなめて額を三回たたく。(山口)

○指をなめて額に三回つける。(中下)

○額につばをつける。(中新田)

西地区

○三回指でなめる。(中新田)

○額をなめる。(小保呂)

○つばきをつける。(小保呂)

○指を逆に三度まげる。(上新田)

○薬指で額に三度つばをつける。(全地域)

○その時唱えごとをする「一ぶれ二ぶれ三ぶれ四ぶれ四ぶれがなおれ」。(板倉 中三)

○まゆにつばを三回つけてから額に十文字を書く。(板倉 中ノ中・稲荷木)

○しびれているところに唾をつける。(板倉 川入南)

○鼻の頭に唾をつける。(靱谷)

○額に梅干しの皮をつける。(板倉 川入南)

○目の上を水で三回ぬらす。(板倉 雲間)

○足の親指を曲げる。(ひつばる)。(板倉 川入南・下・中ノ中・稲荷木)

○親指ですねを強く押す。(板倉 川入南)

○足を水の中に入れる。(板倉 大同)

南地区

○額につばを三回つける。(全地域)

○たみのかげばを人に気づかれないようにとって額にはる。(大久保)

○ひざから下を上へなでながら「しびれしびれきよのぼれ」と三度言う。(大久保)

○足の親指を曲げる。(高鳥・飯野 本上)

○口と額をかわるがわるさわる。(高

鳥)

○ひざの下^のふくらみを手の親指の腹で強くおしつける。(鳥)

○しびれた所に三回つばをつけてたく。(樋の口)

○つばきを額に十文字につける。(樋の口・飯野中新田)

○頭を三度まわし足をなでる。(飯野新村)

○足の親指の裏を上になでる。(飯野本下)

○つちふまずにつばきをつけ、静かにのばす。(飯野辻)

○親指の頭につばきをつける。(飯野岡村)

○わらをなめて額につける。(飯野辻)

北地区

○ごみを額にはる。(除川)

○しびれた所につばをつける。(除川)

○額につばを三回つける。(除川・新田・大曲・細谷・離)

○足のしびれは足の指につばきをつけてこれがかわくとなおる。(西岡)

○額につばをつける。(西岡新田)

○ひざにつばをつける。(大曲)

○ほくと額とあごを十文字につけて手をあわせる。(大曲)

○指の先につばをつけてハナとアゴと

ヒタイに三回つけることをくりかえす。(大曲)

○額に十文字に紙をはりつける。(細谷)

○額に指先でつばをつけて十文字に三回かく。(離)

○足の親指をなめる。(離)

(6) こぶ

東地区

○こぶのところへつばをつける。(北海老瀬・上新田)

○地藏様に申しあげる。(山口)

○石打のこぶの観音に申しあげる。なおつたらダンゴをあげる。(北海老瀬・小保呂)

○なま米をかんてつける。(本郷、通り・上新田)

○石打観音にたのむ。(頼母子保呂)

○こぶ観音に申しあげる。(山口・小保呂)

○息を指に吹きかける。(中新田)

○からすにお祈りする。

○お茶の葉をかんではる。(中新田)

西地区

宿

○こぶ観音に申し上げる。(全地域)

※石打の観音様(雲間・稲荷木・原地蔵様(稲荷木))

○つばをつけてなめる。(全地域)

○子供の場合親が三べん顔をなでる。(板倉稲荷木・岩田)

○白米をかんてそこにつける。(板倉雲間)

○梅干をつける。(板谷中)

○すをつける。(板倉大同)

○あぶらんけん、あぶらんけん、あぶらんけん、と唱える(板倉中ノ中)

○水でひやす。(板倉・岩田)

南地区

○石打のこぶ観音に申し上げる。こぶがなおればお礼にお参りします。という。(全地域)

○足の親指を糸でしばる。(鳥)

○つばきをこぶにつけてなでる。(鳥・樋の口・上五箇・宇奈根・飯野・本上)

○米をかんてつける。(大久保)

○砂糖をかんてつける。(大久保)

○息を吹きかけてこぶの上をなでる。(高鳥)

○息を吹きかけて「お前のこぶでないカラスのこぶになれ」と言っただでる。(下五箇・宇奈根)

北地区

宿

○灸をすえて白いものがでると治る。(飯野)

○こぶ地藏様にもうしあげる。(西岡細谷)

○なめてやる。(大曲)

○ナマ米をかんてつける。(除川・大曲)

○ユブとり観音様に申し上げる。(除川・新田)

○もち米をかんてなすりつける。(新田)

○石打の観音様に治つたら底のないひしやくをあげるという。(新田)

○つばきをつけてやる(西岡新田)

○つばをつけてなでてる。(西岡)

(7) こうで

東地区

○男なら女の末つ子に障子の向うから手首をしばってもらう。女は反対のことをする。(北海老瀬下新田・本郷・頼母子・山口・峯・通り・中新田)

○初つ子の男の子に障子のまどから手をだしてしばってもらう。(本郷)

○大工のすみつぼの糸でしばる。(山口・上新田)

○他人の末の女の子に足の親指で糸でこまわりして結ぶ。(山口)

○三十三才の女に糸で結んでもらう。

○おかま様のすみをかりてつける。なおつたらダンゴをこしらえてあげ

る。(峯)

○黒い縫いとすで手首をしばってもらう。(中新田)

○はしごの間に手を入れて、末つ子に糸でしばってもらう。(中新田)

西地区

○太陽の出ないうちに、痛い方の手を持って東を向いて「東山のやせ男、招けどころで痛くて招かれぬ、あぶらおんけんそわか」と三回いう。

(全地域)

※「大男」という所あり、男が唱える場合は「やせ女」、女が唱える場合は「やせ男」というものもある。

○末子に障子の穴から糸で手をしばってもらう。(全地域)

※「両親のいる末子」というものあり。

男なら女の末子、女なら男の末子と但し書きするものあり。

糸は大工が使う墨つぼの糸
山まゆの糸というものもあり。

○棟上げのときの麻を腕にまく(板倉川入南・下・岩田本合)

○こくぞう様をおがむ。(岩田骨稽)

○おきゆうをすえる。(靱谷)

南地区

○山まゆをたてに巻く。(島)

○男の人は障子のさんから手を出して末の子に麻糸でしばってもらう。

(全地域)

○きゆうをすえる。(島)

○東を向いて手首を動かす。(大久保)

○大工のシミつぼの糸でしばる。(島)

○朝東の空にむかい、男は女を、女は男を呼んでこうでの手で三回招く。

(島)

○鉄びんのつるへ手をくぐし、男なら末の女の子に、手をしばってもらう。女なら末の男の子に手をしばってもらう。(飯野侍辺)

○こうで山のこうで男こうで痛くてまがれぬと唱える。(飯野岡村)
○むれタオルでむす。(飯野本下)

北地区

○障子の破れている所から手を出して男は男の末の子、女は女の末の子に手首を糸でゆわえてもらう。(細谷離)

○はしごの穴に手を通して男は女に、女は男に手首をしばってもらう。

(離)

○やかんのつるの所へ手を出して黒木綿糸で二まわりしばる(離)。

○なべつるしの下を通して糸でしばってもらう。(大曲)

○赤子に障子の穴から手を出させて黒綿糸でしばってもらう。(大曲)

○家を作った時お祝の麻で一番末の子に手首をしばってもらう。(新田)

○東の方を向いて手まねぎをしながらこうでの山の男に女の人は男の末つ子に男は女の末つ子にしばってもらう。(西岡)

(8) まめ

東地区

○なすのへたをつける。(北海老瀬)

○口の中で三回おがむ。(北海老瀬)

○糸に墨をつけて針でまめの中を通す。(北海老瀬本郷・峯・中新田)

○黄のついている「つき木」でまめの上を(火をつけて)こする。(下新田)

※黄とは硫黄のことらしい。

○鼻の油をなでて「たこなれて」という。(頼母子)

○煙草のやにをつける。(山口)

○金つちで三回たたく。(山口)

○指の先でまめの上を三回なでる。硫黄をとかしてぬる。(通り)

○指でなでながら「あひらうんけそわか」と三べんとなえて口でふく、となえごとをして三べんたたく。

まめのまわりを人さし指でまわす。

(中下)

○煙草の粉と御飯の粒をつける。(中新田)

○墨をぬつた糸のついた針でさしとうす。(全地域)

○煙草のやにと御飯をまぜてぬり、紙につけて貼る。(全地域)

○金火ばしをやいてつける。(板倉川入・雲間・岩田原宿)

○左のおや指のはらでまめを押して「これでもか、あぶらんそんあか」を三回いう。(板倉宿)

○「ひやくふあぶらんけんあぶらんけん」という。(板倉中三・雲間)

○まめを鼻の頭でなで「たこなれ、たこなれ」と唱える。(板倉大同靱谷下)

○鼻の油をつける。(板倉大同・岩田原宿)

○まめに墨で文字を書く。(板倉川入南)

○柚子のとげでさす。(板倉川入)

○大豆でまめをなでてやる。(靱谷中)

○塩をつけて、だれかにおがんでもらう。(岩田下山)

南地区

○「たこなれ、たこなれ」と鼻で三度なでる。(大久保・樋の口・上

五箇)

○鼻の油をつける。(高鳥・飯野・岡村)

○とかげの油をつける。(丸谷)

○煙草の灰をごはん粒とねってやる。

(下五箇・飯野・本上)

○塩をつけて火であぶる。(宇奈根)

○金火ばしを焼いてまめの上をころがす。(飯野・辻)

○自分の年数だけまめのまわりを親指のつま先で教えてつぶし、息を一息思う存分吹きかける。(飯野・本下)

○縫い糸に硯のスミをつけ針といっしょにまめの中を通す。(高鳥・下五箇)

北地区

○米のめをほじつてその米をふまれない所にうめる。(除川)

○ごはんの時、きせるのやにをつける。(除川)

○鼻の油をつける。(除川)

○たばこのやにをつける。(西岡)

○針に黒糸を通して、まめに通す。(西岡)

○鳩という字をまめに通す。(新田)

○墨を糸にふくませて針で通す。(新田)

○ほうろくを見せる。(新田)

○つけぎの硫黄で焼く。(新田)

○すみをぬる。(大曲)

○ゆずのトゲでさしすみをぬる。(大曲)

○針ですみをつけてぬる。(大荷場)

○いたくも三日間がまんして仕事をつづけていれはなおる。(細谷)

○針でつつく。(細谷)

○針で糸を通してすみをつけてまめを通す。(細谷・離)

○つけぎでこする。(細谷)

○てるてるぼうずにたのむ。(離)

(9) しゃつくり

○茶わんに水を入れてはしを十文字にして四すみからのむ。(北一山口・中下・南全地域・除川・西岡・大曲)

○茶わんに水を入れてはしを十文字に組んでのせ、その間からのんでいく。(西全地域)

○茶わんに塩水を入れてはしを十文字に置き息をつかず四回のむ。(西岡)

○茶わんに水を入れはしを十文字にせとなえごとをしてのむ。(離)

○はしを十文字にして一ヶ所から水を三口のむ。(北)

○茶わんに十文字をかいて角からのむ。(下新田)

○器に水を入れ二本のはしを横にして水をのむ(細谷)

○器に水を入れそれを三口でのむ。(細谷)

○水を三回のむ(北・中新田・島・高鳥・樋の口・飯野本上・大曲)

○鼻をつまんで水をのませ後からおどかす。(北)

○鼻をつまんで水をのむ。(新田・大曲)

○水かお湯を息をつかず(鼻をつまんで)のむ。(板倉川入・大同・靱谷中・下)

○息をつかず、水をのむ。(山口・中山)

○塩水をのむ。(島・大久保・板倉大同)

○一三三四五、五四三二一と数えてすぐお湯をのむ。(板倉川入・大同・靱谷中・下)

○親が水をやるとなおる。(岩田原宿)

○額にはしを一本たてる。(山口)

○頭にはしを置いて水をのむ。(頼母子・中新田)

○頭の上にはしをたてる。(中下、除川大曲・板倉稻荷木・中三・大林・岩田原宿)

○はしを頭の上にさかさに立て息をつかずにつばを三回のむ。(西岡)

○息をつかずつばを三度のむ。(通り・靱谷浮戸・飯野本上・本下)

○息をつかないでいる。(板倉大同・西岡)

○しゃつくりが三回でないうちくちびるをなめる。(北中山)

○一回しゃつくりをしたときくちびるを三回なめる。(島)

○手の指につばをつけ鼻すじをなでる。(頼母子)

○手の掌に「柿」という字を書いて三回なめる。(靱谷)

○空に大きく「天」という字を書く。(板倉中ノ中)

○たまがす。(大曲を除く板倉町全地域)

○頭の上にげんこつをのせて胸を張る。(板倉大同)

○背中をたたく。(板倉下・靱谷松崎)

○左を向いて三回トラ〜という。(高鳥)

○息をつかずに左の方へ首を曲げる。(飯野・岡村)

○手をあげる。(大曲)

○あたためる。(大荷場)

(10) はたけ

○麦飯のあわをつける。(北一中山・山口宿・中新田・上新田・西全地域・南の全地域・細谷)

○麦の御飯をにて「あぶくを麦ををつ

くれ」といいながら顔につける。

(西岡)

○御飯のあわ(あぶく)をつける。

(北—中山・本郷・頼母子・中新田・西岡)

○米のとぎ水で洗う(靱谷下)

○すみをぬる。(下新田・山口宿・中新田・西全地域・大久保・高鳥・丸谷・下五箇・飯野本下・除川・西岡大曲・細谷・離)

○硯の墨をぬる。(北西・頼母子・通り・中新田・細谷)

○すみ水を外まわりから中へかけてぬりながら南無妙法蓮華経を十べん唱える。(飯野本下)

○墨を「たまむし、たまむし」と唱えながら丸くぬる。(板倉大同)

○墨で「はたけ」の字を何度も書いて真黒に塗りつぶす。(岩田下山前)

○良いすみをまわりにぬって置く。(西岡新田・大曲・細谷)

○すみをすつてのむ。(除川)

○畑(はたけ)をおこして種をまくまねをする。(北舟戸)

○くわで顔をたがやすまねをする。(西岡)

○馬の油肉ではたけの所をなす。(北南)

○馬になめさせる。(板倉大同)

○なまずになめさせる。(靱谷)

○てぬかの油をぬる。(西岡)

○青がえるの腹でこする。(峯)

○壁土をつける。(島)

○せせなの中につこむ。(大曲)

○豆をころがす。(宇奈根)

○どじようをころがす。(内蔵新田)

○木を燃してあとに出たあわをつける。(岩田原宿・西岡)

○菊を塩でもんでつける。(靱谷下)

○ダイオウの根をすり下してすをませつける。(高鳥)

○みそ汁をすう。(飯野本上)

○しやぼてんをすり下してつける。(飯野岡村)

○白つじの花をもんでつける。(大曲)

○せりをもんでつける。(大曲)

○夏みかんのしるをつける。(除川)

(11) や け ど

○「猿沢の池の大蛇がやけどして水なき時には油おんけんそわか」と三回唱える。(北—中山)

○「猿沢の池の大蛇が火に入りて、焼けて焼けぬをさるそが焼く」と三回唱えて水をつける。(岩田新田)

○「猿沢の池の大蛇水なき時に焼けこげて」と三回唱える。(西岡)

○「おおみの池の大蛇が焼けこげ水なきときにはあぶらんけんそんおわか」と唱える。(飯野本下)

○「ひやくふあぶらんけんあぶらん」と唱える。(板倉中ノ中・雲間)

○「アブラオンケン様」と三回となえる。(西岡)

○せせなの中にやけどしたところを入れる(頼母子・飯野・岡村)

○せせなのまわりの冷たい土をぬる。(丸谷・宇奈根・西岡)

○流しの下の土をぬる。(谷新田)

○小便だめに焼けどの所を入れる。(丸谷・下五箇・宇奈根)

○ぬかみその中に手を入れる。(峯・通り・高鳥・樋の口・新田・離)

○味噌をつける。(頼母子・中下・板倉稻荷木・中三・岩田・下山・大久保・高鳥・丸谷・下五箇・細谷・新田・離)

○油をつける。(北—本郷・通り・中新田・板倉・岩田・除川・西岡新田・大曲・細谷・離)

○ゴマの油をつける。(南全地域)

○馬の油をつける。(宇奈根)

○油ごうやくをつける。(離)

○醬油をつける。(山口・原太・日影通り・中新田・岩田新田・内蔵新田南全地域・大曲・離)

○醬油と黒砂糖をまぜてぬる。(山口)

○黒砂糖をぬる。(細谷)

○黒砂糖をかんてつける。(靱谷・松崎)

○塩をつける。(板倉大同)

○わらのたわしにいろりのすみをつけてそれに塩をつける。(飯野待辺)

○じゃがいもをすつて油とぬる。(北—舟戸)

○じゃがいもをすつてつける。(北—中山・南・山口・通り・中下・西全地域・樋の口・下五箇・飯野本上・新田・大曲・細谷)

○馬鈴薯をすつてアクトと一しよにまぜる。(板倉・雲間)

○いもとしようがをすつてつける。(下五箇)

○サボテンをおろしてつける。(下新田・本郷・山口宿・西全地域・島・除川・西岡新田)

○青木の葉とサボテンを塩でもみつつける。(岩田原宿)

○水仙の根をすり焼けどにつける。(岩田原宿)

○大根をおろしてつける。(除川)

○きゅうりの種でひやす。(西岡)

○きゅうりのくされたのをつける。(大曲)

○ぎゅうりの水をつける。(大曲・細谷)

- 柳の皮をせんじてつける。(頼母子)
- 鮭の皮をつける。(頼母子)
- 耳たぶに焼けどの所をつける。(鳥)
- 牛になめてもらう。(中新田)
- 馬肉をつける。(飯野本上)
- 三回かいて三回ふく。(北一中山)
- 焼けどしたところを三回ふいて、上から井戸水かける。(板倉大同西)
- 唱えごとを三回いつて息を三回吹きかける。(離)
- キザミ煙草をにてその汁をつける。(宇奈根・飯野辻)
- お茶がらをつける。(板倉川入南、雲間)
- 夏菜をもんでつける。(中下)
- 夏菜の黒焼きをつける。(鳥)
- 「やけど葉」といわれる葉をつけておく。(板倉稲荷木・岩田)
- ゆづり葉を焼けどにつける。(大曲)
- かきしぶをつける。(中新田・高鳥)
- 唐辛子をつける。(岩田原宿)
- へちまの水をつける。(高鳥)
- 石けんをつける。(高鳥)
- 重そうをつける。(大荷場・細谷・離)
- 蜂の巣をこなにしておける。(細谷)

- 新間を十二枚に切つて湯呑みにかぶ
- せて上に炭を置き下に落ちた水を脱脂綿につけて虫歯につける。(山口原太)
- 新聞紙の下へ茶わんを置いて上に火を置く油がたれるそれをつける直る。
- 新聞紙を焼いて油をねってつける。(宇奈根)
- 雷の落ちた木でなでる。(頼母子・中新田)
- 雷が落ちてさけた木ぎれ(ようじ)を痛む歯の中にさしこむ。(岩田原宿)
- 雷の落ちた木をかめばよい。(高鳥新村)
- 雷の落ちた木の細い揚子みたいな木で歯を掘る。(大曲)
- 柳の芽でむし歯のところをさす。(板倉大同)
- 梅の枝を三センチ位の長さに切つて線香であぶり、お経を唱えながら虫歯につける。(粕谷薬師堂)
- 大師様のはして虫歯をつつく。(下五箇)
- 松の葉を焼いて粉にして痛い所にすり込む。(下五箇)
- 虫の骨を黒焼きにして虫歯にかぶせる。(飯野木下)
- 油をつける。(中新田)
- 食用油をにたて綿で虫歯につける。

- (山口・宿)
- 油を熱して歯の中に入れ焼きとめる。(板倉川入南・岩田本合)
- 油をつけた綿に火をつけて歯につける。(飯野本上・木下)
- 火ばしを赤く焼いてごまの油をつけてそれを虫歯につける。(北・南)
- 「ひやくふあぶらんけんあぶらんけん」と唱える。(板倉中ノ中)
- 石を焼き、食用油をたらして、ネギの種を燃しながらその煙を竹筒にとつてふたをし、耳の中へ入れると、虫が出てなおる。(粕谷上北)
- ニラの種をむして、それにあい油を入れてその煙を耳におす(飯野辻)
- 塩をなめてつばをだす。(北一舟戸・西岡)
- 塩をつける。(板倉・岩田)
- 塩をいってかみしめる。(岩田下山前)
- 塩を虫歯の中につける。(下五箇・飯野・岡村・離)
- 塩水でうがいをする。(板倉大同・岩田・原宿)
- うがいをしておける。(細谷)
- もち草をもんでつゆをつける。(山口・原太・大曲)
- もち草を塩でもんで歯でかむ。(新田・板倉石塚・粕谷松崎・内蔵新田)

- 五円玉を玄関にくぎでぶちこむ。(中新田)
- あがりはな(人のよく通るところ)に五円玉(五錢玉)をくぎで打ちつけ、むし歯が痛んでくると、ハーツと息を吹きかける。(板倉川入南・石塚)
- あがりはなに五円玉をくぎで打って痛くなつた時三度たよく。(岩田風張)
- 昔のお金を痛む歯でかむ。(内蔵新田)
- 五錢のめどあき(五円玉)を土台で三回はたく(鳥・飯野木下)
- 天保銭を敷居の上にくぎで打つて置く。(鳥・高鳥)
- 御の字をかいてくぎうつなり、たきたての御飯をあげる。(大荷場・細谷)
- 足の裏の形を紙にうつし取りこれに目、鼻、口をかき、口から歯を出すようにかき痛む所に「キリ」をさして置けばなおる。(下新田)
- 痛む時は先達が祈禱した紙をかんでいるとつばがでてなおる。(下新田)
- 信心者に拜んでもらう。(北一中山)
- 山神様に申し上げる。(中新田)
- 天神様にタニシを食べないからと申し上げて治つたらタワシを五つあげる。(鳥)

○いなり様に豆腐を上げて申し上げ
る。(大曲)

○梅干の皮を痛い所にはる。(下五箇
飯野・岡村)

○梅干を御飯つぶでねりほほにぬる。
(除川・西岡)

○梅干をくわえて水をたらず。(西岡)

○ねぎの白根をくわえている。(靱谷)

○おぎゆうをすえる。(靱谷下・細谷)

○耳にきゆうをすえる。(飯野・岡村)

○肩にきゆうをすえる。(大曲)

○穴の中にやひをやく。(新田)

○ハッカをつける。(板倉中三・岩田
小平)

○タンサンをつける。(通り)

○ジュウソウを歯の中に入れる。(新
田・大曲)

○石炭酸をつける。(板倉川入南、下
岩田原宿・本合)

○なすのへたをつける。(北西)

○焼豆を家の土台の下にうめる。(山
口・日影)

○大豆を真黒に焼いて橋の上に置く。
(板倉中三・石塚・岩田原宿)

○どぶをきれいにそうじする。(頼母
子)

○火戻しをする。(板倉宿南)

○大根をおろしてつける。(靱谷松
崎)

○ねぎを細かにきざんで塩でもみ痛い
所にはる。(新田)

○ねぎのふんを歯につける。(除川)

○かまどに線香を六本あげる。(北
山口宿・中新田・除川)

○かまどに線香を六本六朝あげる。

○かまどに線香を六本六朝あげる。
(除川)

○いろりに線香六本あげ「直して下さ
い」と拝む。(中下・頼母子)

○いろりに線香を半分にして六本あ
げ、直れば半分にしないであげる。
(離)

○いろりに線香を一本あげ直つたら六
本あげる。(下新田)

○線香を三本あげ直れば六本あげる。
(北南)

○自分の年をいってから線香を三本あ
げ、直れば六本あげる。(西岡)

○線香を「全快したら全部あげますか
ら」といって二―三本あげて、全快
したら六本あげる。(山口・原太)

○最初線香を六本たて、毎日一本づつ
減らしながら六算様へあげる。(北―
舟戸)

○線香を六本六算様へ上げる。(南全
地城)

○線香を六本たててまじないをする。
(下新田)

○仏様に線香を六本と水をあげる。
(大曲)

○仏様に線香をあげる。(本郷)

○いなり様に六本線香をあげる。(離)

○三つ又(三本つじ)に線香を六本あ
げる。(通り・高鳥・大曲)

○三つつじに線香をあげて、他人の知
らないよう拝む。(大曲)

○四つつじに線香をあげて、後
を向かずにかける。(新田)

○いろりに線香を三本あげて申しあげ
る。(頼母子)

○かまどに線香を三本あげて申し上げ
る。(峯)

○かまど前に線香を一週間上げる。
(中新田、小保呂)

○流しの下へ線香を三本たてる。(北―
中山)

○流しの口へ線香を上げる、直つたら
何かこしらえて上げる。(板倉石塚
・岩田本合)

○井戸端に一本線香をあげる。(北―
中山)

○線香をたてておがむ。(除川)

○雨だれのおちる所に線香を上げる。
(大曲)

○ロウソクを神様にあげ全部なくなる

までにロウが流れなければよい。
(通り)

○ロウソクを立てて、ロウがたれなけ
れば六算であるという。なおつたら
六種類の菓子神棚にあげる。(岩
田新田)

○かまの蓋の上にロウソクを六本立て
て祈る。(岩田小平・谷中)

○かまの蓋にロウソクを立ててたの
む。(大曲)

○小さいロウソクを六本と、六色の菓
子をおがむ、ロウソクが燃えきってか
ら供えたかしを他人に分けてあたえ
る、この時本人が食べるときかな
い。(高鳥)

○新しいロウソクで燈明をあげておが
む。(飯野本下)

○太神宮様にロウソクをあげておが
む。(新田)

○家の氏神様に豆腐を一丁あげてそれ
を一人でたべる。(通り)

○豆腐を一つ針にさして川に流す。
(山口、宿)

○豆腐を年の数だけ切つて酒と醤油を
かけ神棚におがむ。(中下)

○豆腐一丁をその人の年の数だけさ
いの目に切り、酒一合と醤油少しと
をそえて神棚へ供へ、よく祈願し、
「五王ある中なる玉に蔓られ、病い
は特に逃げ去りにけり」とこの歌を

- 十べんとなえ、拍子を四つ打ち、礼拝を九回して、酒を三口頂き、豆腐を五口醬油をつけて食べ、その残りは白紙に包んで川へ流す。(岩田原宿・釈谷下・飯野本下)
- 豆腐を買ってあげ、六算除けのお札で体の痛むところをなでて、豆腐を川へ流す。(板倉大同)
- 豆腐一丁を六ヶに切り「どうかなおして下さい」と六算様に拝み、一ヶを患者が食べて残りは川へ流す。(大久保)
- 豆腐一丁を自分の年の数だけ切って一つだけ食べ、後は川に流す。(宇奈根)
- 豆腐をさいの目に切って食べる。(飯野中新田)
- 豆腐をこまかく切ってさんだらの上のせて川にすてる。(大曲)
- 稲荷様へ豆腐をあげてすみずみをおたたく。(離)
- いろりの南西の角に線香をたて、豆腐をあげる。(新田)
- かまどへ申し上げて、あげたものを子供にくれる。(新田)
- 六色の菓子をあげたのむ。(中新田)
- 六つの品を供え線香をあげておがむ。(山口・中山)
- 六色の菓子と水を先祖様に供え、線

- 香を六本立てる。線香が燃えきつたら、六算の人がいたゞく。(板倉・釈谷)
- 菓子を六種類仏壇に供え、お経をあげてそれをいたゞくとおる。(高鳥)
- 六算様へ供物(菓子)を六つあげる。(下五箇)
- 線香を六本、六色の菓子をあげてその菓子を自分一人であげる。(飯野本土)
- 線香六本たて、アメを六つあげて、子供に一つずつくれる。(大久保)
- 菓子を六品神にあげる。(飯野本下)
- 庭を掃いて七色の菓子と線香をあげる。(除川)
- 六算様へ七色の菓子をあげ、線香を六本たておがんで六算の人がその菓子をたべる。(新田)
- 菓子を三色つゝんで道角に置く。(高鳥)
- 菓子をたべる。(新田)
- 花がしをあげて線香をあげる。(大曲)
- 色紙を六本の棒にはさんで、三方のつじにたてる。(釈谷中ノ裏)
- 六算という札を書いておがむ。(中新田)
- 六算除けのお札で三回痛むところをなでる。(西全地域)

- 六算様で痛い所をなでる。(樋の口下五箇)
- 六算除けの札で悪い所をなでる。なおつたら、そのお札に半紙をかぶせる。(西岡)
- お札をもらってなすりつける。(新田)
- 六算除けのゴフをのむ。(飯野本上)
- ゴマをいって、このゴマが生えるまでに申し上げる。(飯野待辺)
- 六算除けをつくる。(西岡)
- 先達におがんでもらう。(岩田小平下山・内蔵新田・南全地域)
- 先達に六算除をしてもらう。(除川・西岡)
- おまじないをする(除川・新田)
- 痛い所がなければ、酒をあげておがむ。(西岡)
- ちやば台のすみに三ヶ所御飯をあげる。(大曲)
- おきゅうをする。(離)

- しばらくしないで風通しをよくする。(細谷)
- (15) かくらん
- きゅうりをすって足の裏につける。(西全地域・除川・大曲・大荷場・離)
- 足の裏にきゅうりをつけてねる。(北一舟戸)
- 足の下にきゅうりの種をつける。(東全地域)
- きゅうりの種を塩でもんで足の裏につける。(西岡新田・細谷・離)
- きゅうりの種で足をあらう。(北一舟戸・通里・中下・中新田・小保呂・上新田・南全地域)
- きゅうりの水で足を冷す。(峯)
- 足の平へきゅうりの種と夏大根をおろしてすりこんで置く。(頼母子)
- きゅうりの種とはつかの葉を塩でもんで体にすりこむ。(通里)
- きゅうりの種をたべる。(中新田・小保呂・飯野本上・本下)
- なべで足を洗い、きゅうりの種を足の平につける。(飯野辻)
- 梅干をくってきゅうりの種を足の平にぬる。(峯)
- 梅干の皮を両方の目じりにはって置く。(飯野本下)
- 額に梅干をはる。(内蔵新田)

- 梅干を食べる。(西岡)
- 梅干をつける。(除川)
- 梅干を飲む。(北・舟戸・板倉中ノ中・岩田・小平・島・高鳥・新田)
- 菅笠をかぶせて上から水を三回かける。(東地区の一部分、南全地域、新田・大曲・離)
- 菅笠をかぶせ、上から(三ばい)水をかける。(西全地域)
- 菅笠をかぶり井戸水をかぶる。(山口宿・除川・西岡・大荷場・細谷)
- 菅笠をかぶり流して井戸水をひしゃくで三ばいかけ、菅笠から水がもれば、かくらんでもらなければかくらぬでない。(高鳥)
- なべと菅笠と水を手おけに入れて表の台所の敷居に行き、上半身はだかになり、片足なべに入れてこしかけて、菅笠をかぶつてかがむようにして、水をひしゃくで三ばいかける。(北新内山)
- 入り口の敷居の上で菅笠をかぶつて上から水をかける。(峯)
- かぶり笠をかぶつてバケツに三ばい水をあびる。(北中山)
- ももの木の葉と麦がらをよくにて洗う。(下五箇)
- もゝの花をつんで置きお湯をたてる。(新田)
- 入口に腰かけなべで足を洗う。(山

- 口・原田)
- 足の平(裏)に大根をすりつける。(北西・板倉大同・糶谷・西岡・大荷場)
- 大根をおろしてすねにぬる。(丸谷)
- 背骨に大根おろしをぬる。(飯野本上)
- 足の裏に塩をすりこむ。(岩田下山前・西岡新田)
- 八坂神社のお祭に、おくらん草を供えて、村中のかくらんを除ける。(岩田新田)
- へそに水をのせる。(板倉中ノ中・雲間)
- ぎんかんをつける。(板倉雲間)
- 小麦粉を水にといて飲む。(板倉稲荷木)
- 玄関にむしろをしき、北向きにすわって水をむ。(飯野本上)
- ハツカを足につける。(離)
- 鉄の品物で足を洗う。(離)
- すをかがせる。(除川)
- (16) はしか
- 北向きの馬小屋の桶をかぶる。(北中山、山口原太、下五箇)
- ぎんかんを食べる。(本郷・山口日影・西全地域・除川・西岡新田・大曲・大荷場)

- ぎんかんをせんじてのむ。(南全地域・西岡・離)
- ぎんかんを布団の下に入れておく。(飯野辻)
- ぎんかんを氷砂糖とせんじてのむ。(新田)
- ごぼうの種をせんじてのむ。(島・大荷場)
- ごぼうを食べる。(飯野本上)
- 大麦を一合袋につつま病人の名を書き、出入口の土台下にうめる。(通り)
- 暖い(ごはんをたいばかりのときおひつに御飯をあけてしまつた)おかまを三回かぶせる。(西全地域)
- はしか地藏様に申し上げる。(板倉川入)
- 金貨を手握る。(岩田)
- いかを食べさせる。(西全地域)
- 鹿の角をけずって飲む。(下五箇)
- ろくしように飲む。(下五箇)
- こんにやくを小さく切って飲む。(飯野本上)
- 白南天の実を腰につけて置く。(下五箇)
- 石橋を七橋渡る。(飯野新村)
- (17) てんかん
- わらじを頭にのせる。(東一舟戸・頼母子・峯・通り)

- (西全地域)
- (南全地域)
- (北一西岡・新田・細谷・離)
- ぶんのくどの毛を引ばる。(東一中山)
- 足の親指を曲げてオキユウをすえる。(東一日影)
- 猿の頭を黒焼きにして食う。(東一通り)
- 水をかける。(東一不明)
- (西一稲荷木・大同)
- (北一除川・大曲)
- ざくろの皮をせんじてのむ。(東一不明)
- せなかをたたたく。(東一不明)
- 人が死んだ時あびせた水を飲ませる。(東一不明)
- ひたいを草履で三回たたたく。(西一板中・下山)
- (西一板倉大同)
- (北一除川・大荷場)
- えり首を押す。(西一岩田原宿)
- はしをたてる。(西一板倉大同)
- 手をなめさせる。(西一板倉雲間)
- たばこをすわせる。(西一板倉大同)
- ユキノシタの葉の汁を飲ませる。(西一岩田風張)
- モズがえさのため、はりつけたカエルを黒焼きにし、せんじてのむ。

○(西―岩田原宿)

○便所の葦覆を頭にのせる。(南―高鳥)

○わら草覆を水にひたして胸にあてる。(南・大久保)

○煙草の煙をふきかける。(南―飯野中新田)

○はいていた下駄を胸にのせる。(北―細谷)

○暑い風にあてる。(北―細谷)

○虫下しをくれる。(北―大荷場)

○口の中にはさみをいれる。(北―大荷場)

○下駄を頭にのせる。(北―大曲)

○ざくろの木をもたせる。(北―除川)

○(18) とりせき(百日せき)

○馬の字をさかさに三つ書いて戸口にはる。(東―道祖神・下新田・宿東西原太・通り)

○(西―板倉稲荷木・雲間)

○軒下に、ニンニクをおく。(東―舟戸)

○(南―飯野・本上)

○(北―西岡)

○鳥の字 鳥の絵を書いて逆さにして張つて置く。(東―中山・新内山)

○鳥の絵(南―大久保)
鳥の字(三つ)(高鳥)
○まめをいっておくりだす。(東―中山)

○にわとりを三羽さかさに書いて軒下にはる。(東・西地域)

○おわし様に申し上げて、なかつたら卵を二つあげる。(東・南地域)

○馬のふんの水を飲ませる。(東―本郷)

○敷居下に穴を掘つて卵をうめる。(東―頼母子)

○神様から麻をかりてきて首にまく。(東―日影)

○(西―板倉宿)

○(南丸谷・樋の口(柳生の明神様))

○米おけにしゅもじを入れる。(東―通り)

○馬の神様に申上げる。(東―中下)

○(北―除川)

○ねぎを首にまく。(東―中下)

○(南―高鳥)

○白南天をせんじてのむ。(東―大門西)

○(西―板倉川入・稲荷木・岩田小平)

○南天をせんじてのむ。(板中・川入)

○(岩田下山・靱下・葉師堂)

○(北、除川)

○三角かどへかねを上げる。(東―小保呂)

○腰ぎんちやくに入れて下げる。(西―靱谷上)

○前記を百日以内の赤んぼうの時行う(西―靱谷松崎)

○その子の息をかけ、お金を一緒に入れる。(西―板倉大同・大林・石塚)

○(岩田新田)

○さん俵にのせて。(西―靱谷・上・内蔵新田)

○にわたりのトサカを食う。(西―板倉中)

○みかんをせんじてのむ。(西―岩田原宿)

○水あめに大根をつけて汁を飲む。(西―靱谷)

○かぎツルシにお玉じゅくしの子をつるす。(西―岩田原宿)

○入り口に五寸くぎを打ち、他の人に踏んでもらう。(西岡・田原・宿)

○北向きの馬小屋のかいばおけをかぶせる。(西―板倉稲荷木・岩田・下山・靱谷浮戸)

○カメノコ様にだんごややきもちを上げる。(西―岩田原宿)

○(靱谷の安勝寺にある)

○(南―下五箇)

○うなぎを食う。(南―島)

○金魚を黒焼きにして食べる。(南―大久保)

○(北―大曲)

○大工の使う糸を盗んで首にまく。(南―大久保)

○川からひろってきたわんを入口の所にかけておく。(南―島)

○くしとハンカチのようなものにせきをふきかけて道に捨てる。(南―高鳥)

○かいがらを糸でとぶ口につるす。(南―高鳥)

○オンドリのトサカに傷つけ、その生血を飲む。(南―高鳥)

○うどん粉をいってなめる。(南―丸谷)

○白南天の実十粒と黒豆十粒を一合の水でせんじて何回にも分服する。(南―樋の口)

○三夫婦そろった家のしゅもじを借りて、その家の人になでてもらう。(南―樋の口)

○舟のこけらを飲む。(南―下五箇)

○三夫婦そろっている一番年よりの人のおわんに飯を盛り、大神宮様にあげたのをもらつて食べる。(南―下五箇)

○どうろく様のたすきを借りる。治つたら倍にして返す。(南―飯野侍辺)

○馬肉の味噌にを食う。(南―飯野辻)

○古河の三国橋にたまった橋のアカを飲む。(南―樋の口)

○かきのへたをせんじて飲む。(南―

飯野侍辺

- なめくじを黒焼にしその粉を飲む。
(南―飯野本上・本下)
- 白南天、黒豆、くちなしをせんじてのむ。(南―宇奈良・飯野新村)
- せみのぬけがらを粉にしてのむ。
(南―宇奈良)
- 干しうがに砂糖を加へ時々なめる。
(南―上五箇)
- とうがらしを入口につるしておく。
(北―除川)
- すずめの黒焼を食べる。(北―西岡)
- おこり様に申し上げる。(北―西岡)
- かまを頭にかぶせる。(北―西岡)
- にんにくを食べる。(北―新田)
- ねぎを布で包んで道のまわりにおく。
(北―新田)
- おわつし様をおがむ。(北―新田)
- くるみをせんじてのむ。(北―大曲)
- ねぎを焼いて首にまく。(北―大曲)
- とりの神をおがむ。(北―細谷)
- 鳥のオスをかりてきて、さかさにとぶ口につるしておく。(北―離)
- お金を目のふちになすり紙に包みすでてる。(北―大荷場・離)
- 大豆をいって目になすり、四つじにもって行き送り出す。(北―大荷場細谷・離)

(19) はやり目(やん目)

- 豆を焼き紙に包み、目をこすり三つじにする。(東―山口・中新田宿)
(西全地域) (南・高鳥・下五箇・飯野辻・岡村) (北―大荷場・細谷・離)
- 豆を焼き、お金を入れて紙に包み、目をこすり、三つじにする。
(東―頼母子・中下) (西―靱谷松崎・薬師堂) (南全地域) (北―西岡新田)
- 豆を焼き米を包んで三つじにする。
(北―大曲)
- 大豆を焼いて唐辛子を添え綿で目をふいて三つじにする。(東―山口) (西―板倉) (南―島・飯野新村・中新田・本上・上五箇)
- 大豆を焼いて唐辛子、お金を添え綿で目をふいて三つじにする。
(西―岩田) (北―細谷・離)
- 唐辛子に綿を添え、棒につけ三つじに立てる。(東―北・下新田・本郷・頼母子・山口) (南―樋の口・谷新田・下五箇) (西―板倉)
- 唐辛子に綿、金を添え、三つじに棒で立てる。(東―北・本郷・通り中新田) (北―細谷)
- 棒(よし)に唐辛子をはさみ三つじに立てる。(西―板倉中) (南―島・高鳥) (北―西岡)

○電柱にやん目大売出しと書いては

- る。(東―北海老瀬) (南―飯野中新田・樋の口) (北―西岡) (東―中新田)
- たはこのやにを上まぶたにつける。
(西―板倉中・岩田原宿) (南全地域)
- 便所を掃除したほうきでくまねをする。(南―高鳥) (北―西岡) (東―峯・下新田)
- 道の三(四)つじにあたたかい御飯の上に目を当てる。(西―岩田原宿) (南―飯野本下)
- セキシヨの根を細かくして水でひやしておいて洗う。(北―離・除川)
- 腹のあかい、白いちようをおくり出す。(北―細谷)
- 井戸神にみせる。(北―細谷)
- 便所をきれいにする。(北―大荷場)
- 三つじに線香を立てる。(北―除川)
- 早いうちに塩で洗う。(北―除川)
- おんぼをせんじてつける。(南―飯野侍辺)
- 古河のコウノスのコクゾウ様に申し上げウナギを治ったら上げる。(南―樋の口)
- お茶と梅干しをせんじてつける。
(西―靱谷・下)
- 小便をつける。(西―板倉・石塚・岩田)

田)

- 四月八日にお釈迦様にかけた甘茶をつける。(西―靱谷薬師堂)
- 三つじにおしめをつくつて送り出す。(西―板倉大同)
- 「アブラウケン」と三度唱える。
(西―板倉雲間・中)
- 金を御幣と一緒に置く。(西―板倉川入)
- いろ紙で御幣をつくり米と金と一緒に置く。(西―板倉大同)
- (20) はひかせ(ジフテリア)
- 馬のふんのつゆをしぼって飲む。
(西―板倉川入) (南―島・高鳥・下五箇・飯野岡村) (北―西岡・離)
- 「^{留置}置」と言う字を赤い紙に書き入口にさげる。(東―北海老瀬・頼母子宿・峯・中下・中新田・小保呂・上新田) (西全地域) (南全地域) (北―大曲)
- 馬頭観音にお参りする。(東地域) (西―板倉中・大同・岩田原宿) (南―高鳥・飯野本下)
- 北向きの馬小屋のかいばおけをかぶせる。(西―板倉石塚・岩田本合) (南―下五箇) (北―西岡・新田)
- 鶏のトサカを飲ませる。又は「トサカの血」(西―岩田下山・板倉稲荷

木・大同)

○にんにくを腰にぶらさげる。(北—除川)

○にんにくをおろしてつゆを飲む。(南—上五箇) (北—大曲・細谷)

○にんにくを玄関にぶらさげる。(東—通)

○馬の肉をへそにはる。(南—大久保) (北—大荷場)

○青竹のつゆをのむ。(南—丸谷)

○梅ずを飲ませる。(西—岩田骨稽)

○さんだわらにお金とトウガラシをおいて三本つじへ送り出す。(北—細谷)

○竹でミケのふちをなでる。(西—岩田原宿)

○しょうぶの根をすつてのませる。(東—舟戸・中山・新内山)

○明神様で麻をかりて首をしぼる。(東—西原太)

○竹でミケのふちをなでる。(西—岩田原宿)

(21) き す

東地区

○ふなしの花をつける。(北海老瀬)

○三種類の草をもんでつける。(山口小保呂・上新田)

○四種類の草の葉をもんでつける。(頼母子)

○煙草を傷口につけてしぼる。

○石油をつけるとばいきんが入らない。(本郷)

○百足をびんに入れ、食用油をたらし、て息のでないようふたをしたものをつける。(宿)

南地区

○三種類の草をもんでつける。(全地域)

○百足の油をつける。(島)

○柳の皮でしぼる。(高鳥・丸谷・樋の口)

○とかげの油をつける。(丸谷)

○煙草の粉をつける。(下五箇)

○どくだみをもんでつける。(飯野本下)

北地区

○血どめ草をはる。(新田・大曲・細谷)

○草を三色集めて、よくもんでその汁をつける。(新田・大荷場・細谷)

○たもとのかずをとつてつける。(大荷場)

○柳の皮を巻きつける。(大曲)

○つばをつける。(新田)

○傷口をなめる。(西岡)

○みそをつける。(西岡)

○煙草の粉をつける。(西岡)

○つばぎをつけ、アブラオンケンと三

度いう。(除川)

○とりもちをつける。(除川)

○塩水で洗う。(除川)

(22) はな 血

○仰むけにねる。(その時首に動作を加える) (東全地域) (西全地域)

(南全地域) (北全地域)

○ぶんのくどを三回たたく。(東—道祖神) (西—板倉雲間) (南全地域)

(北—新田・細谷)

○えり首の毛を三本抜く。(東—中山)

本郷・宿・月影・下新田・南(西—板倉全地域) (靱谷全地域) (南全地域)

○えり首をもむ(東—中山) (西—板倉川入・石塚・靱谷上中) (南—飯野岡村)

○えり首をなでる。(西—靱谷松崎)

○手の親指を揃えて三回水をかける。(南—高鳥)

○もぐらを焼いてたれた血をふりかける。(南—下五箇)

○首を押す。(板倉川入・南中・岩田本合・靱谷・中・薬師堂)

(23) い ほ

東地区

○イボ地蔵様に申し上げ、治ったら自分の背丈のダンゴをあげる。(北海

老瀬)

○近くにいる人に解らないように棒で橋を作り、この橋渡れと唱える。(北海老瀬)

○盆様のはしで人に見られないように三、四つつく。(下新田)

○盆様のはしでついで流しの下に埋めておく。(山口)

○ナスのへたをイボにすりつけ、人目につかない所に埋める。(山口・中下・小保呂)

○いちじくの汁をつける。(通り・峯中新田)

○イボ地蔵にお米を上げて申上げる。(通り)

○毛でしばっておく。(中下)

○糸でしぼる。(中新田)

○へびの抜けがらでなでる。(小保呂)

○みよしがのつゆをぬる。(本郷)

○七夕の日にいもの葉にたまった水をつける。(本郷)

○麦飯をたく時のあわをつける。(頼母子)

○ごまの花の汁をつける。(頼母子)

○米粒三つでイボをなで、流しの下に埋めておく。その米粒がなくなるのと一緒にイボがなくなる。(頼母

子)

- いなびかりのした時、便所のほうきでイボをなでる。(山口)
- 小豆を人に見られないうちに埋める。(山口)

南地域

- いちじくの白い汁をつける。(全地域)
- おがらでいぼのできているところをぐるぐるまわして、井戸のところを立てておく(島)
- おがら(お盆様のはし)でいぼを三回つつく。(全地域)
- いぼ地蔵様に申し上げ、治ったら地蔵様の背丈より高いダンゴをあげる。(全地域)
- ねばるクモの巣をいぼに巻きつける。(高鳥・谷新田)
- ごまの花をつける。(丸谷、飯野岡村)
- へびの抜けがらをつける。(飯野岡村)
- いぼ地蔵様に申し上げ、治ったら酒だるをあげる。(種の間)
- ナスを二つに切っていぼの上をなで、二つ合わせて道に埋める。(種の間) ドブの近くに埋める。(宇奈根)
- 山うめの糸を一まわり巻く。(下五)

筒)

- ナメクジをつける。(宇奈根)
- ナスの新芽のつゆをいぼにつけて、その新芽を湿っぽい土に埋め、新芽がくさればいぼがとれる。(飯野本上)
- お盆にナスで作った馬を二つ割りにして井戸流しのもとに埋めておく。(飯野侍)
- ぬかをいぼにつけてそれを土中に埋めて、こぬかがくさるまでにいぼがとれるように祈る。(飯野辻)

北地区

- いぼの地蔵様をお願いする。(全地域)
- ナスのへたをいぼになすって流しの下に埋める。(除川・離)
- ごまの花をいぼにこすりつける。(全地域)
- おじよろグモの糸をとってきて巻く。(新田・大曲・大荷場・離)
- ごまの花で、だれも見えない所でなでて土中に埋める。(離)
- いちじくをつける。(全地域)
- へびの皮をつける。(細谷)
- 糸でしばる。(細谷)
- 馬の毛でいぼをしばる。(西岡・細谷)
- 盆様のはしでつつく。(新田・大曲)

大荷場)

- ナスをすってつける。(西岡・大曲)
- 村のいぼ地蔵にダンゴを六つつけて背丈の高さにあげる。(新田)
- 米の芽をぬいてそれでいぼをつつく。(新田)
- 三日月様に治ったら好きだけダンゴをあげると願をかける。(大曲)

(24) 虫下し

- ほうずきの根をせんじて飲む。(東本郷)(西―板倉川入・中・稲荷木北・岩田本郷・下山前裏・糶谷上・内蔵新田)(南―高鳥・丸谷・下五筒)(北―離)
- もち草をせんじて飲む。(北―除川)
- ほうずきの実をせんじて飲む。(西―板倉下)
- 柘榴の皮又は根実を煎じて飲む。(東―頼母子・中山)(西―岩田本合)(南―高鳥・種の間・上五筒)(北―離)
- にんにくを食べる。(西―板倉・中三)(北―大曲)
- 手のひらに墨をぬって虫きりきりと三回となえる。(東―舟戸)
- 手のひらを「かん虫かん虫」と言いながら墨でぬる。

○お寺で呪ってもらう。(西―板倉下)

- 虫よけをする。(西―糶谷下)
- 母親の親指の腹で腹をなでる。(南―大久保)
- 雪の下を三葉塩でもんで飲ませる。(南―大久保)
- 麦わらをせんじて飲む。(西―板倉中三)
- 魚の肝を飲む。(種の間)
- 虫封じのお守りを小さく切つて飲む。(南―下五筒)
- 人參の汁を朝のむ。(北―除川)
- みかんの皮をた汁を飲む。(北―除川)
- せんぶりをせんじてのむ。(北―大曲)
- げんのしょうこをせんじて飲む。(西―板倉中三)
- 朝の中に塩を手をこすりつけ虫でろという。(東―北海老瀬・中新田)
- 雪の下という草をもんでつける。(下新田・北地区の全地域)
- 雪の下をつける。(南地区の全地域)
- 雪の下を塩もみしてつける。(中新田・板倉石塚・大同・中三・大林・雲間)
- 雪の下を塩でもんで出た汁を耳の中

に入れる。(板倉中三・川入南・稲
荷木・雲間・岩田小平・原宿・木合
・靱谷薬師堂・内蔵新田)

○井戸の雪の下という草の露をつける
(本郷・岩田)

雪の下を「えどご」「井戸草」とい
うところもある。(西地区)

○井戸にはえる、きくらぎの露を耳に
つける。(頼母子)

○ほうらぬけをけずって耳につけると
よい。(東一山口)

○黒いもをおろして耳のまわりにぬる
(靱谷上北)

○からみをすって耳に入れる。(大曲)

○馬のふんをしぼった水を耳に入れる
(下五箇・宇奈根)

○みそつけの露を耳に流しこむ。(西
岡新田)

○頭につける油で耳をしめす。(高鳥)

○せみのからをつける。(宇奈根)

○耳の神様に、ワラジの片方をあげる
(峯)

○お地藏様に祈る。(中新田)

○薬師様に申し上げ、治つたら焼もち
に穴をあけて御礼する。(高鳥・飯
野新村)

○ドウアンサマ(道安様・土安様)に
申し上げ、治つたら焼きもちをあげ
る。(樋の口)

○道祖神(下ウロクジン)へたのみ、

なおつたら酒を上げる。(板倉・大
同)

○ドウロク神様(道祖神)にたのむ
(下五箇・西岡・大曲)

○山の神様に、底のない杓を三つあげ
てなおつたら底のあるのを三つあげ
る。(東地区の部)

(26) 蜂にさされた時

○黒いものじくの汁(つゆ)をつけ
る。(山口・本郷・峯・通り・中下
中新田・上新田・西地区の全部・特
に板倉に多い。南地区の全部・除川
西岡・西岡新田・大曲・大荷場・細
谷)

○黒いものつゆをつける。(北海老瀬
下新田・頼母子・中新田)

○いもの柄のつゆをつける。(本郷)

○いもの葉をつける。(中新田)

○朝顔の葉を塩でもんでつける。(板
倉中三・岡田・小平・木合・岩田に
多い。)

○朝顔の葉をもんでつける。(除川・
西岡新田・大曲・大荷場・離)

○朝顔をもんでつける。(高鳥・下五
箇・上五箇)

○白朝顔のつゆをつける。(本郷)

○どんな草でもいいから、三種類とり
塩でもんでつける。(岩田原宿)

○げんのうしようこを水にひやしても

んでつける。(岩田原宿)

○塩と菊の葉をもんでつける。(飯野
中新田)

○いちじくの白いつゆをつける。(飯
野本上・本下)

○塩をつけておく(板倉大同・川入南
・岩田多し。靱谷・岩田、小平は塩
をかんでからつける。西岡・西岡新
田・細谷)

○歯かす(歯くそ)をつける。(頼母
子・川入南・鳥・下五箇・飯野本
下・除川・西岡・西岡新田・細谷・
離)

○石けんをぬる。(山口)

○はつかをつける。(滑稽・細谷)

○煙草のヤニをつける。(高鳥)

○梅干をすりこむ。(樋の口・飯野新
村)

○つばきをつける。(西岡)

○しようべんをつける。(大曲・離)

○はちみつをつける。(大荷場)

○どつけしをつける。(除川・西岡新
田・細谷・西地区)

○東西南北を書き、中心の土をつける
(雲間)

○石をひっくりかえす。(山口・高鳥
樋の口・飯野本土)

○石を三つひっくりかえす。(石塚)

○そばの石をほりかえる。(西岡新田)

○さされた所を手の平でたたいて裏返

えす。(高鳥)

○そばにある青葉を裏返しにしてお
く。

○そばにある青葉をとってツバキをか
けて地面にすてる。(高鳥)

○さされそうな時にトリの鳴き声をす
る。(宇奈根)

○おおのむし、させばさせ、ひめのこ
うたるさきのおんを忘れたか、あぶ
らけんそん、おおわか、と唱える。
(飯野本下)

○蜂におわれたときは「あぶらんけん
あぶらんけん、あぶらんけん」また
は「こけこつこ、こけこつこ」とい
う。しやがむと、蜂の眼は上につい
ているので見えないともいう。(西
地区)

(27) 産褥熱

○みみずをせんじてのむ。(東地区・
谷新田)

○実母さんを飲む。(西地区・大荷場)

○南天の実を飲む(稲荷木)

○年越しのゆずの種を飲む。(樋の口)

○あたたかいみそ汁を飲む。(大荷場)

○イナゴの黒焼きを食べる。(大荷場)

○ソバコをタニシでねって、足のへら
につける。(離)

○麻で髪をしぼる。(西地区の全部)

○髪をしぼる。(除川)

○髪をしばり、熱を出した人を天井につ
りさげる。(細谷)

○たくさんふとんをかけ、その上に重
い人がのる。(飯野辻)

(28) 胸のつかえ

○冷麦にはしを立てて三回まわる。
(北海老瀬)

○はしを三回たてて三回めぐる。(離
海老瀬)

○はしを頭の上にさかさに立てる。

(下新田・中新田・南地区の全部)

○頭の上にはしを立てる。(中新田・
小保呂・本郷・峯・山口・板倉中三
・川入南・石塚・岩田新田・新田・
下山・原宿・小平・除川・西岡・大
荷場・離)

○頭の上にはしをたてて背のびをす
る。(中下)

○頭にワラジをのせて背中をなでる。

(下新田)

○頭の上にはしを立ててぐるぐるまわ
す。(靱谷下)

○はしをさかさにして頭の真中をたた
く。(風張・靱谷・上北)

○はしをさかさにもって、ヒラメキを
三回はたく。(離)

○はしの頭をツムジに立てる。(樋の
口)

○額にはしを立てて上を向いている。

(板倉中三・大同)

○水を飲んで、はしで頭をおす。(原
宿下・靱谷中)

○水を飲んで、握りこぶしを頭の上に
のせ、呼吸をとめる(下新田)

○頭の上にはしを立てて水を飲む。
(島・高鳥)

○はしで頭をつつく。(高鳥・丸谷)
○ツムジをおして、息をつかぬように
している。(通)

○頭の上に手をあてて、空を見る。

(飯野・本土・本下)

○ひじを張つて、手を頭のとっぺんに
のせる。(宇奈根)

○右の手で頭の後から、左の耳にさわ
る。(靱谷)

○両手を頭の上に揚げる。(原宿)

○はしを茶わんの糸じりに立てて膝に
置く。(大林・石塚)

○三角をたたく。(小保呂)

○背中をたたく。(岩田・除川・細谷)

○胸をたたく。(大同)

○胸を三回なでる。(飯野本下)

○手を上にあげる。(細谷)

○三回胸をつよくおす。(大曲)

○右の手で左の手の平の真中を強く押
す。(大久保)

○ぞうげでのどをこする。(除川)

○水を三口のむ。(頼母子・南地区の
全部)

○水をのむ。(板倉中三・稲荷木・雲
間・川入南・原宿・骨稽・靱谷下・
除川・西岡・西岡新田・大曲・大荷
場)

○お湯をのむ。(山口・川入・南)

○湯をのんで背中をたたく。(西岡新
田)

○水をコップに入れ、はしを井桁にく
んでその下から水をのむ。(上新田)

○茶わんに水を入れはしを十文字にし
てのせ、その四すみから飲む。(稲
荷木・大同西・靱谷松崎)

○茶わんに水を入れはしをたてての
む。(細谷)

○重曹をなめる。(岩田本合・靱谷中)

○大根や菜を食べる。(靱谷下)

○渋いものを食べる。(高鳥)

○ゲンノウシヨウコを飲む。(樋の口)

○卵をのむ。(除川)

○お茶をのむ。(除川)

○後からおどす。(内蔵新田)

(29) のどにつかえた骨

○年神様にあげた花でのどをなでる。
(中新田・板倉中三・大同・川入南・
岩田本合・原宿・内蔵新田)

○お正月の飾り花でのどをなでる。
(山口)

○お正月様のおかざりの松でのどをな
でる。(大曲)

○お正月の神の花をのむとなおる。
(細谷)

○年こしにあげたいわしの頭でのどを
なでる。(北海老瀬)

○お正月の松でのどをほらう。(靱谷
下)

○年神様のはらいでのどをなでる。
(南地区の全部)

○仏様にある盆花でのどをなでる。
(高鳥)

○象牙の箸でのどをなでる。(中・樋
の口・下五箇)

○大神宮様の前でのどをなでる。(飯
野本上)

○神様のごぼうじめでのどをなでる。
(飯野本下)

○年越しのイワシの頭を水にひやして
のむ。(東地区)

○いろいろ神様にたのむ。(東地区・石
塚)

○えびす譚にあげた魚を焼いておいて
それでのどをこすればよい。(上新
田)

○おえびす様にかげぶなを上げてそれ
をとつておいてのどをなでる。(北
海老瀬・岩田下山)

○大神宮様のお札でのどをなでる。
(川入南・薬師堂)

○年神様に上げた花を水に浮かしての

む。(板倉中三・岩田)

○お正月のおそなえもちを食べる。

(西地区)

○ぞうやでのををなでる。(西岡・大曲)

○かまどの炭をのどへつける。(本郷)

○東京巢鴨のとげぬき地藏様のお札をのむと骨がとれる。(大曲)

○うののどを三べんなでる。(頼母子)

○つばを三回のむ。(山口)

○剣被でののをなでる。(板倉・岩田新田)

○かぎつるして三回ののをなでおろす。(離)

○ちやん(父)のえとをはしでつく。

(東地区)

○魚の骨を頭上にのせる。(通り)

○さかさになってごはんをのむ。(中新田)

○象牙でののを三度なでる。(大同・大林・石塚・岩田下山・内蔵新田)

○ごはんをかまずに食う。(東地区・西地区の全部)

○頭をたたく。(東地区)

○片足ではねる。(東地区)

○こわれた扇子を二つにそこから開き竹の骨の間にのどを入れる。(岩田原宿)

○食べた魚の残った骨をかんでひやめきにのせる。(岩田下山)

○頭の上にはしを立てる。(板倉下)

○水のみながら体を曲げる。(板倉雲間)

○生たまごをのむ。(板倉大同・靱谷中・西岡)

○すをのむ。(板倉大同・西岡・飯野本下)

○旦那のはしでののを三回なでる。(大久保)

○さつまを生きのみにする。(大久保)

○食べものを生きのみにする。(南地区の全部)

○のどを三回なでる。(高鳥)

○静かにのどをなでる。(飯野辻)

○ごはんをかまずに三回のむ。(西岡西岡新田・大曲・大荷場・細谷・離)

○ごはんを水と一緒にのむ。(離)

○水を大口でのむ。(細谷)

○ほうしんかんの種をのむ。(大曲)

○節分の抽子の実をのんでおくとのどはつかえない。(岩田原宿)

○かたをもんでもらう。(西岡)

○「ウガラスが柳の下で昼ねした」と三回言いながらのどを三回なでおろす。(樋の口)

○「ウガラスがウの木の下で昼ねしてウのど通るタイの骨かな、あぶらけんそわか」と三べん唱える。(上五箇)

(30) く さ

○馬になめさせる。(東地区・島・大久保・高鳥・下五箇)

○ささの葉や草で、くさをこすりそれを牛馬に食べさせる。(南地区の全部)

○スイカトウの木をせんじた汁をつける。(島)

○宇奈根の諏訪神社のツケ木のかまを借りて来て、顔のくさを刈るまねをする。(高鳥・谷新田、飯野本上・宇奈良)

○通端の草をとってなでて、馬にくわせる。(東地区)

○豆腐をすってつける。(東地区)

○馬のあぶくをぬる。(東地区)

○馬や牛になでさせる。(東地区)

○白南天の実を飲む。(樋の口)

○草刈かまで刈るまねをする。(樋の口)

○トウフとモグラをねってつける。(下五箇)

○灰をウドン粉でねってつける。(下五箇)

○ツケ木をかまの形に作ってくさをなでる。(宇奈根・飯野本上)

○ジゴクソバをせんじてのむ。(飯野本下)

○大豆をひやしてすってつける。(飯野岡村)

(31) おこり

○たまがすとよい。(南地区の全部)

○朝早く起きて、コウシン様をしばる(大久保)

○モノサシをねているフトンの下にいれる。(大久保)

○ねているフトンの下にシヨウブを置く。(大久保)

○十二時にナミアミダブツを百枚書いて一枚ずつ川に流す。(大久保)

○ナミアミダブツを百回唱えて、お札を川へ流す。(飯野・中新田)

○へびだと言って、縄を首にかける。(大久保)

○タニシをしきの下に埋めて、治れば川に流す。(大久保・高鳥)

○シキビの枝をとって来て、ねている人のふとんの下に入れておく。(高鳥)

○知られないように、ふとんの下に、位はいを入れておく。(高鳥)

○マムシ酒をのむ。(高鳥)

○四つ辻に米や金をあげる。(高鳥)

○ミヨウガの木に針をさす。(高鳥・飯野・新村・中新田)

○朝早く起きて、三つ辻でタラベシをつけて、どんでんげりする。(高鳥・樋の口)

○朝早く神社に出抜けまいりする。(高鳥)

- 足のうららにきゆうをすえる。(丸谷)
 ○迎え盆の夜、垣根の外に水をあげる
 とおこりにならない。(島)
 ○アジサイの花を土用の三日にとつた
 ものをせんじてのむ。(樋の口)
 ○地藏様の頭に茶わんで水をかける。
 (下五箇)
 ○はたおりのオサをふとんの下へ入れ
 てねる。(下五箇)
 ○お寺の水をもらって来て風呂をたて
 へ入る。(下五箇)
 ○朝早く床はをなれて留守にする。
 (樋の口)
 ○ササの葉をまげる。(樋の口)
 ○ネギ畑に入らない。(樋の口)
 ○明神様の水で風呂をたてて入る。(飯野新村)
 ○朝早く起きて三つ辻で逆立ちしてく
 る。(飯野本上)
 ○人に見られないように、墓場の地藏
 様をしぼってくる。(飯野本下)
 ○墓場の七本木を病人の知らないうち
 にふとんの下に入れてやる。(飯野
 侍辺)
 ○おこりの起こる時間より二、三時間
 早く御飯を食べて「さあおこってこ
 い」と待っているとおこらない。
 (飯野辻)
 ○ゆで卵を、しきに腰かけて食べる。
 (飯野岡村)
- 「じんない様」を半紙に書く。(飯
 野岡村)
 ○足の親指つま先におきゆうをすえ
 る。(飯野本下)
 ○朝早く人に会わないようにして辻参
 りをする。(大荷場)
 ○三つ辻にサンダワラを敷いて、ドン
 デンゲエリしてくと治る。(大荷
 場・離)
 ○送り出す。(大荷場)
 ○タニシを土台の下に埋めて治つたら
 川に流しますと祈る。(離)
 ○七本木を病人にわからないように真
 黒こげに焼く。(細谷)
 ○足の親指にきゆうをすえる。(細谷
 ・離)
 ○ネギ畑に入らない。(浮戸)
 ○おどかすとよい。(浮戸)
 ○寝床に蛇を入れる。(除川)
 ○ミヨウガの葉に針をさす。(除川・
 西岡)
 ○ミヨウガのくきに針をさす。(大荷
 場)
 ○ナマズの頭を食べる。(西岡)
 ○びつくりさせる。(新田・大曲・離)
 ○ねているふとんの下に毒だみを入
 る。(新田)
 ○マムシを食べさせる。(大曲)
 ○ミミズをせんじてのむ。(大曲)
 ○先達に拝んでもらう。(先達・藤岡)
- 柳生) (北海老瀬)
 ○たまがすとよい。(北海老瀬)
 ○ミヨウガの木に針をさす。(浮戸)
 ○新仏の七本木を知らないうちにおこ
 りにかかっている人のふとんの下に
 入れる。(浮戸)
 ○出抜け参りといつて午前二時頃神様
 に行き、ドンデンゲエリをして別の
 道を廻つて帰ってくる。(浮戸)
- (32) たむし
 ○たむしの出ている所に、シギの字を
 三つ書いておく。(北海老瀬)
 ○すずり墨をぬる。(本郷)
 ○たむしの所へ、田の虫食うと三回書
 くとなおる。(下新田)
- (33) かんむし
 ○すみ水で手の平に虫を食うといつて
 まじないすればみみずの様な虫がつ
 らなつて出る。(下新田)
- 「あぶらあけんそわか」と三回ず
 ついう。(山口)
- (34) くしやみ
 ○線香を細くくたいてのむ。(山口)
- (35) とげ
 ○一寸銅貨をけずり傷口につけた。
 (東地区)
- 青いおがみむしを御飯粒でねつてい
 る。(東地区)
 ○とげぬき地尊様にたのむ。(東地区)
 ○ゆずのとげでほり出す。(東地区)
- (36) 風 邪
 ○家中でかぜを引いた時いかの足を火
 ばちでいぶして二重に紙に包み、風
 の神大安売と書き、道の角にはつて
 来る。そしてそれを犬が食べるとか
 ぜを犬が買ったことになる。(北海
 老瀬)
- (37) 目まい
 ○「きみようちよらい、ありがたや風
 の神、弘法大師の筆の山」を三回
 いう。(山口)
- (38) 中 風
 ○かにの丸焼きを食べる。(高鳥)
- (39) 癌
 ○菱をせんじてのむ(高鳥)
- (40) よのめ
 ○米を縦にわって流しの下にくさるま
 で置く。(飯野新村)

(41) ところまめ

○とかげを黒焼きにしてつける。(東地区)

(42) 口の荒れたとき

○自分で御飯を食べる茶わんに水を入れて便所を掃除するまねをする。(飯野岡村)

(43) 目にゴミが入ったとき

○北を向いて三回つばきをする。(飯野岡村)

(44) 目をひきつけたとき

○井戸に首を入れて大きな声でその子の名前を三回よぶ。(西岡新田)

(45) 湯に酔ったとき

○ホーキをまくらにしてねる。(飯野本下)

(46) バスの酔止め

○半紙を四つ折りにして、しりの下に置く。(小合地)

十、その他

○針をなくした時はひざを三回なでる(大久保)

○地震の時は「まんじろこ、まんじろ

こ」という。(飯野本上)

(まんじろく、まんじろく)(飯野辻)

○長生きするには、ダイハンニヤの長持の下をくぐるとよい。(西岡新田)

○大病人の時は、八まん様にお百度参りをする。(大曲)

○三月のみそかの前の日に、さおの先に、みけをつけて軒下に立てると、悪魔除けになる。(大同西)

○「ねるぞ、ねだ、たのむぞ、たるきなにごとあらば、おこせ、こうばい」と三度となえてねればどんな事があつてもけがをして起きられないということがない。(大同西)

○四十二の二つ子。

○四十二才で子供が二才になる場合、子供を捨て子にする(あらかじめ、近所の人に捨ててもらおうように頼んでおく)捨てた子が帰った時を一才として赤飯で祝う。(四二年を

きらう意。(岩田新田)

○近所の火事の際は、屋根の上で腰巻を振る。(岩田原宿)

○牛、馬に逃げられた時。

○西東北と南に、マセハマテ中にたたずむこま止まる。(東地区)

○きたない虫を指さしたら、指で輪を造つてその中につばを入れる。(西岡)

附記

去る昭和三十五年八月一日、二日、

三日、四日の四日間にあたる県教委主催の板倉町民俗調査に引き続き、更に

その発展的研究をなすべく板倉町小中学校教育振興会民俗研究部「俗信

(まじない) 研究班」においては、町内において嘗て行われていた、或いは現在行われている「まじない」の調査

収集に当たつた。

この調査収集は、東地区では東小学校荒井進、中学校小暮新八、西地区

では西小学校野村圭二、南地区では南中学校岡島輝男、北地区では北中学校

飯島正吉の各教諭が中心となり、それぞれの学校の児童生徒を通じて調査カードを配布し、各地区民の御協力によ

り収集したものであり、その整理に当つては前記の諸氏にお骨折りいただいた。

なお、この調査を担当された先生方や児童生徒の諸君、並びに指導助言を下された教委宮田主事には衷心より感謝申し上げます。

尚、本文中()内の地域名は採集地を示す。また東、西、南、北とあるのは、それぞれ東地区、西地区、南地区、北地区を示す。

水の民俗

近藤義雄

板倉町は、昭和三年に排水機が設けられるまでは毎年のように洪水に見舞われ、町村教育委員会郷土研究部の作成した災害史年表によると、慶長以後でも百二十余回の洪水が記録されている程で、永い間水害になやまされた土地である。総論や各項目の中でも水に係属した民俗が多く記録されている。これらの中にもれたものをここに集録したが、このほかにも漏れた資料が多いものと思う。

I 洪水と水神信仰

(1) 高鳥

この地方は蛙が小便をしても水が出るといわれるほどの低湿地で、出水になやまされたところであった。だから少しばかりの降雨でも出水の心配をしなければならなかった。このようなことに関連した事柄を二三記してみよう。

この辺では、以前は板倉の雷電様へ雨乞いに行った。この神主におがんでもらった水を竹筒に入れて部落へもちかえり、それを大量の水でうすめて分けあい、それぞれの土地にふりかけて雨をまつのが例であった。その竹筒をもって雷電様へ雨乞いに行く人を見て、高鳥の人などは竹筒をうばいとったこともあったという。また蛙が家の中にとびこむと雨が降るといって心配したという。雨が降って水玉がとびあがると大雨があるともいふし、西に虹がたつと大雨が降るともいった。こんなときは舟わたりするなといわれた。

水番に出るときには半鐘をならしたが、次のような区別があった。

一番組は 一つおき

二番組は 二つおき

三番組は 乱打

三番組が出るようになると、堤防があぶないといわれた。いざというときには男あるぎり、村全体が応援に出た。

水番に出るときには、すき、くわ、俵をもち、また竹を切って行く。

なお土俵倉があつて、そこに土俵が用意してあつた。

出水の危険がせまってくると、舟のある人は軒下から下ろして、軒先につないで用意しておいた。また、水塚への避難の準備もした。

水神様

水が出ないように願う神は別にないが、堤防の何回もきれたところには、水神様をまつた。

(2) 細谷

ここでもすりばちの底に住んでいるようだといわれ、かつては(昭和四年以前)一年おきぐらいに大水が出たという。水害のときには水塚に家財道具をもって避難した。また出水のときにはあげ舟をつかった。

あんまり雨が長く降ると、クモキリフドウを寺でまつた。このときは村中で出てお経をあげ太鼓をたゞいて祈った。

水神様のまつり

細谷には次のところに水神様がまつられている。

中妻―個人もち。

上―コーチ全体でまつる。

下―細谷中でまつる。

陣屋―有志でまつる。

新吾曾根―個人もち。

水神様は水害よけのためにまつっている。

上コーチでは十二月一日子供がコーチをまわって銭をあつめておまつりをした。これは川へ「へし」をとりに入っておぼれた人をまつったものという。

下の水神様は、もと細谷中の水神様であった。まつりは十二月一日で、この日には赤飯をたく。

水難のために人命を失うと、個人的に水神様をまつる人もある。

細谷の氏神は長良神社である。この祭神は、藤原長良といわれているが、長良公に關した細谷での伝承は次の通り。

この辺の土地は佐貫の荘の土地で、もと荒地を開拓したところという。ここへ年に一回か二回、長良公が巡回してきて、この辺の百姓に目をかけていい政治をした。そこで、その徳をしのんで祭神としてまつっているものという。

他の伝承では、邑楽郡千代田村瀬戸井地先の利根川の土手がぎれたときに、犠牲になった人が長良公だという。

雨が降って水玉がとびあがると大雨があるというので心配した。西に虹がたつと大雨が降るともいう。このときは舟わたりをするなといった。

水番について

この辺は矢田川、渡良瀬川にはさまれているところなので、しらじ(すりばち)の底の方にあたっているといわれていた。上の方で荒れれば水がたまってくる。そんなとき、財産の大きい家から順に水番に出た。

一番組は、大きい家

二番組は、中ぐらいの家

三番組は、小さい家

となつている。細谷の長良神社は、瀬戸井からの分社だという(みやま文庫刊「利根と上州」上所収、拙稿「伝説と祭礼」中に、邑楽、新田郡下の長良、長柄神社の分布を图示しておいた)。

(以上井田安雄資料)

(3) 板倉町の水神信仰資料

(中学生の調査カードによる)

(1) 中新田(針ヶ谷)

ここには寛政十二年十一月吉日建立の水神宮がある。この祭日は旧の六月二十日、中新田中でまつる。堤防がきれいなので、水をまつったものという。

(4) 西岡

現在は渡良瀬川の中になつていたのでなくなつてはいるが、むかし、船頭総代四名がたちあつておまつりをした水神様があつた。

(5) 離下

祭日は十二月一日、昔は祭礼もさかんで、甘酒を村人や通行人に出したという。

(6) 侍辺字新部落

祭日は年三回、旧の六、七、八月の十九日

(7) 原宿蛭田

祭日は六、七、八月の十九日

(8) 靱谷字宮前

水が出ると瀬戸井というところの土手がぎれるので、土手の中に瀬戸井の人を生き埋めにした。その人の供養のために七月十四日に念仏をする。

(9) 本郷松本豊太郎氏宅地先

ここはもとの渡し場のあとという。ここに水神宮が一つある。戦争前(第二次世界大戦)は七月三十日(水泳のさかん頃)におまつりをした。コーチの当役四名が中心になってした。現在はしていない。この水神宮は、ここが渡し場で、間違いがあるのでたてたものという。

(イ) 北海老瀬

祭日は旧の十二月一日、中山・舟戸・旧舟戸の三部落が主体となつてまつた。各戸から寄付をし、おそなえ、供物等をあげ、これを近所の子供たちに与え、水難者の供養と子供の水難よけとした。

(ロ) 宇奈根

昔、この部落には沼があり、その沼主をまつたもの。昔より六月二十四日に部落全体でおべっかをする。

(ハ) 岩田新田

祭日七月三十日、岩田と骨稽でまつている。

水難防止と、水難で死んだ子供たちの供養のためにおまつりをしてい

(ニ) 新村

夏の三カ月、八、九、十月の十九日が祭日。
新村全体でまつっている。水で死んだ人の供養としておまつりをして

Ⅱ 明治四十三年の洪水

(1) 峯

この年の洪水はひどく、谷田川と利根川と渡良瀬川が一つになり、岡鳥宇一郎氏の家では水塚の上の土蔵の錠前までのつた。天神様は堤防より二米近くも高いのに床上一米ものつた。一峯権現様も石段が二段残っただけとなった。

出水が旧盆の時、水がひけないので秋に麦がまけず、二月に大麦を播いた。

食べ物がないので流れて来る青物を食べていた。二、三日過ぎて山口から舟で水を運んでくれた。水の入らない家はなく、二階までのつた家もあり、土間が堤防と同じ高さのA氏の家は全部流され、水番の人に麦を五俵かついできてもらつてやつと助った。天明六年の洪水の時は海老瀬の四四戸のうち一七軒が流失、一三三軒が潰家となった(市沢家文書)。

(2) 海老瀬字中下、中新田

水の流れは急行列車が来るようであった。妻沼の橋が欄干ごと流れて来て、その上家や材木が揃って流れその中に舟で入ったらもう出られない状態であった。これも渡良瀬川の堤防がなかったからである。このときは八月十日から十二月一日まで及びこの日の入営には舟で出発したものである。最近では昭和二十二年のときが最も荒れ、一丈二、三尺の砂山ができて被害も甚だしかった。この時には東武鉄道に砂を払つてもらったが、この地の洪水は水が流れないから物も流れず、床上浸水が四十日から五十日も続いたのであった。従つて井戸も深く掘っている。鉋毒も水があれば大した被害はないものである。この村では昔から洪水となつても他所には逃げ出さない。何故なら土地は肥えていて、水害のあとは無肥料で充分間に合うからである。

(3) 水塚づくり

海老瀬地区では母屋の裏の竹藪の中に塚を築き、上に土蔵や小屋を建てている。中新田では、農閑期に畑の土をビクに入れ馬にのせて土積みをやつた。これをツチツケとよび、掘り下げた畑を田に変えた。

(以上池田秀夫資料)

III 水害食制

昭和三年に排水機場ができる前とあとでは、食制の上でも大きな変化がみられた。麦作中心の農耕から、稲作中心の農耕への転換がその第一の原因であった。以下には、主に過去における海老瀬地区の食制を中心に記してみよう。

海老瀬地区では、今は米が主食になっているが、むかしはこの辺は水害がひどかった地方なので、主食は麦七に、米三ぐらいの割合であった。水害のときなどは、麦だけを食べたことがあった。

間食としては、やきもち・おたらし・こうせん・そばっかきなどあった。これらは場合によっては主食としても食べた。

やきもち、めしののこりをうどんこにくるんでつくった。これは油をひかないでやいたもの。

おたらしというのは、うどん粉をかきまぜて、あぶらをたらしてやいたもの。

こうせんは、はだかむぎをいって粉にしたもので、砂糖をいれてこじゅうはんとして食べた。天候不順のときは、麦がひきわりとか、押麦にできないので、こうせんにしてたべた、食糧不足のときには、こうせんを湯がきにして、夕飯がわりに食べたこともあった。

そばっかきは、湯のにえたったものにそば粉をいれて醬油をつけて、夕飯に食べた。

麦かり時分の忙しいときには、正月の餅をとっておいであげて食べた。明治三十九年頃、河川工事のもっこかつぎをしたが、このときには重

労働であったので、沢山食わなければ体がもたなかったもので、十時頃と三時頃の二回こじゅうはんをたべた。弁当は一升ぐらいもっていった。このときは、五百匁の弁当をもっていた。この当時の土端つきうたに次のようなものがある。

すつとこ上州館林、わりはんごせんでばらつとせ
この辺では、三食を、朝はん・昼めし・ゆうめしといい、間食をこじゅうはんという。

大食の基準としては、六合はたもちがある。これは、小豆一合と米五合でつくったもので、これはとても食べられないが、大食の基準にされた。

高鳥辺でも大水に悩まされつづけてきた地域であるが、ここでは、水が出たときには、麦が主で、米は三分ぐらいしか入らなかったという。

むかしは、米がなかったたので、米の代用として粟で餅をついたほどであった。代用食としては、やきもちをたべた。麦を買えないほどの人は、麦を粉にひくときにでるくずを食べたという。こんなことは、明治の頃、大水になやまされていた頃はよくあったとのことである。

石塚もまた水害の多いところであった。一年おきとか、ひどいときには月に何度も大水にあったこともあったという。そんなわけだから、米はあてにせず、麦は神様あつかいにされたとか。米は全くいれないで、わりめしを食べて暮していたこともあった。身上のいい人で米三に対し麦七ぐらいの割合であった。この程度の家のことを、あすこんち（あそこの家）は楽のうちだといった、ふつうの人は一升のうちを米を一合ぐらいいれてたべた。うどんでも、コト日でもない食べられなかった。

（井田稿）

麦の食べ方

昭和のはじめ頃までは麦一升到米二合はよい方で、昭和三年以後急に変わってきた、今ではその反対の米八合に麦二合ぐらいの常食、丸麦は夜たいて朝また煮るので小豆をにるようであった。ヒキワリは三つに分け、一番細い粉のようなものは魚を捕る飼にし、馬にもやった。時には麦だんご（オコトの日）や麦まんじゅうをして食べた。ウドンの時はソバ代用にして大麦の粉を入れて食べた。お客にはウドンを買ってもてなした（通り）。

VI 排水機の出来るまで

板倉沼の干拓は、板倉町全体を豊かな町に生れかわらせた。これには永い間の努力もあるが、海老瀬の松本英一さんを中心としたこの地方の努力があったことを特筆する必要がある。元来毎年のような洪水と、洪水の度に足尾の鉱毒が流れ込むので三年一度の収穫があればよい方だといわれていたので、当時は竹藪も枯れ、青竹もすっぽりぬける程の鉱毒でどうにもならなかった。堤防を高くすればジスイのはけ口がなく、困窮の村では大工事も出来ないで、洪水の度に崩れる堤防工事で村人は手間賃をかせぎ、女性も大部分この工事に出かけた。大正十二年頃農商務省令が出て、五〇〇町歩以上の土地改良は県営工事となるというので地元負担金二五パーセントですむから板倉でもと立上った。その中心が松本英一氏であった。しかし、当時は加藤高明内閣で、政友会の武藤金吉の地盤のため、松本氏等武藤派の圧迫で県が受けつけなかった。そのため、松本氏は同志一八七名と共に政友会を脱党した。その結果県会で二〇万円の予算が成立し、この大工事がはじまった。しかし、松本氏は政友会武藤派から反対され、足蹴にされる程の苦を忍んで村の生れかわりのために闘ったのである。排水機完成までの沿革を邑楽土地改良区維持管理概要書から抜書きすると次のとおりである。

本改良区地域は群馬県の最東端に位し南に利根川北に渡良瀬川を控へ其の間にある約五千三百余町歩内板倉沼を中心に其の周囲の低湿地二千余町歩が排水対象地域にして、明治の初期迄は肥沃の土壌なりし故農作物も無肥料同様にて相当な収穫を挙げ得られたるも足尾銅山の開発により、渡良瀬川の水源地帯たる足尾の山々が鉱毒の被害にて禿山と化し僅かな降雨にも其の都度渡良瀬川氾濫し時には破堤を来し大洪水を引起すこと歳々にして、明治の中期には足尾の禿山より流れ来る泥土と鉱毒の被害に悩まされ農作物の収穫は年一年と減少、渡良瀬

沿岸の草木は枯死するもの多く加ふるに河床は急激に上篤し其の影響により耕地は日増に湛水の度を加へ従来湛水の被害なかりし区域まで湛水又は洪水に見舞はれ、農民は極度に疲弊困憊に陥り北海道に移住するもの、都市へ離村するもの相継ぎ往年の人口は次第に減少しつつあるによりこれを憂ひ、有志相寄り相謀り識者を頼み其の打開に極力方途を講じつつあり、鉱毒並に洪水除去の指導者時の代議士田中正造氏身命を賭して東奔西走住民相呼応して打開に邁進したので其の結果足尾銅山鉱毒除去施設並に渡良瀬川河川改修施行となり鉱毒除去設備は銅山側に於て施設を行ひ、河川改修は内務省に於て施行せられ栃木県赤麻沼を中心に谷中村全村の立退きを行い遊水地約四千町歩を作り川巾を広げ堤防を増築、大正六年には完成の域に達し洪水の被害は免かれたとは雖も住民の安堵も束の間足尾方面より増水の都度流れ来る土砂にて折角完成せる河川も河床数年を経ずして上篤為めに湛水の被害相継ぎ此処に於て、又々これが対策に有志相寄り相謀り仲伊谷田排水樋管普通水利組合を設立大正十年十月海老瀬村東谷地先に自然排水樋門を作り、板倉沼より直通水路を掘鑿旧渡良瀬川を通し遊水地へ悪水排除に努めたるも最湛水時には、外水上昇の為め排出不能にして其の効誠に尠なく止むなく機械排水を計画したるに住民中には機械排水に對する知識少なき為めに反対者多く提唱者有志は説得に昼夜を分たず努力を重ね迂余曲折波瀾を押し切りつゝ猛運動の結果、其の熱情が報いられ大正十五年には政治的解決を見同年県営邑楽東部用排水改良事業として、群馬県営事業に採択せられ同年十二月邑楽耕地整理組合設立認可せられ昭和二年工事着手、昭和三年七月には局部的運転が開始せられし所其の効果予想以上にして年々の湛水より救はれたるのみならず板倉沼周辺の不毛地たる沼沢地まで年毎に開墾せられ、一躍群馬のウクライナなどと賞揚せらるゝに至りたるも是偏に先覚者諸兄の偉大なる効績に外ならずと往時を忍び感謝感激に堪へず、人口戸数も日増に増加し寔に安住楽土の地と化しぬ此の実績より見ても如何に効果

があつたかを窺ひ知ることが出来る。

爾今三十有余年を経過したるも戦後上流部の土地改良推進により低地たる本地区に向け排水路を接続するは自然の成行にして当時集水面積千五百町歩を対照として設計したる排水機にして且老齢となり昭和二十七年ポンプ電動機共大修繕を施したるも食糧増産による区内外の土地改良は集水面積を二倍の約三千余町歩の多きに達し加ふるに流水の速度は急激となり河床上昇の影響と共に板倉沼周辺の約五百余町歩は歳々湛水の被害を蒙ることあり、これが排水能力不足は第一排水機場に於て二屯、第二排水機場三、六屯、第三排水機場三、四屯、計九屯の大きに達す以上は楠承水講完成によるも尚不足分にして第二排水機場は継続事業としてデーゼルエンジン二百馬力ポンプ口径九百耗増設中なれど尚且第一、第三排水機場分五、四屯の不足にて湛水排除の方途として楠承水溝の早期完成と梶営業事業とて排水機の増設の一日も早からん事を一同心から要望して止まざる次第なり、尚土地改良法の制定により昭和二十七年四月一日邑楽耕地整理組合を邑楽土地改良区に改組せり(昭和三十一年五月稿)。

こぼれ話 (12)

隠居のこと

隠居には年寄りが出た。別居する例はあまりない。隠居する場合、末子をつれて出る場合もあり、家人と不仲の為出るものもある。隠居免をもつて出るのは、隠居する人に後妻がある場合とか、つれ子をして隠居する場合などである。年寄りのところへ若い人が後妻にくるときには、隠居免をつける条件を出す場合もあつた。隠居は村人足には出ない(大曲での聞書)。(井田)

こぼれ話 (13)

子守りうた

ねんねろ ねんねろ ねんねしな
ねんねて おきれば おちちやる
ヨイヨイ

おともり こもりは つらいもの ヨイヨイ
あめかぜふいても 宿はない ヨイヨイヨイ

よいよいよい子だ
十五になつたら お屋敷ひろげて 倉たてて 倉のまわりに
松植えて お松の小枝へ たかとめて たかとり天神さまへ
おさんけする(願かけて) ヨイヨイ

よいよい よいがかか のろまかか
去年の三月 はたかけて
今年の三月 おりきつた ヨイヨイ

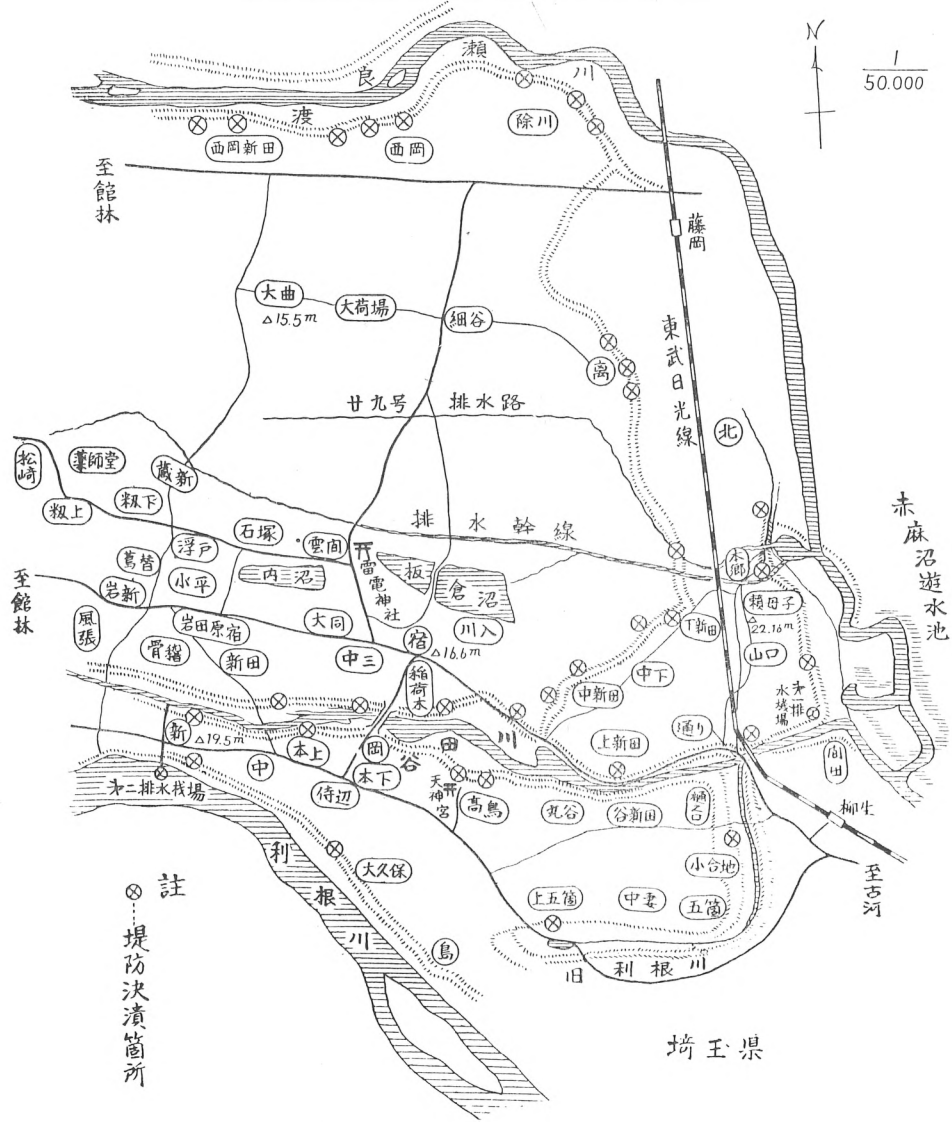
(大曲にて採集 井田)

板倉町における水塚・揚舟分布集計表

(昭和三十六年一月一日現在)

区分	行政区分	戸数	水塚数	昔あつた数	揚舟現存数	昔あつた数	揚舟数
1	除川	190	4	1	12	6	12
2	西岡	179	1	1	16	13	16
3	西岡新田	68	2	11	25	10	23
4	大曲	63	21	2	31	3	31
5	大荷場	60	25	13	41	15	32
6	細谷	139	44	21	79	17	74
7	離	71	27	19	41	21	32
/	旧西谷田村合計	770	124	68	245	85	220
8	北海老瀬	79			16		16
9	頼母子・本郷・仲伊谷田・下新田	125	30	5	72	23	58
10	山口	103	2		21		21
11	通り・間田・峯	72	19	2	32	3	32
12	中下・中新田・上新田	117	32	11	55	6	53
/	旧海老瀬村合計	496	83	18	196	32	180
13	樋之口・小合地	69	23	14	39	10	32
14	五ヶ・中妻・上五ヶ・前宇奈根	106	27	19	36	6	36
15	高鳥・丸谷・宇那根	165	50	25	70	14	64
16	島・大久保	131	25	19	41	8	35
17	本上・本下・岡	109	13	25	19	22	19
18	新田・中新田・侍辺	85	9	16	21	9	19
/	旧大箇野村合計	669	147	118	226	69	205
19	宿南・宿北・稲荷木南北	115	11	10	33	18	33
20	川入東・川入西・川入南	123	21		55	22	48
21	中ノ上・中ノ中・中ノ下	133	9	11	59	15	45
22	大同東・大同西・雲間南・大同北	159	4	1	50	24	42
23	石塚東・石塚西	69	8	1	28	6	20
24	原宿・新田・骨稽	209	13	17	49	21	48
25	下山前裏・本合・新田・風張・小平・鷺替	184	1		22	4	22
26	下宿・本郷・花見道・浮戸	108	2		33	16	33
27	糺中・下・宮前・薬師堂・上北・松崎	155	2		9	8	9
28	内蔵新田南・内蔵新田北	45	4	2	13	3	13
/	旧伊奈良村合計	1,300	75	42	351	137	313
	板倉町総合計	3,235	429	246	1,018	323	918

板倉町全圖



板倉町の民謡と民俗芸能

はし が き

板倉町の今回の総合民俗調査で、筆者は前二回の分担とおなじく、特に全域にわたり民謡および民俗芸能の分野を分担した。ちようど例年にならない酷暑の年であった上に、八月一日からの板倉町は急に連日焦げつような暑さであった。この炎熱の中でNHKの好意と村当局による車の手配で、予定に組まれた実演を次ぎ次ぎと見てまわった。目のまわるような調査行の苦しさはおそらく生涯忘却することがないであろうほどの重労働であった。流れ下る汗でぬれたシャツを絞りながら、写真機とノートを持つての連日の調査を続けたのも、実は大きな理由があったからである。その一つは、この炎熱にもかかわらず、カシラを被っただけで脳しんとうを起すような獅子舞を実演してくれた村の人々、流下する汗をこらえて踊ってくれた神楽の人々、さては渡良瀬川畔で、反射と草いきれにムツとする現地での土場打ち唄の実演、祭礼のおねり、あるいは麦打ち唄の実演など、とにかく炎暑のもとでは到底行うべきはずでないものを今回の学術調査のため特に繰出で待っていてくれるからであった。その好意に答えるためには、最早

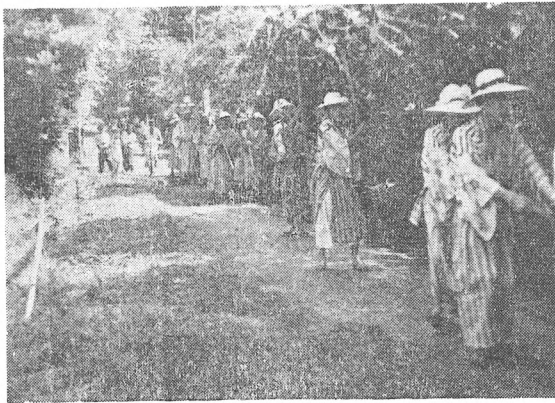


大杉神社の神輿

や自分の健康や都合は理由にならなかつたからである。その熱意その素朴な好意は、いくら言を費やしてもまだ述べつくすことはできない。前二回の片品村、上野村でも、それなりに村の人

萩 原 進

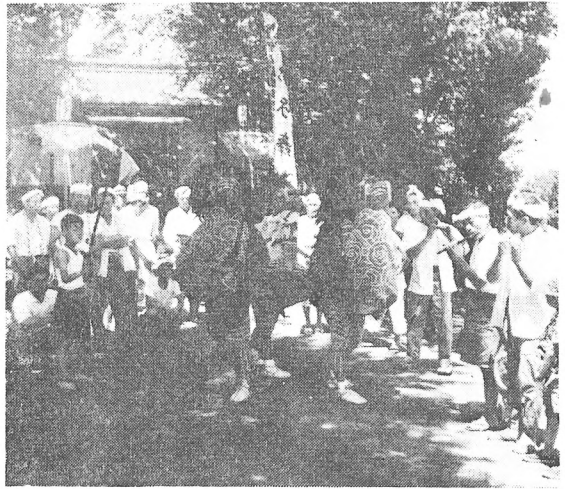
達の協力はあったが、板倉町ほどの異常な熱意はおそらく今後もあり得ないであろう。立てられたスケジュールでちゃんと待っていて呉れる村人のことを思うととにかくどこまでも約束を守らねばならぬ義務が私にはあった。第二にこの調査



萩谷獅子舞の道ゆき

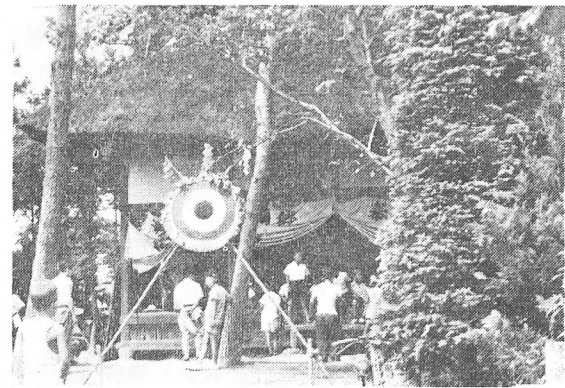
行が無理押ししてきたのは、次ぎ次ぎと研究意欲をかき立てる未知の世界がくりひろげられたからである。その一つについては各項において述べるが、群馬県東辺で、茨城、栃木、埼玉に境を接する立地上の条件と、利根川と渡良瀬川には含まれている陸のク孤島である邑楽郡を代表する特殊な環境のもとにあるだけに、いわゆる平野部の文化産業経済とは全くちがった

歴史を経ってきた地帯である。その環境のもとに遺されている民俗芸能、民謡、行事の一つ一つが、いわば「非群馬的文化圏」に属するものばかりであったことである。たとえば、獅子舞にしても、県下の三百有余の多岐の獅子組の中でも、素朴さを持つ古い型を遺し、むしろ栃木から奥



飯野新村の獅子

羽地方の系統に近いものが見られ、民謡でも麦打ち唄一つに、勢多郡の赤城南麓地帯とは全く別の系統であるものが歌われていた。念仏踊りもたとえ和讃の系統を引くものであっても、踊り自体は古いおもかげをとどめており、県下ではめづらしいものであったことや、あたらしい時代のものでは無い時代のものでは無い時代のものである。



弓取り式の的

執筆中足尾鉍毒事件の調査で往訪したり、道しるべの調査、民謡の調査などで足を踏み入れた地方である。また本調査のあとでも、足尾鉍毒悲歌や鉍毒事件の再調査で訪れているので、かならずしも全部が今回だけの調査報告の内容ではないことをおことわりしておきたい。ただ今回の調査でどうしても手掛りのなかった地方歌舞伎（地芝居）と人形芝居は痕跡さえつかめなかった。調査不十分であるのか、他の理由なのか、今後に残された課題として今回の報告から全然除かれたのである。

が土場打ち唄が、おなじ邑楽郡の千代田村あたりとはちがったメロディを持っていたり、一つ一つが私の興味をそそるものばかりであった。総合民俗調査が、板倉町において行われた意義と成果は、少なくとも筆者の調査対象においては大きな意味をもっていった。それがまた群馬県全域の民俗芸能と民謡に占める位置の高さをも物語っている。本報告は、すくなくも群馬県の大部分の地域の調査を進める上につねに一つの問題を提起するであろうことはたしかである。このすぐれた芸能の宝庫ともいべき板倉町が余計に熱意と興味を抱かせたのである。

報告をする範囲は、主とし郷土芸能の分野であるが、特に行事の一つとして「弓取り式」のような特殊なものが調査分担の中にあつたのでこのことは他の調査者が実演に立ち会えなかつたことにもよるが併せて報告しておきたいと思う。

なお、板倉町の調査は今回の共同調査のほかに、以前群馬県議会史の

I 民謡

一、民謡概見

板倉町の民謡は、地方色のある作業唄が県内の他地方に見られないものとして採集できたことは特筆されてよい。田植え唄が現在も勿論なく過去においても歌われなかつたらしいが、その代わりに麦打唄に少なくとも二つの系統が存在していたことは、他の民俗一般でムギに関するものが多く、イネに関するものが少なかつたことと一致する。またこの地方は長い間ムギを主として作られてきた農業の歴史とも一致する。そういった点では水田耕作の民俗よりも畑作を主とした傾向が顕著であり、民

謡においてもおなじであったことは注目される。

また板倉町地方の大きな立地条件である低湿地帯、湛水地帯である上に、連年大水害になやまされてきた「水」との関連が濃い地方である。現に大きな板倉沼を中心として、到る所に小さな沼が点在している。そこに生業を求めることは当然であり、民謡の作業唄に県下ではじめての藻取り唄が採集できたのもこうした特殊の条件下におかれていたからである。さらに水害と関連してのいま一つは、水害から村を守るための大土木工事の際に、村の婦人が狩り出されて、堤防を築く時に歌った土場打ち唄が採集できたのも興味深い収穫であった。畑作を主とした麦打ち唄のほかに、水田関係では田の草取唄が歌われていたのも珍しかった。機織唄と糸挽き唄もあったが、自家生産のものを糸にした時の作業唄と、機織りはおもに賃機であった時のもので、貧乏のドン底にあつて少しでも現金を得ようとした暮らしの一面をのぞかせるような哀愁を帯びたものが多かった。

一般的のものとしては、いわゆる八木節がまだ口説きを主とした頃のふしまわしで遺されていたことも意外な収穫であったといえよう。明治四十三年の大水害を主題とした門付芸の祭文が、まだ一部に記憶されていて聴くことができたが、これなども板倉町地方が持つ一特色としてあげられる。

しかしなんといっても、陸の孤島板倉町として特記しておくべきものは念仏踊りとそれに歌う念仏和讃である。勿論最初は信仰的な発生によって、仏を讃えるものであったのであるが、娯楽の乏しいこの地方の婦人が、レクリエーションとしての要素を持つようになり、それにつれて、時事問題や歌舞伎の筋書きなどまで和讃の中に採り入れた娯楽性への転換を見せている事實は、郷土芸能が信仰から出発したという一般論を実証しているようである。このように、板倉町の民謡は矢張りその地域の中に芽吹き育ってきたものであるという重大な事実を前提と

しているのである。

二、作業唄

麦打ち唄 現在でこそ水稲と陸稲がゆたかに実のり、上州の穀倉地帯とか、上州のウクライナなどと呼ばれているが、米どころとなつたのはつい三十年この方で、明治四十三年の大水害をピークとしての板倉町一帯は名だたる水害の名所で、利根川と渡良瀬川にはさまれた低地は大雨ごとに濁流が流れ込み、耕地も宅地も水に漬ってしまった。水屋とかあ



ムギ打ち唄を伴う作業（西岡にて）

げ舟がまだ各地に見られるのもその頃の名残りである。しかも湛水地帯であるからひどい時は一月も二月も水が退かない。その水害期前に収穫できるのは麦だけで、稲作は収穫前に全部冠水埋没してしまつたために収穫皆無を覚悟しなければならなかつた。いきおい麦に頼るほかなかつた。その麦をとり入れて、いわゆるコナす時に歌われたのがこの麦打ち唄である。この作業はよく乾燥した麦をむしろの上に並べ、クルリ棒とよぶ麦打ち棒で、ドシン、ドシンと叩いて穂を落すものであるが、クルリ棒はまたこの地方ではフリ棒とよんでいる。単調な作業であるため、歌によって動作を揃え、疲労を少くしたのしみながら作業を進めるのに役立つ。作業形式は「むかい打ち」といって、十四、五人が両側に分かればむかい合つて麦打ちするやり方、「合い打ち」ともいう。いま一つは

一側だけに並んで打つ打ち方である。唄はその作業形式では別にちがうわけではない。現在歌われている麦打ち唄は二つの系統がある。一つは哀愁を含んだもので、メロデイもすばらしいものがある。県内の作業民謡の中では断然傑出してゐる。大曲部落の青木喜太郎さん（六十三才）と橋本げんさん（七十一才）が歌ってくれたものである。囃子の合の手は橋本げんさんが入れたもので、普通歌うときは合の手はこれほどこまかくは入らない。

古河のサー一二丁目の、アアドッコイドッコイ

あぶらやの娘、（合の手）ハアどこ通る畜生真ん中通りやがれ

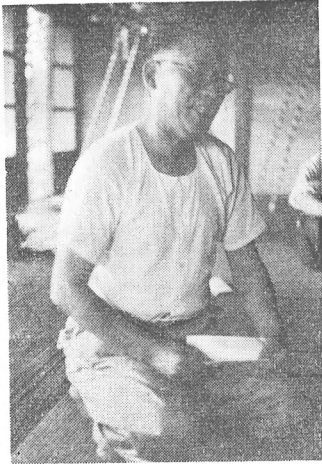
油トトロ、ハイ、腰までつけて、ハイハイハイ

腰の光りで、ハイ、古河の町照らす、ハイハイハイ

いっちようとれ、判とれ、娘に婿とれ……ブッコメブッコメ

合の手に入っているものは、どうも馬子唄のものらしいが、最後のブッコメ、ブッコメで麦打ち唄の特長が見られる。「ハア、ブッコメブッコメ」は、赤城南麓の麦打ち唄にも使われているが、ドシンドシんと力強く打ち込む加勢の囃子でもある。一見作業の手運びと合わない

青木喜太郎さん



青木さんによって次ぎのようなものが歌われた。

（合の手は略す）

この系統の別の歌詞はがうまく合っていた。この系統の別の歌詞は

○上州よいとこ、お山が招く
赤城つつじに、榛名のわさび

○来てはチクチク、おもわせぶりに
今日もとまらぬ秋の蝶

○義理はひと筋、流れは清い
利根でみがいた、心意気

○上州よいとこ、景気の波で
桑に黄金の、花が咲く

西岡の小暮藤吉さん（七十二才）が歌ってくれたものは、この系統とはちがって、テンポも早いむしろ端唄の変化したものに近かった。

古河の舟戸で、今朝見た島田

男泣かせの、ヤレ投げ島田、ドッコイドッコイ

という歌で、ほかに、

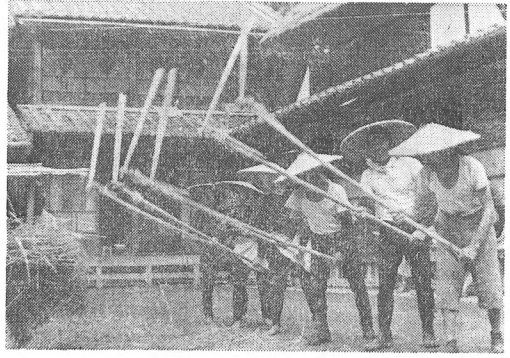
ふじの白雪や、朝日とける

とけて流れて、ヤレ三島へ落ちる、ドッコイドッコイ

主にもろうた、洋傘を

晴れてナアさす日は、ヤレ何時だやら、ドッコイドッコイ

といったもので、古河の舟戸はすぐ近くの茨城県古河を主題にしたものであるし、ふじの白雪や……は有名な民謡の替え唄、主にもろうた……は



ムギ打ちの実演(高島にて)

明治大正期を物語る淡い感傷さ
えにしみ出している。

高島部落で聴いた麦打ち唄は
「古河の舟戸で：」を「古河の
二丁目の：」と同じ節廻しで歌
ってくれたが、そのほかに

わたしやお前さんに

首たけられた

足駄はいても、とどかせぬ

という別の歌詞があった。最近
麦の脱穀も機械でやるようにな
ったので、だんだん麦打ちもや

らなくなつたそうであるが、この麦打ち唄だけはまだ生活の中に生きて
溶けこんでいる。前橋近辺の麦打ち唄の
浅間山から鬼がケツ出して

なたでブツ切るよな尻をたれた
ブツコメブツコメ

といった威勢のよいものではない。どこかに哀愁と素朴さを持つ唄で、
非常に郷愁をそそるものである。大正十一年に内務省が全国の府県に紹
介して民謡の調査を行ったことがあるが、群馬県で行った調査につい
て、当時の新聞が次ぎのように報じているが、その代表的なものの中
に、邑楽郡地方の「古河の二丁目の：」が入っているのを見ると、伝承
の正確さと共に、現にそれが今も歌われているという事実との関連を知
る上に興味深い。

県下各郡の民謡を調査、県では内務省からの照会で県下各農村に唄は
るゝ民謡に付いて調査中であつたが、此程に漸く取纏を了して同省に

報告した。今其主なるものを挙げると左の如くである。
勢多郡地方の田植歌

吉原の出口の茶屋でイヤハノ三味が鳴るく
立より聞けばイヤハノ女郎衆がひく
北甘楽地方雑謡

蚕上手の嫁とりあてて家のしんしょも太り綺
佐波郡地方

南山根笹の露かイヤハノ雨となるく
簑笠持てやイヤハノ太郎治殿(田植唄)

孫が唄へば伯父がはやす、瑞穂榮へる田植歌(都々逸)

花の盛りを人にも見せず、知らぬ顔するやぶ椿

ヤレ打止(込)めく(麦打唄)

邑楽郡地方

古河の二丁目の油屋の娘、油とろく腰までつけて
腰の光りで、古河の町照らす

(「上毛新聞」大正十一、四、十五)

田の草取唄 これは大曲部落の青木喜太郎さんが一人だけ歌えたもの
であるが、節は軽い端唄系統のものであり、歌詞も都々逸あたりの影響
を多分に受けている。かならずしも田草取唄とはいえないが、田の草と
りによく歌つたものだといつていた。

三千世界のカラスを殺し
主と朝寝がしてみたい

赤城おろしの西風よりも

主の口誦（くぜつ）が身にしみる

遠く離れて逢いたい時は
月を鏡にすればよい

お月さまさえ泥田の水に
落ちてゆくよな浮き沈み

といったものである。ことに「お月さまさえ」は、長い間水害に苦しめられたこの地方の農民の歴史を物語るかのようで、民謡と社会性を如実に思わせるものがある。群馬県には田の草取りの作業唄がほとんど知られていないだけに、板倉町のこの歌は資料的にも一つの価値を持っているものである。

土場打ち唄 土端打ち土羽打ちとも記されるが、堤防を築く時の土盛りを固めて作ってゆく作業の時に歌われる作業唄である。明治四十三年の大水害のあと、内務省の直轄工事で利根川渡良瀬川の河川改修工事が巨費を投じて行われた時に、この板倉町区域にも大きな築堤工事が多大の人力を注いで続けられた。作業はおもに婦人でカスリの上着に股引をはき、夏は焦げつくような炎天のもと、冬は指も凍るような霜柱を踏んで行われた。当時の土場打ちに出たという佐藤トクさん（七十二才）と齋藤しうさん（六十四才）の二人の話によるに、当時現金収入が少なかったのだとえいくらの金でも欲しかったので毎日働らきに出たものだという。手に六尺ぐらいの棒を持って、十四、五人から二十人を一組みとし、その中に音頭取りとよばれるのど自慢を中心に、土工達のつみあげた堤防の土を打ち固める仕事であった。土木機械のなかった大正時代の築堤工事はすべてが人の力でやる以外なかった。毎日朝の三時半頃に家を出て現場にゆき、夕方は四時半までやったが、仕事をして家に

帰ると疲れてしまつてなにをする気力もなかった。それで日当は最初二十五銭、あとで四十五銭になり、最後に五十銭となった。勘定は十五日払いであったそうだ。音頭取りをやった齋藤しうさんは、土場打ち唄を歌うために、毎日餉が配給され、その餉をなめなめ歌ったそうである。時にはなめ切れないこともあった。作業は単調なもので、ちようど鉄道線路工夫がやるように、力をゆっくり長く使うようにし、疲れるために唄を歌いながら進められた。作業は「均らし」とよぶ土盛りをならす仕事と、「踏み付け」といつて踏み



民謡を歌う齋藤しう（左）
佐藤トク（右）さんの二人

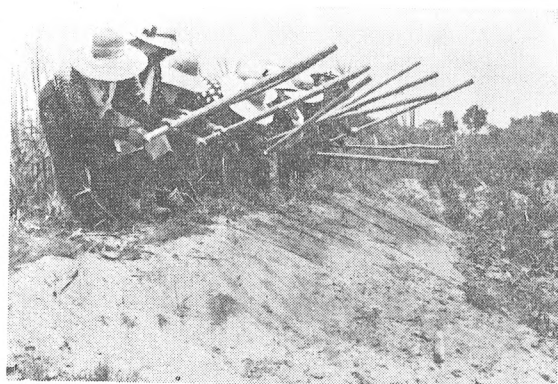
固める仕事と、「棒打ち」とよばれる強く斜面を打ち固める仕事が多くかえされたものである。

唄は地搦唄とかサンヤ搦きとよばれる系統の曲節を持つている。今回の調査では、わざわざ海老瀬地区の山口の堤防下で、村の婦人十名ばかりに、当時そのままの服装をしてもらって作業の実演と唄をやってもらった。土手の上に並んで、唄に合せて行われる作業を見ていると、そこに過去の重労働にあえいだ歴史が現実のようによみがえってきた。最初は「ならし唄」とよぶもので、

サアサ、皆さんだあよ——
やりましょじゃないかよ——
お角力甚句でも、ソオレ端唄でも

と、音頭取りが一だんと声を張りあげて歌うと、そのあとに打ち手は土

羽棒とよぶ六尺棒で土を打ちながら均らしてゆく。この一節ごとの合の手には作業があるわけで、しまいには歌い手と打ち手の呼吸がピッタリ合っている、機械的にリズムカルに作業が進んでゆく。音頭取りの歌っている中は打ち手は足踏みしながら休んでいるのである。



土場打ち作業

土羽棒ナア

ハア揃い手だよ

ならしを頼むよ

ならしナア

無ければだよ

土羽じゃないよ

もならし唄の一つである。これに対して、特に力の要る棒打ちになると唄も力が入った「棒打ち唄」になる。

ドッコイサノハイコリヤサ
東山出てみる
筑波の山で
鹿が紅葉を踏み分ける

といったものが歌われた。しかし、このふたつとも似たメロディである。わたくしが以前に採集した邑楽郡千代田村赤岩の土場打ち唄は、板倉のものより調子が高く、テンポも早い。節まわしもいくらか違っている。作業のやり方はほとんど同じであった。その歌い方は、
(音頭) サアサ皆さんやりましようじゃないか

(一同) アドッコイコラコラ

(唱和) 角力甚句でもさんさでも

というもので「さんさ」というのは、「さんさ時雨か萱野の雨か、音もせで来て濡れかかる」の有名な仙台のさんさ節のことである。板倉ではやはり「角力甚九でも端唄でも」といっているが、共通していることは、角力甚九をあげていることで、甚九がかなりの要素をなしていたと見てよいであろう。赤岩のものとしてはほかに、

ここは上州赤岩河岸よ

出船入船繁昌する

蚕上手の嫁御をもらい

細い身上(しよう)も太り縞

可愛い男に店番させて

そばで糸挽き悪くない

米のなる木で草鞋をつくり

歩けば小判の跡がつく

舞木片町や片側土手よ

前は利根川帆があがる

永い均らして三苦勞かけて

上町へ着いたら御苦勞さん

(註「三苦勞かけて」は数学の三×三のこと。九を御苦勞にかけたもの)

おなじ頃に歌われたものであるから、系統は同じと見てよいし、板倉の土場打ち唄を考える上に非常に参考になる。なお、千代田村の土場打ちの音頭取りと打ち手の掛け合いをここに歌詞で記してみよう。

(音頭) ヨイトコラセー

(一同) アラヨンヤコラセー(堤を打つ)

(音) ア受け声しっかりだよ

(一) ヨイトコラセー(堤を打つ)

(音) ヨイトコラセー

(一) アラヨンヤコラセー(打つ)

(音) どっこいまたどなたも

(一) アラヨイトコラセー(打つ)

(音) この次ぎやそれ入れます

(一) アラヨンヤコラセー(打つ)

(音) おおいけづか八百屋さん

(一) アラヨイトコラセー

(音) お芋は一升いくらです

(一) アラ、ヨイトコラセー

(音) いまちとまけぬ芋屋さん

(一) 土場打さんならまけてやる

といったように、時には両者が問答形式でやりながら作業を進めてゆくのである。その中に、卑わいな歌も出てくるが、その卑わいさも、重労働にはむしろ気分転換となつて、たのしく仕事を進める要素になつていたのである。とにかく、邑楽郡の土場打ち唄は、邑楽の水害史とともに生まれたローカルのある民謡の一つであつて、保存してゆきたいものうちに入る。

藻採り唄 土地ではモクトリ唄とよんでいるし、茨城県で藻取唄といっている。湖沼地帯で沼に生ずる藻を舟を漕ぎ出して採集するもので、その時X型の二メートル五〇センチほどの竹を二本中央で結わえたものを持ってゆき、水中の藻をからませてねじり取って舟に積み込むが、

その藻は陸に揚げてからおもに作物の肥料に使つたもの。板倉沼は以前百艘からの舟が出て、ムギの収穫後秋まで藻採りをした。一日一艘で六ばいをあげたという。大体盛んだったのは四十年前までぐらいだったそうである。大正七、八年の頃が最も盛んだったらしい。採取は自由で、大体舟一ぱいで五錢ぐらい。作物の根元に敷いて干ばつを防いだり肥料にして一艘分一畝に施したが、金肥が出廻つてくると自然やらなくなつた。仕事は、舟の上から藻をはさみ、巻きつけ、よく水中で洗つてから



板倉沼の藻取り一新井七蔵さんと
同乗はNHKの松下氏

揚げて舟に積み込む。舟は三間半ぐらいの舟を使う。藻採りにもなかなか愉快なことがあり、盆踊りを沼の上でやり、男女掛け合いで歌いながら踊つたそうである。最近の昭和二十五年まではやったそうである。藻の種類は、モ、カツモが多く、女子供でもやれた。今回の調査では、板倉の新井七蔵さん(五十六才)と柏崎巳一郎さん(五十六才)によって、わざわざ板倉沼に

舟を浮かべて実演してもらつた。唄は素朴単調なものでのんびりした節廻りである。作業がユックリやるものであるから、唄も休み休み歌うといったものであるが、どこかに水郷風物詩的なものが漂つていてなかなか捨て難い民謡の一つである。

わたしや板倉のもくとり野郎(娘)で



板倉沼のハス

もくをとるせい

お色が黒い

お色黒くも

味みやしゃんせ

味は大和のつるし柿

味は大和のつるし柿

といった歌詞であ

る。むかしは外にもい

ろいろの唄が歌われた

らしいが、ほとんどが

消えてしまい、わずか

にこの一つが採集でき

たわけである。茨城県

の水郷地方の藻刈り唄

は、日本放送協会の

「日本民謡大観」の関

東篇に収録されているが、作業そのものはほとんど同じであるが歌詞は大分ちがうから、必らずしも茨城方面から伝承されたものとは言えないようにある。とにかく、群馬県としてはここだけにしかないすばらしいもの一つで、今後なんとかして保存してゆき、板倉沼の観光と結びつけてでものこしてゆきたい一つである。

機織り唄 この地方は織物の生産地ではないが、佐野や足利の栃木県の機場に近かったので、賃機が農家の主婦や娘によって行われた。材料はすべて供給され、それを織りあげて一反いくらという賃金をもらった。朝早くから（五時頃）夜十時頃まで織っても一日二反しか織れなかった。おもに大正年間であったが、その頃は十反で一円二十銭位にしか

ならなかったという。村には共同の機織り場があつて、そこへはよく村の若い衆が娘と寄り合つたものだという。行燈（あんどん）のあかりで糸を撚つた話も聴いた。唄は斎藤しうさんに歌ってもらつた。

切れて困るよ一二の糸が

切れてからまる三の糸

誰か来たよだ垣根のもとにや

五分刈り頭のかげがさす

話山々友達ア急ぐ

背中叩いて明日の晩

といったものであるが、桐生辺の機織り唄と少し調子が違っているが、大体似たものようである。明治期に一番歌われたらしい。

糸挽き唄 上州の糸挽き唄はかなり広範に分布している。坐繰り製糸

とよばれる一人で一台を使う製糸方法であるが、単調な作業だけに作業唄が当然要求されてくるのであろう。しかし、少しずつ節廻わしに差異が見られるが、板倉のは斎藤しうさんの歌つたものによつたが、前橋附近の糸挽き唄に、いま佐郡境町の旧剛志区域で歌われている桑摘み唄の雛子を加えたようなものである。前橋近辺のように、最後に「……かねえ」というのを入れないで「ドッコイナー」と入れる。その旋律が、桑摘み唄に似ているのである。

糸をひくならむらなく細く、ドッコイナー

あげてふしヨ（節のこと）なく銀の糸、ドッコイナー

男銀流しの政ちゃんよりも、ドッコイナー

三尺単衣（ひとえ）の人がよい、ドッコイナー

円い卵も切りよで四角、ドッコイナー

物も言いよで角（かど）が立つ、ドッコイナー

潮来出島の真弧の中に、ドッコイナー

あやめ咲くとはしおらしい、ドッコイナー

といった歌詞である。そう大きな特色は見られないが、この糸挽き唄はかなり正確に遺されている。

木やり 板倉の雷電神社近くの野村熊市（五十九才）さんが歌ってくれたものである。おなじ木遣りでも比較的古いと思われる。この時採集できたのは「かまくら」という曲目だった。

オーイ、かまくらの

お酒の祝に

庄屋さんの、庄屋さんの

ヤレコリヤナー、庄屋さんの

ヤー娘が酌に出た

酒よりも肴よりも

庄屋さんの娘が目についた

目についたらば

つれて出てくれ

わたしやどこまでも

女子（おなご）はよそへの縁ぢやもの

といった歌詞である。ある種のその家を褒める寿ぎ唄である。この木やりを、棟上げ式の時などに三回もやるとおつもりになったという。木

りについてはさらに記すべきであるが、この地方としてはそう重要な位置にないので略述にとどめる。

三、その他の民謡

盆踊り唄 八木節が現在のように固定する以前に、各地で自由に盆踊りに歌われ踊られたものはまことに多種多彩のようであるが、いずれも語り物的な「口説き節」の系統をひいていることは認められるが、その系統の中でも、たとえば利根郡新治村、同月夜野町地方に遺るものはかなり越後の盆踊り唄に近いし、「木崎音頭」とよばれる木崎のものも、益らしいシットリとした囃子と節廻わしから成っており、雑然としてジャズ化したいわゆる八木節よりもズツと地方民謡の特色を備えている。ところが板倉町の岩田で、福地吉次郎（七十才）関野好治（五十八才）増田又吉（七十五才）島村ます（五十八才）の四人の古老から歌い踊ってもらった盆踊りは、「ぶっ切り節」と土地でよんでいる特殊のものであった。囃子に鼓を用い、これをタケで叩くのであるが、唄の合い間合い間に鼓が入るのが極めて素朴である。一節一節がぶっ切り節の文字通り、歯切れよく切られる歌い方は特長がある。おそらく祭文などのように、語り物を主とした口説きの盆踊りでは、水のように流してゆくよりこの方が説得力があり興味をそそったであろう。こま切れの合い間にとぎどき踊り子の囃子や合いの手が入ったはずである。伝授は小平の小平という関東一とよばれたのど自慢が村に来て教えたという。この小平は大正十年頃に死んだということである。

ハアアア、出たよ出た出た、三角野郎が、三角野郎が、やぐらが四角、四角四面のやぐらの上で、音頭をとるとはおーそれながら、さても一座の皆さま方よ……

というのが出ではじまってゆくのであるが「天一坊」などはよく歌われたものだそうである。ほかの調査者によつて採集されたものに、

○いちに 板倉天神さまよ

には 日光の権現様よ

さんに 讃岐の金びらさまよ

しには 信濃の善光寺さまよ

いつつ 出雲のいろがみさまよ

むつつ 武蔵の弁天様よ

ななつ 成田のお不動さまよ

やつつ 八幡の八幡さまよ

ここのつ 小中の人丸さまよ

とおで ところのお鎮守さまよ

○さって東西皆さんがたよ 何か一言読みあげます

何をいうにも百姓なれば うまいわけにはまいらぬけれど こんじば

なしでよみあげます

国は京都の糸屋の娘 年は十六つほみの花よ 糸屋の番頭にせいざと

いうて 年は三三で男もさかり きりようよければお吉がみそめ か

ようかようがたび重なれば 親の耳にもそろそろ入り それを聞いて

はおくことならぬ ひまをやるから出て行きやしゃんせ じたいせい

ざは大阪生まれ ものもいわずに仕度をいたし 向う三軒両隣りまで

いとまごいしてせいざはいきやる せいざかえりて四、五日たてば

お吉思いで病気となりて ついになわす相はてました お吉とると

ろねむりしそこへ 夢かうつつか現れいでて そこでお吉はふと目を

さまし さらばこれからせいざのもとへ 船にのろうか陸地をゆこう

か もしも船にてけがあるときは かわいせいざとあわずにしまし

たいぎながらも陸上ゆこうと 行けばほどなく大阪町を せいざやか

たはどこかと聞けば 橋のもとより三軒目でござる せいざやかたの

前とどまれば かさを片手に腰をばごめ あまり長いと皆さもたい

ぎ さらばここらで止めおきまする おゝいさね。



高鳥の念仏和讃

祭文 大正頃は夫婦ものでよく祭文読みが村を訪れたそうであるが、明治四十三年の大洪水の時には、その状況を祭文にしたものを持ってきて門付芸で歌いあるき、文句の刷ってある印刷物を売っていったそりであるが、その一節を増田氏が覚えていて歌ってくれたが、一つとせ、人も知りたる大水は、四十三年戌の年、旧の七月の七夕よ ちちらこちらの大荒れは、聞くも涙の次第なり……。

といったもので、教え唄風であった。斗合田にはゴゼの師匠もいて、祭文は一時かなり歌われたという話であったが、そのわりに諸国民謡は痕跡をのこしていなかった。

念仏和讃 各部落の婦人たちは、時々集って今でも念仏和讃をやっているが、今回調査したものは高鳥部落の念仏講の人達によって演じられた「念仏踊り」と和讃であった。出演して呉れた人々の氏名は次ぎのようである。

斎藤 たい(八〇)
長谷川 たま(七一)
早川 とよ(六六)
小野田 たみ(六三)
斎藤 いち(六六)
矢島 かつ(六〇)
矢島 はる(六七)
小林 よし(六六)
阿部 とら(四六)

の九名であった。いずれも六、七十才の老婆である。踊りについては舞踊の部に述べ

ることにし、ここでは和讃について紹介しておきたい。楽器は鉦だけである。

(一) 宗教的なもの

1 大日御庭和讃

婦命頂礼ありがたや、大日御庭の玉椿、七重にさく花八重に咲く、なにがし(ひ)がんで八重に咲く、あまりこの世がじやけんさに、念仏すすめに八重に咲く、念仏すすめの御庭には、天からひやくよの花が降る、その花手にとり眺むれば、花ではござらぬみなるくじ、六種の名号はありがたや、なむあみだんぶつありがたや。

2 極楽

極楽の弥陀の浄土へゆきたくば、なむあみだんぶつ、ソレハ口ぐせにせよ

ソレハ、極楽のたからの池を思いただ、黄金の泉すみただいたる。

ソレハ、眺むれば、月日妙の夜半なれや、ただ黒谷に墨染て……

3 十九夜

婦命頂礼観世音、如意輪さまは有難い、産前産後の血の道を、御救いなさる御誓願、念仏講じ(者)が集りて、十九夜念仏申すなら、如意輪さまの御姿を、ごしごうなされて有難い、願ひし如来安産に、守りたまいや観世音。

婦命頂礼子育の、十九夜観音ありがたや、女人懐胎いたすより、安産までも守らしめ、みごるはじめの月よりも、十月を守るみ仏の、御慈悲の仏にましまして、あまた女人のそのために、はじめの月は不動尊、二にはしゃかさま三ツ文珠、四には普賢で五に地藏、六には弥勒の七薬師、八には観音九に勢至、十月を守る弥陀如来。

十九夜さまの御慈悲にて、親子息災いんめいに、守らせ給う有難や、南無有難や観世音。

4 西の河原

婦命頂礼幼な子が、死んで冥土に行くときと、親のごおしをおくらず

に、西の河原に住居する、ひるがむとき夜がむとき、十二時が時の苦しみを、小砂を集めて塚を積む、八万てんの鬼達が、小石あつめて塔を組む、陽も入相のその頃は、積めば寄り手がかき崩し、組めば寄り手がつき崩す、父よ母よと泣く声は、天に響き地に亘る、其処へ地藏がかけてつけて、我等の父母まだ沙婆に、此の世の父母おれだぞよ、陽のあるうちに遊ばれよ。

婦命頂礼父母は、一つやふたつや幼な子を、水の泡とも夢知らず、蝶よ花よと育てても、無常の風に誘われて、初の旅路の哀れさよ、後を見て人も居ず、心細さにメソメソと、落ちる泪が草の露、西の河原に参りしは、二つや三つや四つ五つ、何にも知らない幼な子が、集りたまいや南無阿弥陀、一じ組んでは父をよせ、二じを組んでは母を呼び、三世の塔まで組みあげて、喜ぶ間もなく怖ろしや、かしゃくの鬼が現われて、組んだる塔を打ちこわし、また組め組めと責められて、河原へ伏して泣くもあり、又や父母呼んで泣く、そこへ地藏さま現われて、持たししよ振りまわし、青鬼赤鬼追いらし、我等が父母沙婆なるぞ、ここでは俺が父母だ、サア来い／＼と呼び集め、袖や衣にすがりつき、右や左の手をとりて、花の浄土へ連れ参る、花の浄土花遊び、わが子が大事と思うなら、地藏菩薩が大切に、南無阿弥陀ぶつ南無阿弥陀。

5 天の川和讃

婦命頂礼天竺の、天の川原の川上に、弘誓の舟がいそいそと、舟は唐金櫓は黄金、金の帆柱つき立てて、地藏菩薩は權の役、観音勢至はろう(櫓)の役、阿弥陀如来はなかりで、六字の名号帆にあげて、南無繁昌の風が吹く、ぎやてい／＼の波がうつ、西へ西へと赴けば、西は西方極楽で弥陀の浄土へ着きにけり、南無阿弥陀仏阿弥陀仏

6 岩舟地藏和讃

婦命頂礼下野の岩舟地藏のお召舟、舟は白金櫓は黄金、柱は金銀巻絵して、綾に錦の帆をあげて、極楽浄土へ乗り込むに、極楽浄土の洞門

は、自力や力で開けばこそ、念仏六字でさらりと開く、念仏申すお庭には、天から五色の花が降る、その花手にとり見給えば、一字も変わらぬみな六字、なむあみだぶつあみだぶつ。

7 その 他

黒谷円光大師和讃、菩提心和讃、弘法大師和讃、過去帳和讃などの多くが歌われた。

(二) 宗教関係敘事和讃

1 壺坂和讃

帰命頂礼観世音、大和国には高市の、壺坂寺のかたほとり、手なれし業の糸よりも、細き心の沢市は、妻のお里と二人にて、たのしき月日を送りしが、楽しからざるわが体、今日は心のうさ晴らし、糸の調べもようように、歌う折しも妻の里、そばに来て声をかけ、久しぶりにて糸調べ、少しは心も晴れたよう、言えは沢市声くもり、見えめ目よりもホロホロと、落ち来る泪は壺坂の、御利益よりもなお熱き、涙を払いこれお里、私の心は深山の、霧と同じで晴れ間なく、楽しき人でありはせぬ、夜はひとり寝たるまま、さぐりみてもそちはいはず、声をかけても遠山の、み寺の鐘より返事なく、かたわのこの身因果だと、疾うにあきらめいるゆえに、よきことあらば打ちあけて、花の盛りのそなたゆえ、散らさぬうちにこれお里、口では言わねど胸のうち、見えぬ両眼閉じたまま、落ち来る泪は壺坂の、岩にせかれて哀れなり、始終をきいて妻の里、夫の顔を見上げつつ、何をいわんすわが夫や、幼なき時よりいなすけ、この世はおろか未來まで、ひとつ蓮と楽しんで、暮らすそのうちほうそうで、思ひもつかぬこの姿、お前のその目をなおさんと、観音菩薩にお願ひし、明けの七つの鐘をきき、お前の眠りをさまさんと、そつとぬけ出で壺坂の、み寺へ今年で三年目……(下略)

2 その 他

中将姫和讃、阿波の鳴戸和讃、浅茅ヶ原和讃といったものがある。

これらの敘事的な和讃は、一つには歌舞伎芝居の筋を脚色したものであるともいえる。娯楽の少なかったこの地方の婦人たちが、こうした和讃を機会にして芝居の世界をたのしもうとした娯楽性も多分に加味されたと見てよい。というのは次ぎの例のように、宗教的な仏教的臭味のない祝い歌の性格を持つ和讃まである。あきらかに和讃万能の婦人達のレクリエーション的なものであることを物語っているとみてよい。

(三) 祝い寿ぐ和讃など

1 高 砂

国は播州姫路の城下、高砂村には名所がござるよ、尾上の松にはそのやしたには、お爺さんお婆さんが、箒をかついで熊手を手に持ち、松の落葉やすすきのはかまを、みなかき集めて目籠につめてな、帰るとなされば上を見たまえ、松の古木に一なる枝には、ぜに花咲きそよ同じく二の枝、金銀小判のお花が咲いてな、小判の実がなる、三の枝には鶴の巣ごもり、羽がいを休めて下なる小池を眺めて見れば、雌亀と雄亀が、よねの守りを口にとくわえて、あなたに向いたりこなたに向いたり、空を眺めてちよおなむすんで、おめでたい、やれそうだよな、このやおんいはめでたいおんい。表御門を眺めて見ればな……(下略)

2 七福神和讃

帰命頂礼おん家の、富貴繁昌の始まりは、親を敬い子を思い、夫婦の中もむつまじく、人の愛敬慈悲情、それが世上へひろまりて、七福神のおたちより、宿のお家のしあわせと、常磐の松も色まして、幾万年の年を経て、ひらく扇の末広く、花の座敷へすわりいで、戌亥の方を眺むれば、鶴と亀との楽遊び、そのつるかめの伝えには、米降れ札降れ黄金降れ、降りたる宝を蔵に積み、花は七福潔く、一に大黒二に恵比寿、布袋はくろく寿老神、毘沙門天の美しさ、十二単衣の緋のはかま、ようらく下げておわします。五穀成就国栄え、おん家も栄えてありがたや、南無阿弥陀仏あみだぶつ。

と、全く和讃本来の仏教臭味のないもので、和讃の世界がかなり広く解
釈された一例とみてよいであろう。この応用面がさらに娯楽に転化した
ものとして、次ぎの「尻とり和讃」というものまで行われていた。

竹に雀は仙台さんの御紋、ごもん何処ゆく油買いたかい、高い山から
谷底見れば、見れば目の毒そらはのくすり、くすり峠の権現さまよ、
さまよ三度笠よこちよにかぶり、かぶりからかさからこの足駄、足駄
で通れば二階で招く、招く姉さんお年はいくつ、姉が二十一妹がはた
ち、はだしでどうしがなるものか……山へ登れば石童丸よ、円い卵も
切りよで四角、四角四面の粟餅よりも、かたまりはじでももらうにゃ
お米、かない揃うてめでたく暮らす。

といった全く和讃の世界ではないようなものが現実に歌われているので
あって、ことに驚くのは満洲事変などまで和讃化されていた。そこに板
倉町地方の和讃が大衆特に婦人層に占める比重が非常に大きいことを証
している。これを逆にいうと、この地方の娯楽にめぐまれていないとこ
ろでは、どうしても入り易い芸能の世界から拡大して娯楽にまで進む過
程を示すものといつてよいであろうし、このことは日本の芸能の長い間
の発達が、宗教的なものから分化発達してきた事実を傍証することでも
あるといつてよく、その意味で板倉町の和讃は興味ある課題を提供して
呉れたといふべきである。

伊勢音頭

○伊勢は津でもつ 津は伊勢でもつ 尾張は名古屋の城でもつ 坊主鉢
まき耳でもつ 人の身上はかかでもつ かかのふんどしひもでもつ
ひものしらみはひもでもつ ヤットコセエ アリヤセエ コリヤセエ
ナンデモセエ コロボッタ おきたらよかんべ(カード)。

足尾鉍毒悲歌

これはいわゆる民俗学の分野に入る民謡ではない。し
かし、この地方にのみ残る特殊な発生理由と特殊な社会情勢の中におい
て歌われ、現在もなお一部に記憶されているもので、その点では矢張り
貴重なものといふべきである。足尾鉍毒悲歌というのは足尾銅山に源を

発する渡良瀬川沿岸に、明治二十年頃から顕著に現われ始めた鉍毒被害
が、群馬、栃木、茨城、埼玉の四県にまたがって流域の死活問題とな
り、遂には表面化して、政府および古河財閥を向うにまわして戦った農
民運動の中において歌われたものであった。(足尾鉍毒事件そのものにつ
いては、小著「騒動―群馬農民運動史ノート」および「群馬県議会史第二巻」を
参照されたい)。新田・山田・邑楽の直接被害地の三郡農民は、このお
そるべき鉍毒をなんとか除去し、平和な楽土にしようとして決死の覚悟
で、上京、請願、陳情をくりかえしたが、古河財閥と結託した政府は容
易にその手を打たなかつた。久しい闘争のために、戸主階級は半ばあき
らめようとした時に、青年の間にかくましい行動力が結成されて有利に
運動を導いたのであるが、意気をさかんにし、士気を励ますためにこの
運動のための歌が作られ、題して鉍毒悲歌とよばれた。幼い子供までが
歌うようになったのであるが、当時の警察当局はこの歌は不穏な内容を
持つものだとし、出版人発行人は所罰され、巡查や教員は各村をあるい
て、子供達がこの歌を口ずさんでいると止めたという大きな弾圧をして
いる。館林警察署記録明治三十三年八月二十八日の条に「川井署長ノ告
発ニ依リ鉍毒悲歌出版人佐藤留吉、見村房吉、大沢新八郎ノ各罰金ノ処
分ヲ受ク」とある。勿論印刷した悲歌は発禁処分された。ところがこ
の足尾鉍毒悲歌とよばれるものが何通りもあり、どれがそれに当るのか
ということがわからなかつた。たとえば永島与八の手記「鉍毒事件の真
相と田中正造翁」に収録され私も印刷した歌詞を入手したものは、

足尾の山より渡瀬の
大間々はね滝近辺に

流れを下りて南せば
到りて原野は開放す

(中略)

かくて沿岸人民が
渡良瀬川の其水に
沿岸田畑に殺到し

命の親と頼みたる
毎注がれて絶間なく
財産権利を奪ひ去り

尚あきたらず沿岸の

(中略)

嗚呼諸共に覚悟せよ

相手は卑き稼業人

斯く成る事のあるべきぞ

恢復請願努めなほ

艱難辛苦も何のその

人跡絶えなん勢ひぞ

山又川に罪はなし

国家の亡ぬ其内に

憲法条規に則りて

此行先は知れた事

巖をも徹さで置くべきぞ

とある。いま一つは、筆者が東京の古本屋より求めたもので、これにははつきりと足尾鉍毒悲歌とあり、作詞者は悟毒居士とある印刷物(二枚刷)で、この方には

抑渡良瀬水源は

関八州の沃野をば

機業に名高き桐生町

其他沿岸村々は

頃は明治の八、九年

古河稼業の其日より

野火煙毒と乱伐に

降る雨毎の洪水は

かてゝ加へて流毒は

其害いとど著るしく

沿岸田畑は害されて

枯れて堤も岸もかけ

少しく水嵩増す時は

見渡す限りの良田は

家屋人畜流亡し

家に喰ふの粟もなく

遠く流れを足尾より

貫き渡りて六十里

足利佐野に館林

皆此河の賜ものぞ

渡良瀬川の水源は

昼猶暗き足尾山

雨露湛る力なく

岩石崩れ砂流れ

渡良瀬川をかき濁し

魚介の類は云ふもさら

芝芦竹や木の根迄

今は河身も荒れ果てゝ

兩岸堤はかけ破れ

皆毒波に浸されて

田畑に一穂の稔りなく

見るも哀れの枯野原(中略)

時の政府は何故に

嗚呼我々は身の為と

嗚呼我々は土地のため

嗚呼我々は憲法を

時の政府は何故に

早く清めよ渡良瀬川

清めて我等を殺すなよ

嗚呼我々は皇帝の

早く清めよ渡良瀬川

斯も我等を虐ぐる

人の為には死も恐ぢず

国の為には死も恐ぢず

守る為には死も恐ぢず

斯も我等を虐ぐる

清めて死人の処置をせよ

清めて我等を殺すなよ

愛し賜はる国民ぞ

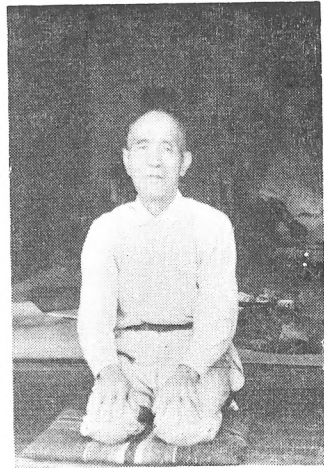
早く清めよ渡良瀬川

という歌詞である。この歌を知ったのは群馬県議会史編集の時に毎日新聞(明治三十五年一月十四日付)で知ったが作者が不明であった処、先述した原本を入手できてはじめて悟毒居士とわかった、悟毒居士はおそらくこの運動を最初から支持し、田中正造を助けて活躍した沼田市奈良に産まれた左部(さと)彦次郎でろう。悟(さと)と左部はあり得ることである。この歌が当時いかに当地方に歌われたかは、前記の毎日新聞の投稿した記事に、

各村の青年児童は競ふて其の悲歌を号呼し、学校の往復にも恰も軍歌を詠ずると同様に流行致し候処、因らず駐在の巡査は路に擁して其の声を止め、学校の教師は生徒を捕へて其の口を禦ぎ、若し強ひて唱ふる者あれば、必ず威嚇を以て加へらるゝの干渉相始まり候ため、折角流行の悲歌も全く唱へられず相成候、然るに近頃又各村に於て其悲歌を唱ふる者有之候処又もや警察の干渉教師の叱責相始まり候由如何にも残念至極の至りに御座候……。(一被害民)

とある。共同調査の時にはこの調査まで手が伸びなかったが、わたくしの案内をしてくれた福富稔氏が調査してくれることになっていたところ、三十五年九月に宮田茂氏を通して、足尾鉍毒悲歌を歌える伝承者があるという報告に接し、九月十七日に調査に赴いた。伝承者は西岡新田

二八六番地の加藤由造翁（明治十八年十二月二十一日生）であった。翁が十四才の頃―明治三十三年―栃木県佐野町の厄除大師の春日岡ではじめ



加藤由造氏の歎毒歌

詞をかなり正確に覚えていたことである。いま翁の歌ったままをここに記録しておく。はじめは前者の悲歌と同じである。

て覚えたという。その後も栃木県の青年が紋付袴で来て教えたりする。そのほか大島村（現館林市）の小林猪之丞という人からも練習させられたそうである。驚いたことに歌

足尾の山より渡良瀬の
大間々はね滝近辺に
ひと度水かさ増す時は
みなこの河に押流す
海老瀬の間田を始めとし
越名に高山えほうちや
おくど上下（かみしも）野田もでき
最近五年のその間
生まるにまさりて死にし数
そもそも今の大御代は
君まつりごとみそなわし
肩を並べて劣るなき
三陸津浪も悲惨なり
歎毒被害は人のわざ

流れを下りて南せば
到りて原野は開放す
かてて加えて硫毒を
歎毒被害の激甚地
そこや大谷田船津川
はね田に高橋川崎に
およそ三十四ケ字で
一千六十余人こそ

立憲君子の政体で
イギリスアメリカ露国仏
み世に生まれて有難さ
さりとてこれは天災ぞ
人手にとまらぬ数のもの

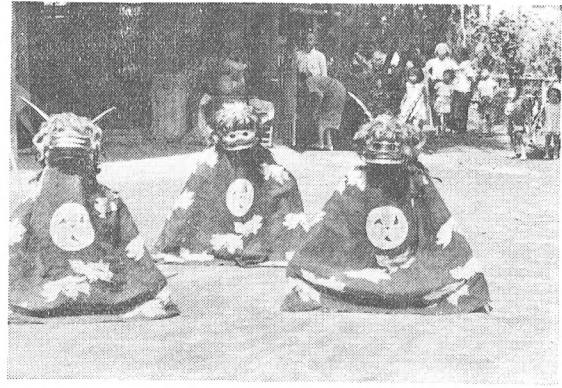
人と人にてやむものを
人の命をたおしゆく
しかも乱暴果てしなく
（以下忘失とのこと）

この貴重な聴き書がとれた。節廻わしは単純な祭文読みのようななく、かえりであるが、予想した軍歌調ではなかった。教育委員会のテープで録音したので後刻譜に再現できるであろう。なおこの時いま一人除川の関口清次郎翁（明治二十年九月二十一日生）も歎毒悲歌を覚えていて、このので往訪したが、節まわしだけで歌詞は全部筆者の提供したものであった。曲はよく加藤翁と似ていたからその点参考となった。とにかく、一時邑楽郡の水害地を風びした歎毒悲歌が、曲詞ともに採集できたことは成切であった。

Ⅱ 民俗芸能

一、獅子舞

総説 板倉町の獅子舞は、従来は県下の獅子舞の中でも遠隔の地域であるため、ほとんど調査の手が伸ばされていなかった。それだけに今回の調査では大きな期待がかけられていた。しかし、八月一日からという炎暑のまつ最中は獅子舞を演ずることはほとんど不可能な時期であった。あの重いしかもスッポリと面を包むカシラを被り、手甲、脚絆、股引といったいでたちでは到底獅子舞を演ずるといふことは考えられないのである。ところが、この分野を受け持った筆者にとつて、町教委の宮田茂氏の斡旋の労と村人の熱意ある理解で、実演がしてもらえろということを知り驚きも感謝したのである。前回の上野村の場合でも、獅子舞はほとんど見られなかったのに比べて板倉町の異常な熱意にはいたく動かされた。したがって、飯野本村と新村の獅子舞調査の日の如きは予定のスケジュールがどんどん遅れてしまい、もう夕方近くになったので、わたくしとしては翌日に廻わりたいと思ったのであるが、村人の熱



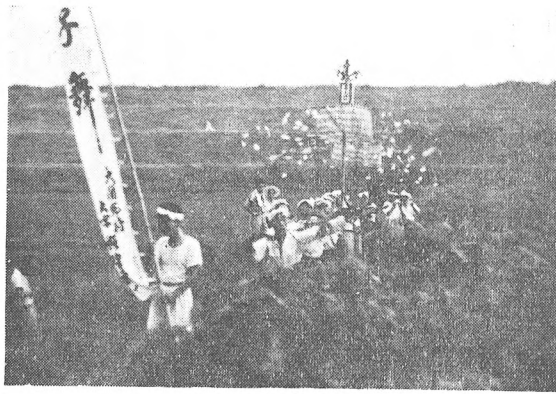
糶 谷 の 獅 子

意を思うと断然予定通り決行することにしたのであるが、夕暮れの利根川べりに近い部落での獅子舞調査で聴いた笛の音は、今もって忘れることができないほど耳底についている。

実演を見せて貰ったのは、糶谷の獅子舞と飯野本村、飯野新村の三組であったが、この三組ともそれぞれ系統を異にしている。糶谷の獅子はその構成が最も花やかであるし、古い型を遺している。飯野の獅子は本村が万燈に特色があり、新村のは最も簡素化されたものである。流派はいずれも「助作流」を名乗っている。糶谷では「平井助作流」本村では「日光助作流」新村では「助作流」とよんでいるが、いずれも助作流に流れを引くものと見てよいであろう。この助作流についての伝承由来は明らかでないが、上州の東部に多く、別に「坂東助作流」といっている所もある。どうも日光とか坂東とかあるのを見ると、日光方面あるいは関東地方に根拠を持つ獅子舞の系統であろうことは推定できる。今後の研究に待ちたいと思う。では各獅子組について紹介することにしよう。

糶谷の獅子舞 獅子舞と称さないで「ささら」ともいっている。以前には籠(ささら)をすったものであるうか。獅子は三つで、前獅子、中獅子、後獅子とよんでいる。一組の構成はこの獅子を中心とし、錫杖二人、柏子木六丁(六人)、万燈二人、八丁じめ一人、花笠四人、笛四人、法螺貝一人、世話役若干名という二十数名から成っている。勿論一

人立ちの風流獅子である。行われる日は昔は六月十八日十九日であったが、現在では七月二十五日だという。外の地方では、四月十五日を中心として大部分が春に行われるが、夏の土用の中に行われることはそこに獅子舞本来の目的である「雨乞い」とか「疫病除け」の現実との結合を考えさせる。獅子は例のカシラを冠るが、カシラは角(黒と赤のウルシで縦の縞となつている)を着け、ニワトリのカシワの尾羽をもって飾ったものである。歯は四角の箱型であり、牙は下向きになっている。腰太鼓



飯野新村の獅子舞の「おねり」

(かつこ)は、直径二九センチ、長さ三〇センチで皮部は三ツ巴が描かれている。カシラはキャップ型式で、下あごから垂らす小掛け(前垂れ)は、両先端に糸の輪がついており、ここに両手の親指をさし込んで小ガケを複雑に動かしながら動作をする。お伴につく錫杖はほんもので、大地に突くとチャラン、チャランと音を立てる。柏子木は普通のもの。万燈は頂部に燈籠をつけ、燈籠の上に御幣束がX型に交叉されて立っている。

燈籠の基台は円型で周りに垂れ幕が下がり、垂れ幕の基部から竹を割ったものに造り花を着けたものが四方八方に出て垂れ下がっている。これを二人で持って、おねりの時には大名行列の毛槍持のように、往來を左右に動きながらクルクル廻わしてゆく。花笠は角型である。現在やれる曲目は次ぎの六つになっている。

一、渡り節(はざさらともい、おねりのことをいう)



靱谷の獅子舞一天に向つて雨乞いするポーズ
と思われ原始的な獅子舞の起原を説明する珍
らしい場面

一、しめがかり（ほかの獅子でいう庭がかりのことで、庭先きに四本の棒を四方から出して一点で結んだものをめぐつて踊るもの）
一、神祇（神社の前などで振る舞いである）

一、歌切り
一、小がけ（前垂れに両手を掛けて、腰を低めてパツパツと踊る曲目）
一、雌獅子隠し

この中最も注目されるのは渡り節と七五三掛りと神祇の三曲目ではないかと思う。最初世話人の家の庭では、七五三掛りが演ぜられたが、小掛けをパツと開いてうづくまつたりする荒々しい動作をくりかえす勇壮なものである。最もデラックスな祭礼気分を引き立たせるのはなんといつても渡り節であろう。世話人の家から部落の長柄神社までの間を当日そのままにやったのを見たのであるが、法螺貝と笛を先頭にし、そのあとへ三頭の獅子、次いで花笠―八丁じめ―万燈―柏子木―錫杖―村人とい

いう順序に並んで静かに進んでゆくが、時々立ち止まって、万燈振りが行われる。器用に万燈をクルクルと振りながら道の両側へ往ったり来たりする。柏子木はタスキを掛け派手な襦袢を着て一せいに道の右と左に動きながら、笛と合わせ万燈と合わせてカチン、カチンと鳴らす。錫杖は時々ズンズンと大地を力強く叩きつける動

作をする。この仕草はあきららかに悪魔を大地に封じ込む原始民俗からの変化であろうかと思はれる。その中に、行列は再び動き出し、しばらくゆくとまた休んでいよいよ村人の待つている長柄神社の境内で、神祇の曲目を演じた。この境内がいわば靱谷の獅子舞の「獅子場」であり「踊り場」となっている。この神祇の曲目で特に注目されるのは、ドシンドシンと大地を踏みつけるいわゆる反間（へんべ）の動作の多いことと、時々上体を仰向けに反らす動作である。反間の法は東南アジアあたりの呪術的芸能に多いもので獅子舞がその痕跡をのこしているのである。体の反りはおそらく天の竜神に雨乞いを祈るポーズではないかと思われる。笛は七穴を使っている。ただこの獅子舞には歌詞が全然ないことである。終始パントマイム形式であることは注目してよい。とにかく、靱谷の獅子は板倉町では最も華麗であり豪華である上に古い雰囲気をよく遺している点でわたくしの興味を索いたことは事実である。

飯野本村の獅子舞 旧大箇野村に属す板倉町でも南部地区で利根川に接する地帯である。ここの獅子舞は「日光助作流」とよんでいるが、靱谷とはかなり違ったものがある。獅子は一人立ちで、名称は雌獅子、雄獅子、中獅子とよんでいる。カシラは角状の口で、歯は四角箱型、耳は固定式、牙は下向きである。かっこ（腰太鼓）は三〇センチ×三〇センチでほぼ靱谷と同じ大きさ。ただその中の一個の胴の内部に墨書銘があった。

依古彼来候付
天保三辰六月吉日
小見村
棒 川 七 平
時ノ世話人
大工六右衛門掾
とある。するとこのかっこの新調は天保三年ということとなるが、「古より彼来り候に付」とあるから、獅子舞そのものはもっと古くからあつ



飯野木村の獅子

たと見てもよいであろう。

小掛けは背中に紐で結んでつける。小掛けの模様は三つ巴の神紋をつけているのが変わっている。裁着でなく袴をはくのも面白い。一組の構成は鉦一人、旗一人、花笠(子供)二人、笛数人、獅子といったもので、糺谷から見るとズツと簡単である。村の経済力のための差異か系統の差異か明らかでない。笛は六穴で当日は六人の笛手が出演した。曲目は道中と庭に大別され、庭というのは一定場所

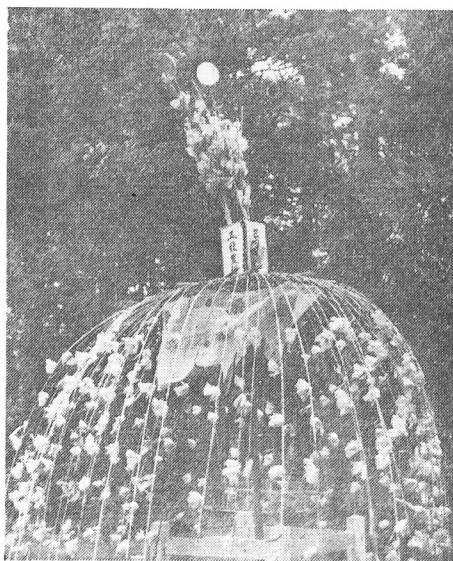
演ずる曲目のことである。道中というのはいわゆるおねり、道ゆきのことである。庭はさらに「花」「綱渡り」「橋わたり」「梵天」「笹がかり」に分かれている。ほかに「宮ずり」といって神社の境内で行う。笹は使わない。曲はむかしはもつとあったのであるが、最近略されて消滅してしまったということであった。歌詞はあるが変わったものは少い。

飯野新村の獅子舞 流派は「助作流」と称している。一人立ちの風流獅子である。道ゆきの構成は旗、弓、柏子木(六人)、万燈二人、笛五人、獅子三人の順序で進む。曲目は次ぎのとおりである。(○印は今回調査のもの)

○かんむり 弓がかり ○三本づくし 社切り すがわきの五種目になってしる。獅子の扮装は糺谷と似ているが動作では小掛けに両手を通して、パツパツと勇壮にやる点がよく似ている。実演は鎮守の境内で行われたが、最初道ゆきから見た。ここでは「すり込み」と称

している。「ささらをする」というのが獅子を舞うという意味であるからそれから実演に移るということ。「すり込み」とよぶ。定時の上演は毎年六月十五日であるが、昔は厄病除けに舞われた。ここ五年ばかり獅子を踊る者が老人ばかりとなってしまい一定しなくなつたと慨いていたが、三組の中では最も永続が心配される一つである。

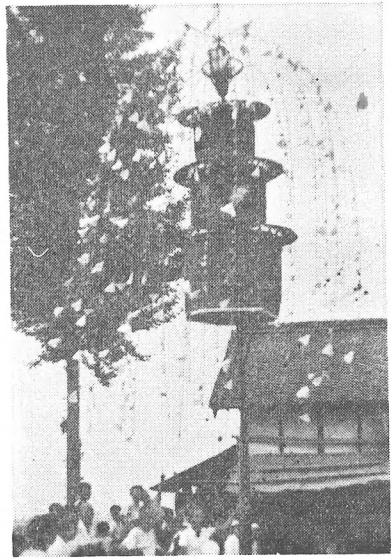
曲目のうちの「かんむり」では、雌獅子が後に出、雄獅子二が前に並んで△型になって演じられた。腰太鼓は雌獅子だけがバチで打ち、雄獅子はバチで調子をと



飯野新村の獅子万燈

チで調子をとるだけ(叩くまね)であるが、そのかわり小掛の両端を持って、すばらしくダイナミックな動きを見せる。三組の中でも最も力が入つたもののようなものである。次ぎ

の「三本づくし」という曲目では、ボンゼン梵天ともいうが御幣束のことを三本社前に立てておき、これを三頭の獅子が代わる代わる奪いとろうとするドラマである。最初近寄ると幣束の神威ではね返えされ、モンドリ打つ真似さえある。二回三回と奪いとろうと掛るところが見もので、最後にはこれを手にし、共に喜び合うという筋であるが、笛と腰太鼓のリズムによって演じられるだけになかなか興味ふかいものがあつた。その間の激しい動作は驚くべきものでよほどの体力がない限り堪えられないと見えた。歌詞は全然使われず、古老から聞いても昔からなかつたといつてい



飯野本村獅子舞の万燈

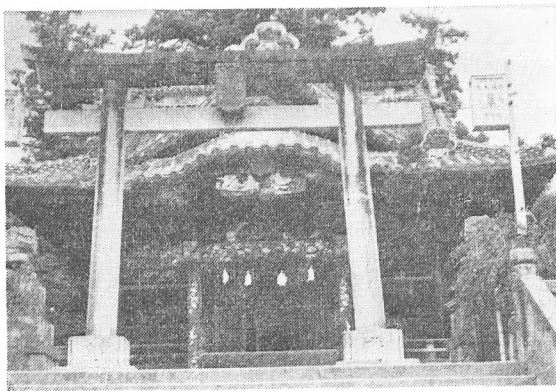
獅子舞はたしかにすばらしい獅子舞本来の降魔の一面を伝えるはげしいものだった。

一、神 楽

概 説 板倉町の神楽は神社に付属しているもので現在三座ある。一は西岡の赤城神社の神楽、二は板倉の雷電神社の神楽、三は高鳥の高鳥神社の神楽である。このうち第一の西岡のは館林市大島の神楽が来演するものなのでこの土地にあるものではないので略すことにし雷電神社と高鳥神社の天神宮の神楽について報告することにした。この二座は全く別の様式を持っている極めて対照的のものである。群馬県の神楽は大體二つの系統に分かれており、第一は群馬郡榛名町や高崎市八幡の八幡神社神楽などに見られる荘厳な儀式祭典向きのいわゆる神代神楽の系統であり、第二は桐生市賀茂神社や北橋村南室の赤城神社のように曲目の中に、非常に俗受けするユーモアやわい雑さを持っている里神楽或いは太々神楽の系統である。ことに里神楽は一部神代神楽的なものを曲目にしているが、いくつかおどけたものがあるように、発生当時から神事芸能にはつねに鎮魂と神賑(かんにぎ)の二つがあつたことは、すでに

た。曲目が少なくなつてい
るのは矢張り
長い間に省略
されてきたた
めであらうと
思われる。夕
暮の黒い帳が
シットリと降
りかかつた境
内でみたこの

以前の報告書でも記したとおりであるが、神代神楽は鎮魂を主とした厳肅なものであり、神賑は氏神と氏子が共に笑いたのしもうという余興的なものとなつて里神楽へと派生していったのである。板倉町の二座の神楽は高鳥の天神社に付属するものが神代神楽系の里神楽であり、板倉の雷電神社付属のものが「火男踊」とよばれるように極端に余興化した太々神楽系である。前者の荘重さと後者の諧謔性とは全くよい対照をなしている。この二つとも当日わざわざ実演してもらつて見学することができたのは幸いであつた。以下その各々について記してみよう。



高鳥神社の社殿

高鳥天神の神楽 板倉町大字高鳥にある天満天神宮はその由緒も古いものらしく、社殿・境内も立派であり、県内は勿論県外からの参詣者も少くない。邑楽郡内でも名社の一つになっている。この境内にある神楽殿で村人による神楽連の人々によって毎年元旦、二月三日、二月二十五、六日、四月三、四日に演じられる。神楽殿の建築はそう古い時代のものではないが、立派である。型式は通常に見られる舞楽殿形式である。

一座の構成は高鳥部落の人達七人によって守られている。伝承としては館林市大島から明治初年に伝わったと古老が話していた。大島の神楽は東京都の有名な御岳神社の豊穂講とよばれる神楽の伝流をひいているらしく、この系統は県内でも北橋村から北群馬郡地方にかけて多く見られ

る。神楽座の頭を「講長さん」とよぶのか豊穂講神楽の特長であるが、大島では現にそうよんでいる。すると高島の神楽もおそらく初めは豊穂講系であったと思える。しかし、神楽殿に掲げられた額には「吉田殿御免太々御神楽」とあるから、京都の吉田神道家との関係も考えてよいであろう。地元では「固定神代神楽」というそうである。前述したようにたしかに神代神楽ではあるが、榛名神社のもののように厳肅莊重さばかりが曲目にあるのではなく、次ぎにしめすように、興舞とよばれる余興的な里神楽も入っており、厳密に言えば里神楽であろうが、おなじ里神楽でも高島の方は神代神楽の色彩が濃厚に遺っているし、板倉の方は余興的色彩がより濃厚に表現されていると見られる。

高島神楽の曲目

式舞Ⅱ幣舞（別に弓矢）、思金神、天狗、翁、太魂、古屋根、鈿女（うずめ）、手力男命、計八座

興舞Ⅱ金山、夷（えびす）大黒、狐、三神、計五座

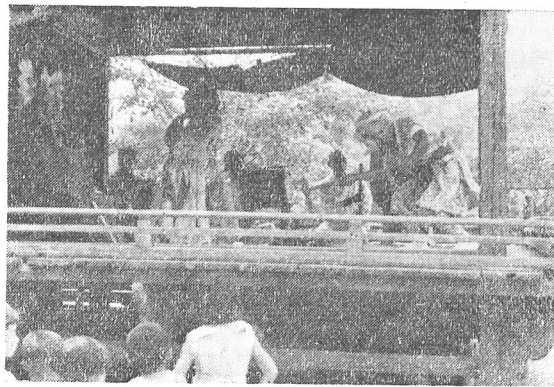
で、合計十三座から成っている。一座の上演時間が大体三十分から四五十分に及ぶものである。曲目と採物（手にもつ道具）の関係は次ぎのようになっている。

幣舞（御幣）思金神（御幣束）天狗（槍）翁（盃と鈴）太魂（槍と鈴）古屋根（刀と槍）鈿女（神と鈴）手力男命（神と鈴）金山（刀と槍）夷（釣竿と鈴）大黒（槌と扇と鈴）狐（鉢）三神（神と鈴）

この曲目の中には芸能の種々の要素が入っており、たとえば能や歌舞伎、人形芝居で重んぜられているところの翁がこの曲目の中にも入って来ており、神話に基づくところの天狗（天孫降臨）鈿女（同上）手力男（同）や、出雲神話の夷と大黒、産業のもとを開いた金山神（鍛冶）、狐（豊受神の眷属で農耕）大黒（経済）といったものを採り入れている。式舞が莊重なのにくらべて、興舞になると囃子も一変し、古い芸能における猿楽的な要素を多分に盛りこんでいる。

囃子方は大太鼓一、小太鼓一、笛一である。現在の上演者は橋本淳さ

ん（四十八才）ほかの人々でまだ壮年の人が中心である。今回見た曲目は時間の都合で手力男命と金山彦の式舞興舞各一座ずつであった。いずれもパントマイム形式で唱え言はないとのことである。手力男はいうまでもなく天の岩戸の神話で知られている場面であるが、約十五分間に縮めてもらったので十分の調査はできなかったが、手力男が天の岩戸の前でしきりと反閤を踏んで力強く舞うのは印象的であった。岩戸は一枚の



高島天神の神楽（金山彦の場面）

板三尺位の細長いものを使い、やっと最後にこれを除くと天照大神が現われ、手力男はその威光で一時神憑り状態になるところなどなかなかドラマチックであった。そして神と鈴をもって大神が明かるくたのしく舞うあたりはまことに典雅という言葉に尽きる。面もかなり見られるものであった。

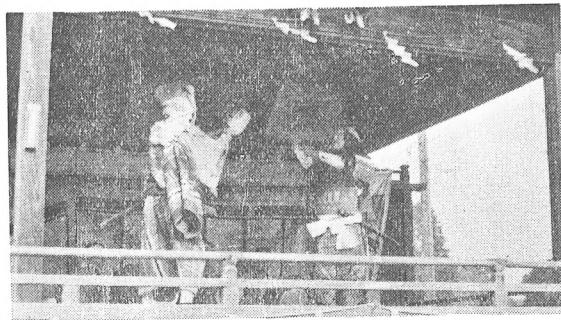
次に金山彦であるが、鍛冶屋の元祖といわれる神であるから、鉄から刀を打ってゆく仕草を演じるものであって、金山彦の向う槌をとるのが例のヒョットコである。ヒョットコは「火吹き男」が訛ったもので、火を吹いて起こす役目から口が曲がってつぼんでしまったのだという話のある役である。このヒョットコが、おどけた仕草をしながら刀を打ってゆく筋であって、演技もなかなかうまい。

囃子は「かまくら」「岡崎」といった他の神楽と似たものを使い分けていた。大太鼓の腹に響くような音とともに、里神楽らしい雰囲気を出す

分に味うことができた。衣裳もなかなか立派で、手力男のトリカブトや天照大神の装束などきらびやかに目立ったのが印象的である。

板倉の火男踊 雷電神社の神楽殿で演じられたものを調査したが、火男（ひおとこ）ひよつとこ）踊りと地元ではよんでいるが、実は単なる踊りでなく、神楽である。火男踊と称するものは関東地方では茨城県地方に三、四あげられているほかは少ない名であるが、茨城のものを見ていないのでなんとも言えないが、おそらく板倉のと同じく里神楽の一種だろうと思う。正しくは板倉の里神楽とよぶべきであるが、地元の呼称によって火男踊としておく。由来はこう伝承されているからである。

明治十年頃生きていれば今九十才位になる人が、七、八才の頃邑楽郡の長竹（羽附）でやっていたのを見て始めたのが最初である。それから村の小林幸藏、田部井太藏、鈴木儀三郎、染谷三次郎、尾沢海老藏、蓮見由藏らの人々が学校がえりにやつてみようというので習い始めたのが最初だそうである。村に娯楽がなにか一つないから、買って来いといわれて始まったという。それから今日まで行われているのである。従って一座を構成している現在の人々は比較的高年齢のものが多く、高鳥と対照的である。上演されるのは板倉雷電神社の祭礼の時であるが、この雷電神社は板倉沼の畔に沼を背にして位置する神社で県下でも由緒の古さで知られた雷電神社で、昔から講中も結ばれており、県内は勿論近



板倉の神楽「三韓征伐」の場面
(右が神功皇后左がトラ)

県からも参拝者が多い名社の一つである。現在行われている曲目は次のようである。

ひよつとこ おかめ 三韓征伐（神功皇后） 大蛇退治（安達（鬼婆））

道成寺 葛の葉の子別れ 大江山 狐釣り 種播き 鍛冶屋 計十座

この十座の曲目を見てまず気の一つくことは、普通の里神楽に見られる神功皇后と種播き、大蛇退治、鍛冶屋（高鳥の金山彦）ぐらいで、他は歌舞伎や狂言であることがわかる。十座のうち六座は娯楽性の強いしかも人口に親しまれている芝居からの脚色である。おそらく県内の里神楽では最も大衆化され俗化された神楽としても異論はないはずである。その点貴重な無形文化財である。なお曲目と歌舞伎狂言との照合をしてみると

（歌舞伎狂言の名称）

安達（鬼婆）

近松半二作「奥州安達原」

道成寺

長唄舞踊「京鹿子娘道成寺」

葛の葉の子別れ

竹田出雲作「芦屋道満大内鑑」

釣狐

能狂言長唄歌舞伎等「釣狐」

となっており、こうした神楽と歌舞伎との連繋あるいは脚色同化されたのが何時代誰れの手によったかということは実は大きな問題になる。地廻りの旅芸人が創り出したものか、或いは神楽の側が採り入れたか、いずれも討究すべき課題であるが、遺憾ながら今回の調査では実演を見る時間に制約されて、わずかに「おかめひよつとこ」と「三韓征伐」の二つしか見ることが



火男踊り

できなかつたので何れ後日ゆくりと見た上で結論を出したいと思つて
いる。囃子方は大太鼓一、小太鼓二、笛一、鉦一である。

さてそれでは「おかめひよつとこ」についてその筋だけ簡単に紹介し
てみよう。この面はいずれもそう逸品ではないがおかめはやや見るべき
彫りである。ここでまた少し由来伝承にふれておきたいが、六人のもの
が先ずやろうとした頃、衣裳は各自の親達が子供に買ってやり、芸の方
はその頃板倉に芸好きの正田幸八という人物がいて、それに教えられた。
この幸八という人は埼玉県越生の人で祭り囃子が得意だったので、この
人から太鼓と笛を習い、踊りも指導して貰った。毎晩通つて練習した
が、不明のところは長竹までいって教えを受けた。囃子の元は神田囃子
の系統である。その後越生の先きの三田ヶ谷というところに「高須賀」
とよばれる歌曲があつたのでこれを稽古したそうである。この歌と踊り
は、万作踊のものであつた。万作踊というのは埼玉県一帯に行われ、現
在もその流れが伝わっているが、口説節で、歌舞伎芝居のお軽勘平（忠
臣蔵）の道ゆきや、お半長右衛門の道ゆき、奇人お松といった所作事を
踊る民間舞踊劇である。邑楽郡にも現在の邑楽村辺に最近まで行われ、
中庭淋一という篠塚の者などは名人芸であつたといふことである。現在
のおかめひよつとこの踊の手には、多分にここの万作踊の流が入ってい
る。そのうちにこの地方にも地芝居が盛んに行われるようになり、それ
を見て、埼玉県の市川福十郎という役者を頼んで地芝居の稽古をした
が、女形の役がうまくやれないので、東京の中村福助を頼んで振り習
い、歌舞伎芝居の演しものが今日のように仕上がつたのだそうである。
太鼓はその後栃木県佐野の福富町の囃子を見て真似たそうである。こう
した複雑な時代の移り変わりによって現在のものが完成したのである。
したがつて、おかめひよつとこを見てみるとすぐわかるのであるが、単
なる神楽の反閨や仕草とは全く違つた日本舞踊の型が多分に採り入れら
れているのであつて、たしかに神楽とよんでよいかどうかさえ実は問題
になるだらうと思ふ。しかし、三韓征伐と大蛇退治のような曲目によつ

て神楽としての面目を保っているのである。

「おかめひよつとこ」の筋は、最初におかめが子供を背負つて出てく
る。最初は日傘踊りで、日傘を持って囃子につれて踊る。その次ぎに扇
子の舞がある。そこへひよつとこが現われて、おかめの背中の子をあや
す。曲はこの時郷愁をさそう子守唄に一変する。演出はこのあたりな
なか微妙である。おかめとひよつとこは羽根つきをやつて互いに遊んだ
あと、おかめが背中の子供を下におろしてひよつとこにやると、ひよつ
とこが抱いて座わり、おかめが踊る。そのあと、おかめがひよつとこの
髻を刺つてやる。このあたりの仕草もなかなか面白い。最後にひよつと
こが子供を背負つて楽屋に入り、つづいておかめが退場して一曲の舞台
が終わる。正式にやるとこれだけでも一時間を要することであつ
た。とにかく、このおかめを男性の老人が踊るのであるが、その手振り
腰のこなし、足運び、すべてが堂に入ったもので、おそらく興舞の神楽
としても異色のものであろう。

第二に今回見た曲目は三韓征伐である。最初虎に扮した一人が出て舞
う。次ぎに青鬼が現われ、二人で大きな徳利で酒をくみかわして大いに
暴れる相談をする。虎と青鬼で三韓の悪者を象徴しているわけである。
二人が酔つてグデングデンになつた所へ神功皇后が弓を持って現われ、
二人を退治する。次いで野見宿弥が子供を抱いて出る。宿弥が先きに退
場し、最後に皇后が六方を踏んで退場するというもので、この間二十分
ぐらい。ほんとうにやると矢張り四十分ぐらいは要するといふ。

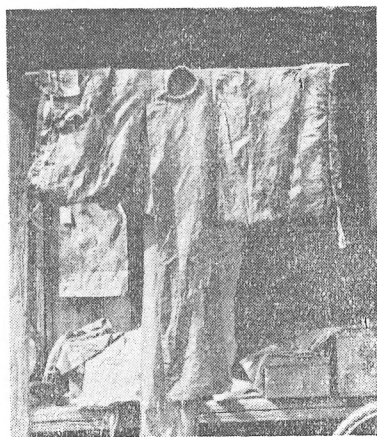
以上のように今回はただ二種目しか見られなかつたが、歌舞伎の脚色
になるものが見られたらもつと興味あることが示唆されたかも知れな
い。しかし、この二つから、板倉神楽の特質は十分に推定できるはずで
あつて、大道芸に変化していった⊙の大神楽などへの過程として見ても
見られないことはあるまいと思ふし、郷土芸能としてその発達の位置
はきわめて高いという事実は認められるのである。

二、能の式三番

式三番が神事芸能として、むかし神社に付属する重要なものであったらしいことは、現に行われる城南村一ノ宮の赤城神社、前橋市下長磯の人形芝居式三番（県重要文化財指定）や多野郡上野村乙父の貫前神社に宝物として所蔵されている翁面一式（「上野村の民俗」下、拙稿参照）などでもある程度察せられる。能の式三番は非常に厳肅なものとしており、それが人形芝居、歌舞伎の世界でも重視され、長唄による式三番や舌出し三番叟へと変化してゆくのであるが、今回の調査で、板倉町に二組の式三番関係の遺品を調査することができた。一つは石塚の式三番衣裳であり、一は岡の翁式三番関係一式の遺品である。両方とも現代を去るズツと以前に廃されたらしく、石塚の方などは廃された年代が全くわからないほどであるが、岡の式三番は最後が大正十一年頃だったというからもうやらなくなつて四十年からになっている。当時は毎年天神さまの祭（高鳥神社）の正月二十五日に演じたというが、道具類はその間田島齊氏の宅に保存していた。すると比較的最近まで岡ではやっていたことになる。したがって本報告書に現在行われていないが、過去において盛んに演じられた事実から見て紹介しておくべきだと考えたのでここに記しておくことにした。

石塚の式三番衣裳 こんどの調査で石塚の集会場にわけのわからない古い衣があるからというので、予定になかったが往訪して調査したところ、能装束で、明らかに式三番の翁の着用するものであることがわかった。一部痛んでいるほか、かなりよく原形をとどめていた。ポロポロに痛んだ他の二枚は一は千歳着用のもの、一はこれはまぎれもなく三番叟着用のもので、三種ともちゃんと保存されていた。鼓を打つ囃子方の袴（かみしも）と、二重縫いになつて引き幕もある。それなのに肝心の面が一つもないのは途中でおそらくいたずらされたか持ち去られたものであろう。ことに注目されるのは衣裳類の納めてあった道具箱があ

り、そのフタに墨書があつて、元和二年に新調したものであることを記している。これは群馬県の芸能史の資料として貴重な事実を物語るものである。戦国時代のあと一応天下が平和を取り戻したとはいへ、豊臣方と徳川方との対立は深刻なものがあつた、その終止符が元和元年の大阪落城で打たれた翌年に、板倉町地方で農民が能の式三番を演じる一式を揃えたことがわかる。



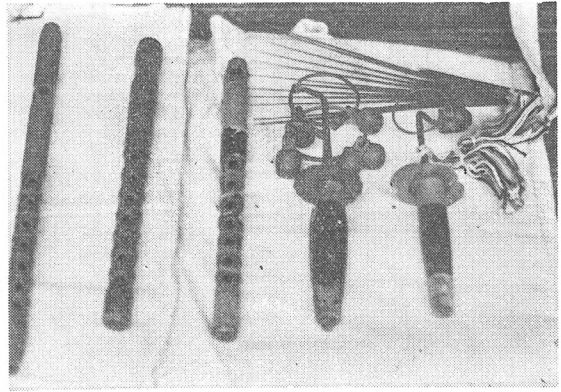
石塚の式三番装束

もともと能の翁はその発生がインドか、インドが蒙古地方に接するあたりか、あるいは蒙古あたりだというし、東南アジアだともいうが、日本芸能の中で神格視されているのを見ると原始神事芸能との関連が深いものであることが推定されている。

。いわば異国から最初の日本民族とともに将来されたという見方が強い。天下泰平、国土安穩、五穀豊稔を祝禱する神事芸能として中世から重んぜられていた。したがって農村でも神社の祭礼に、この式三番を演じて祝禱をしたものらしく、やがてそれが農村の民俗芸能として独立して存在するようになったものである。石塚の衣裳箱の墨書銘は、群馬県の式三番の普遍化の時期を推定するのに貴重なもので、衣裳とともに大切に保存してゆきたい。

岡の式三番 旧大箇野地区の岡にも、翁の面があることを調査中に聴き、急に調査することになった。岡部落の田島齋氏宅に道具箱（これは新らしい）に収納されているものを出して調べたところ、次ぎの品々があつた。

翁面 二（白式尉一、黒式尉一）鈴 二 笛三本（中二本は特に古い）翁



岡の式三番の笛と持物

装束 鼓四 大胴二 幟

(嘉永六年)

このほか中啓は扇面が全部とれてしまつて骨だけがあつた。翁面は白・黒ともに切れアゴ彫りもかなり深く立派な作である。衣裳や面からみて石塚よりあたらしい時代のものであるかと思う。鈴は神樂や能では靈的なものとされ、むかしの旅人などは途中の猛獸や悪魔を防ぐために鈴を身につけて歩いたほどであるが、七五三につけられた鈴も古いもので(一つはごくあたら

しい)ある。これらからみて、実演の際には、大胴(大鼓)と鼓を囃子方が用いたことがわかる。柏子木は見えなかったがおそらく以前あつたであろう。

岡の式三番は大正十一年を最後として止められたらしいが、現在当時翁をやつた人は死亡したが、三番叟をやつた今井喜兵衛、大塚藤一の兩人は健在だというし、千歳をやつた者はいく人か健在だとのことであつた。実はこの文化財の担い手であつた人達に会つていろいろ聴きたかつたが予定が一ぱいで次ぎ次ぎと遅れているためまたの機会を約して聴書調査を後日に譲つた。その頃の上演は神社(天神社)の拝殿を舞台としてやつたそうで、終わると千歳が外にいる氏子のために面箱を捧げ、氏子はこの面箱の下を一人一人くぐつて、その年の幸福と無病息災を願つたという。この神聖な面箱(実は翁の面)の下をくぐる習俗は、現在でも前橋の下長磯の人形式三番でやつている。対照してまことに興味があ

る。この式三番一式も町当局でしかるべき保存方法を講じてもらいたいものの一つである。

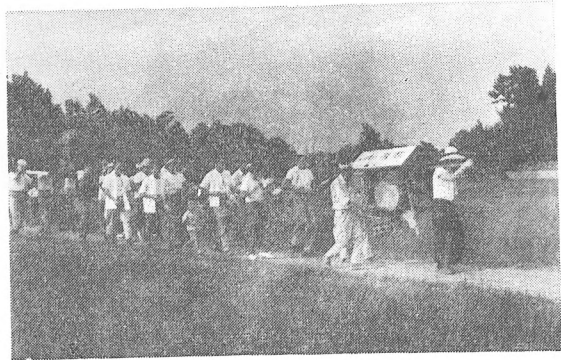
四、祭 囃 子



岡の式三番の白式尉の面

祭礼の屋台や山車に乗り組んで囃す囃子を、一口に神田囃子とよぶほど江戸の三大祭の一つである神田囃子が有名である。が関東地方の囃子は多かれ少かれこの神田囃子の影響を受けている。数多い祇園の際の囃子にしても、祭礼の時の道ゆきの囃子にしてもそうである。板倉町の祭囃子は、山口地区の大杉神社の氏子によって伝えられている「大杉囃子」を調査することができた。この囃子は大杉神社の祭礼の八月四日に毎年行われていたものであるが、今回その当時のままの仕来りを実演してもらつた。大杉神社というのは茨城・千葉二県にまたがる水郷地帯を中心とした船乗りが守護神として信仰したものである。赤松宗坦の名著「利根川凶志」には、この大杉神社を絵入りで紹介している。舟運関係で船頭が信仰したが、地元では漁撈の神としていた。下利根川と交渉のあつた群馬県の各河岸(川の港)にはいづれも大杉神社が勧請されたらしく、佐波郡玉村町五料や前橋市の利根川沿いの村などにも奉祀されている。同様に、この板倉町山口地区も分祀したものと見てよいであろう。大杉囃子という名称は、もとの本社の大杉神社

ときに、それを村から追い払うために、この唄を歌いながら離し立てた笛・太鼓などの囃子を阿波囃子とか大杉囃子とよんだのである。茨城県各地に多く見られるのであって非常ににぎやかな囃子である。この大杉囃子が板倉町の山口地方に伝わる理由は十分に考えられる。古河を中心としこの地方の交渉は茨城県の方が密接であったことは他の事例から立証できる。すぐ川を距てた対岸はもう茨城県



大杉囃子の道ゆき



大杉神社

にあった囃子が伝わったと解釈するよりも、大杉神社に行われるところの大杉囃子と解釈した方が自然かも知れない。しかし茨城県の大杉神社のある阿波(あんば)村には、民謡として「あんば囃子」とよばれるものがある。歌詞は、
阿波大杉大明神(ア、コリヤコリヤ) 悪魔を払ってよういやせ(ア、サノセ) ヨーホウイ、ヨイトコ、ドッコイセ
といったものであるが、ある時この地方に疱瘡が流行した

興と大きな神楽獅子の獅子頭を供えてある。この獅子に「宝曆十一年五月吉日そね中」という墨書銘がある。氏が揃うまで、寄せの獅子がある。やがて、神官、氏子総代と祭の担当者が揃うと、いよいよ「おねり」「道ゆき」に移る。道中の順序は、梵ぜん(御幣束)の大きいのを二人で持ち、次に神官が二人従い、その次に大杉囃子の囃子方、最後に神輿が従う。離し立てながら、これから一軒一軒を廻り、悪魔払いをするが、各戸に乗りこむことを「ぶつ込み」とよんでいる。ぶつ込みがゆく



大杉囃子の連中

であって見れば当然大杉囃子が取り入れられてよいからである。「日本民謡大観」(関東篇)の三十三頁に収録されている、茨城県鹿島郡矢田部村の大杉囃子は五人囃子とも称し、笛二人、太鼓(大と小)二人、大鞆一人、小鼓一人、鉦一人の五種の楽器を用いて七人で合わせると報告している。曲譜も掲載されているがよく似た旋律のようである。おそらく、山口の大杉囃子は大杉神社とともに茨城方面から受け継がれたものであろう。
山口の大杉囃子は、大太鼓一人、小太鼓一人、鼓一人、鉦一人、笛三人、計七人であって茨城の場合に比べて大鞆だけがない。大鞆は鼓の大きいものであるが以前はあったらしい。現在は鼓を五つにふやして大鞆の役目をさせているらしい。調査当日祭礼そのまま実演した(後でこの調査のためわざわざ変更して呉れたことがわかった)ものを見るとまず大杉神社の境内(村中で一番高い位置で絶対に水害を受けない位置)に、神



大杉囃子のおねり (下につづく)

と、その家の主人は外に出て出迎え、先ず御神酒を呈し、一同にも神酒を注ぐ。こうして一軒廻わり、最後に神社に戻るが、これを「引き込み」という。引き込まれた神輿は、囃子に合わせて担ぎ手が振りながらグルグル廻わす。一見危険に見えるほど荒い所作である。これが終わると一同社前で「しめて」この祭を終えるのであるが、むかしは厄病除けや雷の時に臨時にやったりと伝えている。こう見てくると、矢張り茨城県のものと同大分似たものであることがわかり興味深い。

問題の囃子の曲目は、現在次ぎの十一曲が行われている。

- 一、太 刀 (或いは打つ込みともいい調子の速い曲)
- 一、しようでん (道ゆきの時の曲で荘重で緩やかな曲)
- 一、社 切 り (にぎやかな曲)
- 一、が く
- 一、新ばやし (屋台囃子に近いもの)
- 一、祇 園 (十一曲中最も美しい旋律とハ一モニーを持つている曲)
- 一、三 べ ん
- 一、しようわ } (この二曲は最近栃木県の方から覚えたという)

- 一、雷 (名のように大太鼓の調子をあげた力強い曲)
- 一、山 王
- 一、そこやれ (軽快な踊り出したような曲)

いずれもあたりを庄するような曲が多く、ある時はにぎやかに、ある時は勇み立ち、ある時は沈んでゆくように、さまざまな感情をよび起こすものが多く、囃子としては多野郡上野村の囃子と並べていざれ劣らないものであるといえよう。笛は七穴であるからなかなかむずかしいであろうが、よくこなして、いかにも祭囃子にふさわしいもので、こうしたものが、群馬県の最東端に保持されて来たことは実によろこばしいことで、黄金の文化財にまさる価値をもっている。

五、舞 踊

概説 舞踊もひろく解釈すれば獅子舞や神楽なども舞踊であるが、それらは一応独立したものとみなし、ここではいわゆる踊りを主としたほかのものを紹介しておくことにする。「歌い踊る」ことは人類の発生とともにあったはずで、悲喜哀歓をそれぞれ肉体によって示めそうとする時に歌いそして踊るのであるが、それだけに舞踊の歴史は古くしかも究め難いものの一つであろう。芸能の最初が神と人との関係から発生したという原則はおそらく崩れまいが、同時に個人である場合の感情意思の表出方法としても踊ることは自然発生的であったはずである。板倉町で特に舞踊として採り上げるとすれば、盆踊りと念仏踊りの二つであろう。盆踊りは最初天上界から先祖の霊をこの地上に迎え、ともに現世を踊り狂ったのに始まったといわれているが、手拭いで頬被りするの靈魂がその顔を隠すことから始ったろうとか、両手を合わ



大杉囃子のおねり

せて打つ拍手は、靈魂を地の底から現世に呼び戻すことから始つたらうとか、いろいろの説はあるが、たしかに盆踊りはただ単に一人が自由に踊るものではなく、集団である一夜を現世の人間と幽界の人間とが一つになって楽しむものであったことは事実である。念仏踊りも、もともと盆踊りであったもので、それが別々になってしまったに過ぎないのではないかと思われる。ただ今回の調査では、盆踊りそのものの集団でやるものは見られなかった。

盆踊り 靱谷の集會場で、八木節の調査をした時に、「ブツ切り節」とよばれるものを披露された(本稿民謡の部参照)が、その時に頼んでこの節に合わせた踊りを見たいと希望した結果、やつと短時間に実演してもらったものだけ見られた。増田又吉さん(七十五才)と島村ますさん(五十八才)の二人に踊ってもらった。いずれも現在行われている盆踊りとは大差はなかったが、二人とも手拭いのほかは全部手踊りであることと、手と足を左右同時に使う踊り方が主であったことは注目された。



三つ切り節の踊のポーズ

の場合に、片足を前に出し、その方向に向かって両手を三回打つ動作や、手を使うのに、石投げ踊りとよばれるようにポンと前に突き出す動作などが引く手差す手の美しさとともに古い型式を思わせた。

念仏踊 高鳥部落の婦人の年寄りばかり九名から同地の集會所で和讃の披露と同時に実演してもらったのである(和讃については民謡の項参照)が、ここの念仏踊はたしかに和讃について来た念仏踊であるが、し



念 仏 踊

り、時々合の手に「ヨーイシヨ」と軽く入れ続けてゆく。今回は大日御庭和讃の踊りを見たが、右手右足、左手左足が同時に出る古い念仏踊の型がくずれずに遺っている。静かな流れのような踊り方が印象的である。いま一つ、こんどはレクリエーションとか娯楽に類する華やかな踊りとして、お里沢市の壺坂を見たが、この時は鉦の代わりに扇を使って踊った。ちょうど八木節が手踊から手拭踊へ、さらに花笠踊へと変化した



念 仏 踊—壺 坂 の 踊

かしその中に民俗芸能的な要素もいくつか持ちつづけられていることに気付いたのである。この老婆たちは昔からこの念仏踊をやっており、斎藤たいさん(八十才)などが元老株になっている。服装は盆踊りあるいは念仏踊によく使われる紺の緋の単衣物を着、手に鉦を持っている。この鉦は別に台をつけていない。これを左手に持ち右手の小槌で打ちながら踊る。一人の音頭取り(実は歌い手)が和讃を歌うと、それに合わせて踊

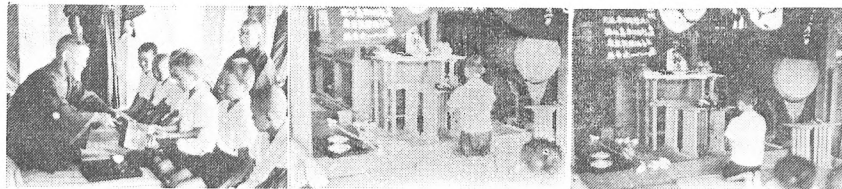
ことによく似ている。

たとえ和讃の念仏踊りで、ある宗派が特定の信者を得るために普及した念仏踊りであっても（この念仏もそういう経緯はあったこと）その中にかなり古い型式をのこしている点で十分注目されてよいであろう。群馬県内にはこの程度の念仏踊りも他にはほとんどないことは不思議であると同時に、板倉町の念仏踊りが保存されなくてはならない大きな理由にはなる。



→ 弓 取 り 式 (下につづく)

若い層は、こうした古くさいものを何時まで真似て受け継ぐかが問題であるとすれば、この際記録に遺すことも一つの対策であろう。なお、念仏踊り同郡では現在邑楽郡邑楽村篠塚の小林しようさん（八十才ぐらい）が近所に教えたものがわずかに遺っていることを付記しておく。この踊りは鉦と鈴を使うということである。邑楽郡地方は、むかしから念仏踊りが盛んであったことは、大正六年発行の「群馬県邑楽郡誌」の中に、又念仏踊りと称するものあり、是れ老婆等の寺院に集会して、六字の番号を唱へ、夜中に舞踏するな



→ 弓 取 り 式

り。是れ踊念仏をなすは仏の踊躍歓喜といへる心なるべし。其の他万作踊、豊年踊等所によりて行はる。要するに、農家の娯楽は、日常労働するを以て、一日半日の閑を得て其の労を慰せんが為に行う者にして、時代に因り多少其の趣向に変化あり。（五二三頁）と報じているが、当時からすでにこの念仏踊りが郡下にさかんに行われていたことを教える。現代との関連を知る上に参考となるので引用しておいた。

Ⅲ 榎谷の弓取式と

引継ぎ式

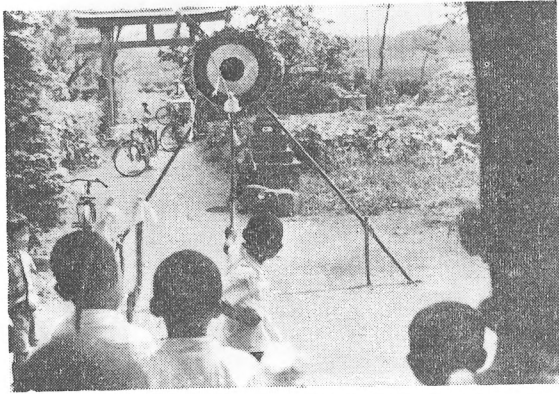
一、弓取式

榎谷の長柄神社で毎年正月十日に行われる特殊神事である。七つの部落の当中番部落から選ばれた男の子（十才前後の者を標準としているが十一才か十五才ぐらいまででむかしは家の後継者を優遇するために長男と定めてあったが今は二、三男でもよい）が、神社の拝殿に昇り、儀式のあと、ウツギでつくった弓と篠ダケの矢を授けられ、社前につくられた的に向かつて矢を射込む儀式である。一種の的占いの神事であり、武士のやった流滴馬のような尚武的な成人式に意味を持たせた行事のようである。

祭が近づくと、七部落のうち当番にあたった部落の氏子代表がすべての祭の準備をする。的はタケを割ったものを円くして紙を張り、直径八〇センチぐらいとし、中央を黒色次ぎの周円



→ 弓 取 り 式

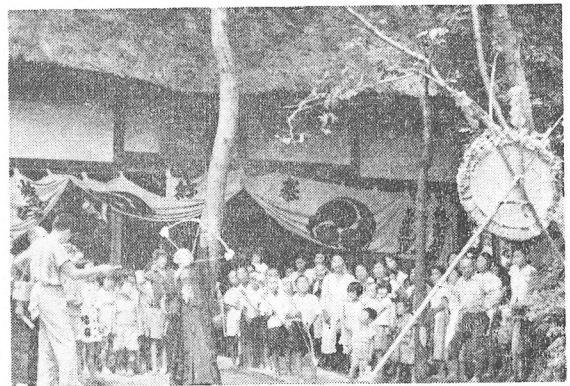


弓取り式—子供が射的するところ

的場に射手の子供が揃うと、大世話人が先ず自分の弓に矢をつがえ、中天に向けて満月に引きしぼり、大きな声で、「テンビョウブリ」と叫び矢を放つ。これは天空の悪魔を射つための仕草だといっている。テンビョウブリの意味については村人もよくわからないといっているが、電乱の多い地方であるから、電害を防ぐ意味の言葉かも知れない。この大世話人の初矢がすむと、いよいよ子供達の番になる。それぞれむしろの上

を白色、外側周円を茶色に塗る。的の外側に色紙で房をつける。これを二メートル六〇センチぐらいのタケを×字型に交又した結接点の所につける。そしてタケの上方に御幣束をつけ、交又したタケの根本は副え杭を打ってこれに縛りつけてある。本殿に向かいあつて立てられている。時間が来ると、神官、氏子惣代、当番が本殿に昇り着座する。やがて神官の抜いがあり、祝詞が奏上され、玉串奉奠と型通りに行われる。終わって「冷酒まわり」という直会の酒が廻る。そこへ男の子供が列席して、一人一人に神官からウツギの弓と篠竹の矢が授けられる。弓はウツギの木を曲げ、両端と弓手のにぎるところに白紙がつけられてい

る。タケの矢は赤と青の色紙が巻いてあり、矢羽のところも色紙を使っている。七人の子供達の次に大世話人にも神官から弓が渡される。次に神官が、「各各的場に出ますよう」と宣告すると、大世話人の先導で男の子も的場（本殿前の広場）に出る。



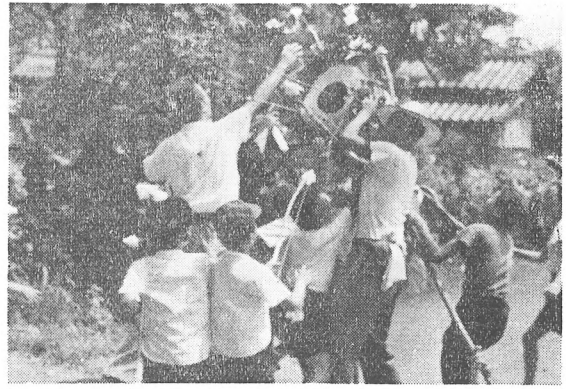
弓取り式—総代が「テンビョウブリ!!」と叫んで虚空に矢を放つところ

宮貫前神社では毎年神事としての射的の神事が行われているがこれはすべて神官だけで執行されている。この弓取り式に当番をやった家の壁に、「大」「小」の紅白の文字が大きく書かれる。大は白字、小は赤字で書かれる。村人の話では、大は天の悪魔、小は人間界の悪魔だといっているが、私はむしろ利根郡や吾妻郡などでいわれる天から降りて来る悪魔とされる「ダイロクテン」の大であるかとも



弓取り式の家壁に書かれた「大」「小」の文字、小は朱色のため、かすかしか写っていない。

からの的に向かつて矢を射かける。若し誰かの矢が中央の黒星に命中すると、参会者は的に飛びついで的を奪い取り、その周囲の色紙の房を悪魔除けになるといって着物の襟に縫い込むとともに、戦争のある時代は武運長久の祈願にもされたという。もし何回射ても中央の黒星に当たらない時は最後に大人が射当てて行事を終わる。群馬県内では他にない特殊神事であるが、一



弓取り式——的の飾りの奪い合い

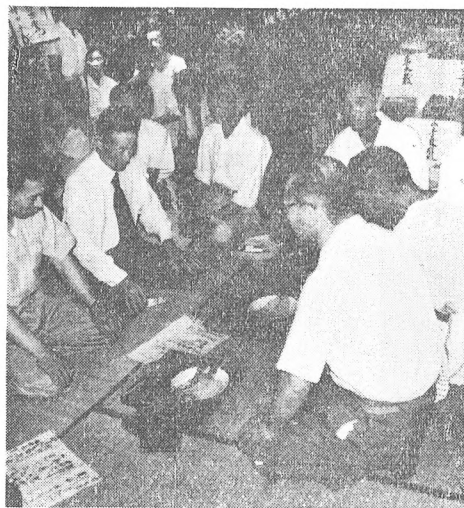
ではないかと考えるのもそう無理でないかも知れない。この弓取式は年の始めの占いであるとともに、成人式と天の悪魔を払う神事などが結合したものではないだろうか。

二、引継ぎ式

矢張り靱谷の長柄神社で執り行われる神事であるが、七部落が一年交替で当番をやることになっているが、その事務引継ぎを本殿で厳肅な神事として行なうための儀式である。一年間の事務量を一ぺんに引き継がずに、二分の一を正月に、二分の一を六月に渡すことになっていたが、今は正月十五日と七月十五日にする。昔は旧暦の正月と夏の六月十五日（八坂祭の日）の二回だった。今回の調査したのは夏の引き継ぎ式であった。夏の時は特別にカクラン草という珍しい草を添えるのが例とされている。この草は厄病除けに効き目があると信ぜられている。

考えるし、ダイロクテンに備えて、各戸の庭先ぎに、ダイマナク（大眼）とシヨウマナク（小眼）と云って、ザマ籠の底を外に向けたり、ミソコシなどの底を外に向けて置く風習と関連した習俗ではないかと思う。ザマとミソコシを大きな眼玉に見立て、空から降りて来るダイロクテンが怖れて寄りつかないためだと信ぜられているが、そのダイマナク、シヨウマナクの代わりに、大・小の文字を書いて置き、天からの悪魔を払ったの

ぎ、天からの悪魔を払ったの



靱谷の引継ぎ式

の代表本年当番誰々さん、受取番の代表誰々さん、給仕として誰々さんと一々座を指定して着席させる。そして「用意ができましたので行事に入ります」と宣告して式にかかる。まず朗々と高砂の謡曲が歌われ、その間に酒を注ぎ肴

（キウリもみ）をはさんでやる。そして謡の四海波を一同唱和してこれが終わると、渡方から、「本年の当番としてかくの如く立派に果しました」といって盃をあげると、引取方が

「本年度の当番まことに御苦労さまでした。本年の当番としてしかと引き受けました。立派に引き受けます」

といて無事に引き継ぎが終了すると、司会者が、「只今のよう無事滞りなくすみました」といって、司会者から終了をつけ、最後にそのま

この引き継ぎ式では祭に使う器具などが渡されるが、いまその順序を追ってここに説明しよう。

「只今から長柄神社の引渡式を行います。関係者は御神前に願います」



膳の式継引

ま式をしめるシャンシャンの手打ち式で終わる。直会の時に謡曲千秋楽が謡われ、肴としてあといくつか謡曲が行われたという。

この引き継ぎ式の謡曲は古い観世流である。一般にはどうだかわからないが、こうした行事の中に古い謡曲が生きていることは興味をひかれる。「昭和六年正月うたい本」というこの儀式に使う謡の自写本によると、高砂、四海波、千秋楽のほか、「長き命を」「御子孫も」「松たかき」「松が嶺の」「浪花津に」

「雪とのみ」「長生の家にこそ」「しんようのいのほとりにて」「花咲かば」「釣のいとまも」「ろくじかけ」「秋来んと」「白妙に」「有難のよごや」といった謡い出しのものが記録されているのを見ると、かなり多く謡われていたことがわかる。能の翁式三番の謡いがそっくり遺されていると見てよい。このことは、石塚や岡の式三番との関連がここにつくとも見られる。(本稿民俗芸能の項参照) 式三番の減び去ったあと、その時の謡が、こうした行事に継続したということも考えられるからである。

県下の他の地域でも、村役の事務引継が多く正月行われるのを慣例としているが、それは契約(けえやく)と称する集会の席上で執り行われるが、靱谷の引き継ぎ式のような例はほとんど知られていない。神に誓って責任をハッキリしたこの村の式はその面から見ても興味ある行事といえよう。(昭和三十六年十一月三十日脱稿)

追記

この報告書を一日延ばしに延ばしていたのは、折を見て再調査をしなければならぬ不明な点疑問の点が多かったからであるが、多忙と健康を害していたためにその機会がなく、ある点では非常にボヤけてしまっている。現にこの執筆も病院に通い薬餌に親しみながらのものであって筆者としては不本意の点もあるが一応報告の責任を果す意味で出稿することにした。なお民謡の将譜が、本調査後地元の小中学校の職員の手で行われ、別に本報告書に収録されることになったことは幸である。歌詞の如きも筆者の採集と一部違っているが、これは伝承者がちがうためで止むを得ないことである。併せて参照願えればと思いい一言付記することにした。

麦 打 ち 歌



1. じょうゆな よ い と - - こ - -
 2. あかぎな つ つ じ - - に - -
 3. きてはな ら ら ち - - ら - -
 4. きょうもな と ま ら - - ぬ - -



ア - おやまが - ま ね - - く - -
 ア - はるなの - わ ら - - び - -
 ア - おもわせ - ぶ り - - な - -
 ア - あ - きの - ちよ う - - - -

田の草取りの歌

♪ = 84 位



き て は - ひ あ - - か す か ぶ - の こ - - - - -



や - - - る - - め ど こ の - に し ん



の - - - - た ま ご - - - - や ら

土 端 歌

—ぼうちうた—

First system of musical notation. The top staff is in treble clef with a key signature of one flat and a 2/4 time signature. The bottom staff is in bass clef. The lyrics are: ホイ ヤ ハヨイト コーラー

Second system of musical notation. The top staff is in treble clef. The bottom staff is in bass clef. The lyrics are: サ ヨ ンダ ヨ ホイ ヤ コーラー

Third system of musical notation. The top staff is in treble clef. The bottom staff is in bass clef. The lyrics are: おーや こえてサー くるのは みなさんが

Fourth system of musical notation. The top staff is in treble clef. The bottom staff is in bass clef. The lyrics are: サ ヨ ンダ ヨ ホイ ヤ コーラー



Fifth system of musical notation. The top staff is in treble clef. The bottom staff is in bass clef. The lyrics are: おや ね-きの かれつは のよーなー ももひきはいて

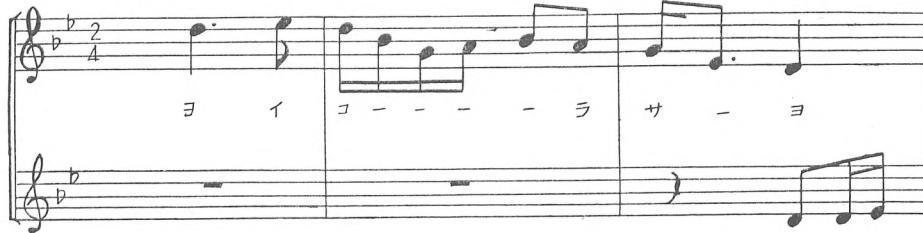
Sixth system of musical notation. The top staff is in treble clef. The bottom staff is in bass clef. The lyrics are: サ ヨ ン レ

○印はほうちのリズムがはいるところ

土 端 歌

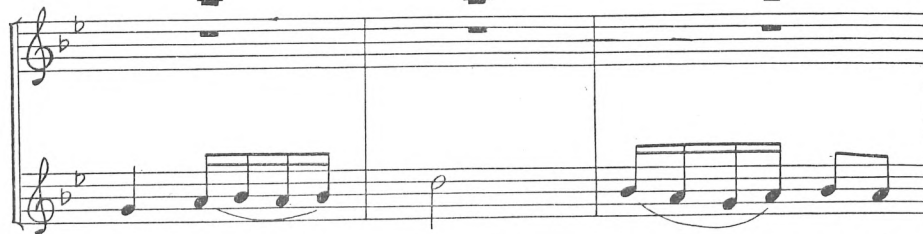
—ぼううちうた—

くいのリズム → ) — )

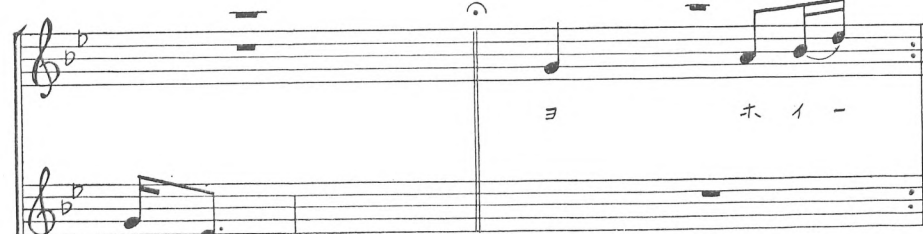


ヨ イ コー — — — ラ サ — ヨ

ヨ ン ガ ラ



マ ハ — — — ア サ — — — ホ ラ



サ — ヨ

ヨ ホ イ —

くいぶち歌

音藤しゅう・佐藤とく口伝
 ㊤ ㊦は交互にうたう。

威勢よく

㊤

㊤

㊦

㊤

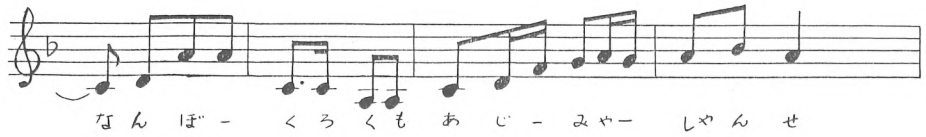
㊦

㊦

○印ハタイヲ打ツリズムデアル

藻取り歌

♩ = 72 位



糸ひき歌

♩ = 76位



1. いとそむく—な　　ら—むらなく—ほ
 2. あがてふし—な　　く—むぎんの—
 3. おとこぎんがし　　の—まさとやん—よ
 4. さんぢやく　　むと—え　　の—むとが—よ



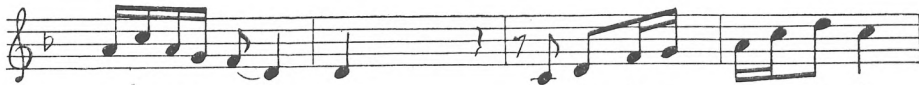
そ— — — く　　どっ　　こ　　い　　な　　—
 い— — — と　　どっ　　こ　　い　　な　　—
 り— — — も　　どっ　　こ　　い　　な　　—
 — — — い　　どっ　　こ　　い　　な　　—

機織歌

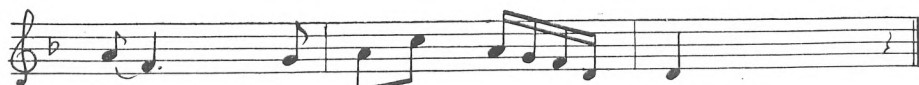
♩ = 58位



き　　れ　　て　　—　　こ　　ま　　る　　よ　　い　　ち　　は　　の　　—　　—　　い　　—



—　　—　　—　　と　　が　　き　　れ　　て　　—　　—　　か　　ら　　ま



る　　—　　さ　　ん　　の　　—　　い　　—　　と

祭 文

♩ = 80位

うとつとせよ ひともしり
 たる おおみまは
 しゃんねん いぬの
 とし きゆうのしちがつ たなばたよ
 あちらこちらの おおあれは
 さくもなみだの したいなーり

盆踊りの歌

—くどきがし—

♩ = 100位

1. さ あて いちぎの むらみなさまよーい よん で
 2. や まじや あかぎか ばるなか みよぎーい ほ だ か
 3. あ きほ おりなす もみじの にしきーい お い しゃ

あげましょー せ の え い せ き は
 しらねのー や また に だ に に
 さまでもー な お ら ぬ や ま い

さ て は じょうしゆに っぼん いちはーい お と に
 ほ だ か しらねの や また に だ に にーい な つ は
 ば か と びんぼとこ い わ ず ら い のーー あ と の

きこえしー ばんじう た ろ う
 わかばかー やまほととぎす
 やまいはー じょうしゆへ こ ざ れ

念仏踊り

♩ = 72位

き - - - - - むよ う - - -

ちよ - - - - - う ら - - - 3 ヨイ

あ - り - - - - - が - - - - -

た - - - - - や - - - - - ア ヨ イ

調査委員一覽表

氏名	役職等
相葉 伸	文学博士・群馬大学学芸学部長
池田 秀夫	県立博物館学芸係長
井田 安雄	前橋市立女子高等学校教諭
今井善一郎	群馬県文化財専門委員
上野 勇	県立沼田女子高等学校教諭
都丸 十九一	群馬県文化財専門委員
萩原 進	群馬県文化財専門委員
関口 正巳	藤岡市立第二小学校教諭
森田 保次	民俗学研究者
矢島 胖	民家研究者
大崎 福寿	県教育委員会事務局
近藤 義雄	〃
高橋 猛虎	〃

調査協力者一覽表

機関名	氏名
板倉町	根岸 倉重、小森谷義一
板倉町教委	野木村弥五郎、宮田 茂 外多数
板倉町立東小学校	黒野 仲雄
〃 西 〃	砂川 三十、長谷川高市、大塚 留吉
〃 南 〃	川田 茂、荒井 久七、小野田 勇
〃 北 〃	島野 定義、麦倉 泰明、福富 稔
〃 東中学校	鈴木 好男、川島 政次、小暮 新八
〃 西 〃	斎藤 素彦、荒井 晁、高瀬礼次郎
〃 南 〃	関根 昭
〃 北 〃	島田 正夫、岡島 輝男、多田 卓
坂村 孝雄	坂村 孝雄
荻野 倫将、木村 政夫、飯塚平八郎	荻野 倫将、木村 政夫、飯塚平八郎
前橋放送局	大井寿美雄、松下 登
その他	板倉町各区長 雷電神社 各字古老大勢

氏子総代	歯
うずこへえこ	二九
うずぶれ	二九
うせもの	三〇
うだつ	三三
ウチガミ様(屋敷稲荷)	三六、七
うっそり	二九
うच्चりっこ	二九
宇都宮の羽黒山	二〇
ウナギカキ	元
ウナル木	二七
卯の日	三三
ウブゲ	三〇
ウブタテノカユ	三〇
ウマオリ	三三
ウマノツムジ	三三
馬の乗り初め	六
ウマヤ	四
ウマヤグチ	四
ウメバカ(ウメバカ)	三、三、六、六
梅干	二九、二〇
うらへら	二〇
えい	二四
エナウメバカ	三
エビ	六
えびす講	七、一四
えびす様	六、二九

海老背	二六
エビ大根	三
エビブツテイ	六
エプロン	三
えぼ	三〇
えもち	二九
エンガワ柱	四
えんぎ	二四
エンギ田	一七
縁組み	三
オイビスサマ	六
オイベス様	七
おうだい	二九
おえびす様	一三、三三
大杉様の御輿	三
大杉信仰	三
大杉神社	九、二二、三三
大杉神社の春祭り	三
大杉囃子	一三
太田の呑竜様	三三
オオダルマ	元
大晦日	三
大晦日	三、三
オカギ様	三
オカギサマ	三
岡の式三番	一八、二二、二九
オカマ様(カマ神様・おさま様・お釜様)	二九、三六、三〇
オカマダンゴ	九

おかまのだんご	二四
オカマ柱	五
おかみ	五、二四
オキ(おき)	七、一〇
オキドコ	五
オキバリ	元
オクノマ	四
オクリイタチ	二九
おくり念仏	六
おくんち	二四
オコゾ	八
オコト	七、七、八〇
おこり	二九、三〇、三三
オコワ	三〇
おさご	二四
お産・誕生祝い	元
お地藏様	二四
お七夜	元、三〇
オシブチ	三三
オシメ(おむつ)	六
オシヤ	三
おしゃか様	三
おしゃんぐり	三
お正月の飾り花	二〇
オシヨウジン	三
オシラキ	三
オゼンタテ	三
オソウゼン(蒼前)柱	三
おそ行事	三
オソデン柱	三

お供えくずし	二、九
おぞばか	二九
オタキアゲ(おたきあげ)	三、三、七
おたらし	二五
オチャベエ	三
オツチョコチヨイ	三
おてんたら	二九
おてん念仏	三〇
おとうか山	二六
オトウミヨウ	二六
オトカ(おとか)	二六
オトカツキ	四、一〇、二九
オトヨシ	四
オトヨシ	七
お年玉	九
オナベ(夜なべ仕事)	三
オナメミン	三
オニオロシ	二九、三
オニタマ	三
オニダマ	七
オニドン	六
お念仏	三
オハンダイ	三
オビトキ	三
オヒマチ(おひまち)	七、七、一〇
オヒメリギモン	三
お百度参り	二九
おびや(おびあき)	二五
オビスナ様	三

オ ベツカ カ イ （お別火）	二 四、 三	火災見舞	四
オ ベツカ ツ カ イ	二 四、 三	かぎまつり	一〇四
お 部 屋 参 り	四	かたばりっか	一〇九
お 盆 行 事	四	かたみ分け	四
お 盆 様	五、 六	担ぎ石	五
オ モ ヤ	九、 一〇、 三	ガッツァラ	三三
オ ヤ イ セ コ ウ	五	カツテ	五
オ ヤ シ ラ ズ コ シ ラ ズ	三	カツマ	五
お 礼 念 仏	六	ガド	七
オ レ グ リ	四、 五、 六、 七、 八	カド様	六
お わ っ し 様	二	カド松	六〇
オ ン ジ ー	二	蚊にさされた時の呪い	六
女 ヨ シ	二	蚊の住まぬミツカ	二六
カ イ ホ シ （カイドリ）	三	カビタリ餅	九、 二四
か え り ん ぼ う	一〇	（かびたりもち）	
カ ガ リ ビ	五	釜	三
カ キ ツ ル シ	七	鎌上がり	九
カ ギ ツ ル シ （かぎつるし）	三、 二七、 三六、 四一、 四七	釜神様	一〇四
か き も ち	六	カマツプタ	五
カ ゲ 膳	一七	カマツタまんじゅう	五
か け ぶ な	六	カマ（かまど）	九、 六、 七
か く ら ん	二九、 三〇、 三六	かまどの神（様）	一五、 三
		かまどの炭	一四
		カマド休み	七
		神々の変愛	四
		カミ、ダナ	一四、 六、 八、 六
		（神棚）	

雷除け	一三〇、 三〇
カミノマ	五
カメノコ様	一四
賀茂神社	七、 七、 三〇
賀茂神社の祭り	九
鴨蓐（かもとり）	三〇
カヤカリバ	二
かやの実	二〇
カヤブキ	二
カユカキボ	七
体によわい子供	三六
カレイ日	九
川ビタリ餅	三
瓦の窯	三
変わり物（贈答）	四
かわりもの（変わり者）	四、 一〇四
癌	一四
玩具	五
かんし	一〇
勘定酒	四
間食	二、 五、 五
神田囃子	一八
観音様	一三
寒びやし	二〇
かんむし	一四
かんまじない	二六
祇園	七、 七
ぎすっか	一〇
木崎音頭	一七
ぎすっか	一〇

ぎず（の呪い）	一四
季節労働者	三
狐の泣声	一六
ぎゃくえん	一〇
木やり	一七
給人の縁切り餅	九
給人のわかれ餅	九
きゅうり（胡瓜）	一三、 三三
凶荒食料	三〇
行荒食料	二六
行塚	四
共同飲食	四
共同墓地	五
行人塚	五、 四、 二四
行人沼	一四、 二五
共有墓地	四、 六、 三
キョウロ（京邑）組	一〇
きよしよっぺ	一〇
切り干し	三
禁忌作物	三、 三
クイズメ	四
クイズメ	二、 三
クイズメ	一四
草葺き	二
草葺き	三
クサ	一三
くしゅみ	一四
ぐしゅみ	一〇
ぐしゅみ	一〇
ぐしゅみ	一〇

楠木神社	二四	庚申待	八、九、三	子育鬼怒神	二六	コンジンの様	二二
口の荒れたとき(呪い)	二四	庚申待と地震	八、九、三	子育地藏	二六	金比羅様	二二
口説き節	二〇	庚申待の禁忌	八、九、三	子育ての地藏	二六	婚礼(贈答)	二二
熊野様	六	(庚申待の)	八、九、三	コトジマイ	二〇	再行	二一
熊野詣り	六	食べもの	九、三	コトハジメ	二〇	再行	二一
幕の市	七	庚申待の由来	八、九、三	コトハジメ	二〇	再行	二一
ぐれもく	七	コウセン(こうせん)	八、九、三	コトハジメ	二〇	再行	二一
クワイレ(くわ入れ)	三、九	コウチ(コーチ)	三、二	コトハジメ	二〇	再行	二一
クワ入れもち	三	コウチ総代	三、二	コトハジメ	二〇	再行	二一
桑摘み唄	一六	コーチヅキアイ	三、二	コトハジメ	二〇	再行	二一
クエンチ	七	ことう	三、二	コトハジメ	二〇	再行	二一
ケエド	九、二	弘法大師(弘法様)	三、二	コトハジメ	二〇	再行	二一
下向ダンゴ	四、九	五月の節句	三、二	コトハジメ	二〇	再行	二一
けち	一〇	こがねもち	三、二	コトハジメ	二〇	再行	二一
元三大師	一五	こくぞう様	三、二	コトハジメ	二〇	再行	二一
ケンチン汁	六	ごこうおしみ	三、二	コトハジメ	二〇	再行	二一
コイセコウ	七	コジハン	三、二	コトハジメ	二〇	再行	二一
庚申講	八、九	腰まき	三、二	コトハジメ	二〇	再行	二一
(庚申)講員	八、九	(五十五のだんご)	三、二	コトハジメ	二〇	再行	二一
庚申様	三、六、九	小正月	三、二	コトハジメ	二〇	再行	二一
庚申塔	六	コ精進	三、二	コトハジメ	二〇	再行	二一
庚申のあたり日	九、三、九	個人墓地	三、二	コトハジメ	二〇	再行	二一
(あたり)日	九、三、九	ゴシンボク	三、二	コトハジメ	二〇	再行	二一
庚申様の誕生日	六、三、九	子育観音	三、二	コトハジメ	二〇	再行	二一
庚申信仰	三		三、二	コトハジメ	二〇	再行	二一
庚申塚	三		三、二	コトハジメ	二〇	再行	二一
庚申まいり	九		三、二	コトハジメ	二〇	再行	二一

せがき	七
せこしり	二〇
節供	三、七
節供(句)返し	三、七
セツチン参り(雪隠詣り、セツチンメーリ)	五、四、五
セツチンメリギモン	四
節分	七、二五
節分の豆	一六
セドグチ(ウラグチ)	四
セビ	三
浅間様	四、三七
浅間神社	一四
浅間神社参り	五
線香	一七、一六、一六
先祖様	六、五
せんだつ(先達)	一四、一六、一七
先達様	一六
膳棚	五、二五、二六
船頭笠	六
葬儀(見舞)	四
総二階	一、一四、一五
草履	六
そうりやく様	一五
そこまめ(呪い)	一四
ゾッキヒキワリメン	六
そつびやくりん	一〇
そばっかき	一五

夕行

第一次墓地	空、空
ダイヨク柱(大黒柱)	三、五、七、空
ダイシガユ	九
大師様	三、七
大神宮	空
大神宮様	兵、八、三
大神宮	三、六、四、四
大 豆	三
大イドコ柱	六
第二次墓地	空、空
ダイバムシ	三
ダイハンニヤ	五、三六、一四
(だいはんにや、大般若)	
堆肥舎	四
ダイマナコ	三
タイマツ	七
ダイマン	三
ダイマン様	空、七
代用食	三
ダイロクテン	一七、一六
田植じまい	三
タカッポ	五
高鳥神楽の曲目	一六
高鳥神社	一五
高鳥天神	一六、一七
たかとり(高鳥)の天神様	五、三、三三
宝舟	四
たき出し	四
タチブルマイ	四

たつぜん	一四
田中正造	一五、一七、一七
たなつちり	一〇
タナツペラ	六
七夕	五、一四
七夕飾り	五
七夕様	五
タナバタ節句	五
(七夕の)いわれ	五、七
田の草取唄	一〇、一六
田の字マドリ	三
タバコ休み	四
だぼ	一〇
たまか	一〇
魂呼び	三
たむし(呪い)	一四
ダルマ	元
ダンゴ(だんご)	七、兵、兵、八
だんご念仏	一三、一六、一三
誕生	四
誕生儀	四、四
誕生餅	四、四
だんなかぶ	二〇
旦那様	三
力石	五、五
地震	四
地藏	七
地藏様	三〇、三三、一七

地藏まつり	六
ぢだま	二〇
秩父の三峯様	五
ちぎちぎ	二〇
チヅケ	四
チヅケオヤ	四
チノワ(茅の輪)	六、五、五
茅の輪くぐり	七
茅の輪流し	七
チブク	一八
チボク	四
茶だち	四
チャノマ	四
ちゃん	二〇
中風	一四
中門造り	一〇、二
中宿	四
チユーロウ	五
ちようせえほう	二〇
長命祝い	四
調味料	三
貯蔵食料	三
ちよちよう	二〇
ちよっポ	五
ちよろっけ	二〇
チンゲ	五、五、三三
賃機	一六、一六
ツカミ	四
月念仏	四
筑波山	一五

筑波神社 七
 九十九谷 二六
 つけ物 三
 ツーシダンゴ 六
 辻念仏 四
 つつかげまんが 二〇
 ツツミセン 四
 ツネギ 四
 ツノガラエビ 六
 づわ 二〇
 デイ 四
 デイト 四
 デイト買 二六、二七
 てくねえ 二〇
 手甲 二五
 テゴツパタキ 元
 テズ 元
 手拭 二六
 デヌケマイリ 六、四七、四八
 (出抜け参り)
 でびてえ 二〇
 テマツカリ(手間っかり) 三、三、四
 てんかん 四〇、四一
 天気まつり 五
 天神講 二五、三
 天神様 二七、二六、三六
 テンジンヤッコ 二七、二五
 (天神ヤッコ てんじんやっこ)
 天道念仏 六

天念仏 六
 てんのうさま(天王様) 四、二四
 天王信仰 三
 ドウアンサマ 一五
 十日夜(とうかんや) 三、六、一四
 (十日夜の)唄 三
 (十日夜の)供え物 六
 (十日夜の)わらでっぽう 六
 とうぎみ 三
 どう 三
 冬 二〇
 冬 二〇
 冬至 六、三六
 冬至別火 六
 冬至ユズ 七、八
 道祖神 三、四、九
 ドウバン 二、四、五
 ドウバンシユウ 三、四、五
 ドウバンづきあい 四
 トウモロコシ 二〇
 とうもろこし 二〇
 どうろく様 一四
 ドウロクジン(道陸神) 九、九、九
 道陸神祭 五
 と 三、一四
 とげぬき地藏様 一四
 どころじん 一四
 トコノマ 四
 トコホリ 四
 年男 三、六、九
 年神 三

年神様 六
 年神様の棚 三
 年越しの豆 三
 年と 三
 としよりこども 二〇
 ドゾウ 九、三、三
 トゲ 五、三
 土端歌 六
 土端打ち(土端打ち)唄 一五、二五、六
 トビツキバリ 元
 トボグチ 九、三
 トボダンゴ 三
 ドマ 一〇、三
 土俵倉 一五
 トリアゲバアサン 四、五
 トリオイ 五
 トリセキ 三〇、四一
 (とりせき、百日咳)
 トロイモ 三〇
 トロ飯(トロ汁) 六
 ドンデンゲリ 六
 ドンドンヤキ 五、九、九
 (どんどん焼き)
 呑竜様 三六
 ドンリュウボウズ 三三
 (呑竜坊主)
 ナナ行 三
 ナイサゲ 六
 ナイブレ 三
 長生 三

長居の客(呪い) 三六
 中グンチ 七
 中仕切 三
 ナガナワ 元
 ナカノマ 一四、七
 ナカマイリ(仲間入り) 四、三
 ナガヤ 九、五
 ナガラ様(長良様) 三、二、三、四
 長良神社 三、七、九
 長良神社 二〇、二五
 長柄神社 九
 長柄の人柱 二、三、四
 仲人 二
 仲人 二
 仲人 二
 仲人 二
 仲人 二
 夏越 四
 茄子 三
 ナクサ 三
 七草がゆ 九、二六
 名びろめ(名広め) 四、四
 ナマス 三、七、九
 なま 三
 ならし唄 一
 成田様 二五
 ナレアイ 三
 縄な 三
 ナンド(ネドロコ) 四
 ナンドグチ 四
 なんかん 二〇

仁	七
二 脚 門	五
ニ ギ リ	四
西鳥居のあるお宮	三
ニジユウイチンチ	三
二十三夜待	六、七
に せ え	一〇
日 常 の 食 器	三
日 参 講	四
二 ノ 午	七
ニ ビ タ シ	三三
煮 物	三
ニ モ ノ ヤ	六
ニ	九、一〇
ニワツク(ニワトコ)	七
鶏	三三
鶏 禁 忌	一五
ね ぎ	三三
念 木	五
ネネツコのおみやげ	三、四
ネプト流し	七、五
ネベツカ(寝別火)	七
年 始	六
念 仏	六、三〇
念 仏 踊	一八、一六、一六、一六、一五、一六
念 仏 鐘	三〇
念 仏 講(中)	八、八、四、六、六、二、四、六
念 仏 信 仰	三

念 仏 和 讀	一六、一六
納 棺	五
のうてんき	一〇
農 休 み	三、三
野木神社(栃木)	二六
のぎの明神様	一〇
野木村(栃木)の明神様	四
ノチノモン	四
のつきらぼう	一〇
のてつくり	一〇
のどにつかえた骨(の呪い)	一〇
ノマワリ	七
ノミマツリ	九
ノリ 餅	三
のんぐり	一〇
ハ 行	二〇
排 水 機	七
墓 掃 除	五
ハカダンゴ	五
ハカツクリ	五
ハカマイリ(墓参り)	五、七
ハカマイワイ	四、五、五
羽 黒 行 人	二四
は し か	一四
ハシメーリ	四
ハスの酔止め(呪い)	一六
機 織 り	一六

機 織 り 唄	一六、一六
機 織 り 場	一六
はたけ(の呪い)	一五、一三
ハチゲーン	四
八十八才の祝い	四
ハツチヨウジメ	七、一四、一五
(八丁ジメ、はっちょうじめ)	一四
蜂にさされた時(の呪い)	一四
八 幡 様	四、五、一七、一四
(八幡様の)ベツカ	七
初 市	七
初 午	三、一〇、一三、一四
二十日正月	七
初 っ 子	一三
ハツサク(はっさく)	四、七
八朔の節句	七
初 節 供	四、五
はってんか	二〇
はつどら(初寅)	三、五
は と こ	二〇
初 別 火	八
初 山	四
馬頭観音(様)	六、一四
ハ ナ	七
ハ ナ ギ	七
はな血(の呪い)	一四
はなっぽろ	二二
ばひかぜ(ジフテリア)	一三、一四

ハ マ ヤ	四
ハヤヅカイ	五
はやりめ(やんめ)	一〇、一三
腹 帯	四
針 供 養	七
針 仕 事	七
榛 名 神 社	一〇
はんげ(半夏)	五、六、三
ハンゲドン	三
ハン 台	三
半ドウバン	三
ヒ ア ゲ	四、六
彼 岸	三、七
引 継 ぎ 式	一六
ヒキハカ	三、三、五
ヒキワリ麦	元
ひけつとり	二二
ヒタイガメ	五
ヒ ダ マ	二九
ひだりっこぎ	二二
ヒトガタ	七
ヒトダマ	二九
ヒトチカラ	四
一つマナクのダンジロー	七
ヒトツマナコノダンジロオ	一三
ヒトツメダマノダンジュウロオ	一三
火にたつ	七
火伏せの神(青竜様、大作様)	四

火番小屋 六〇〇
 百庚申 允
 百万遍 四、七、三、六、四
 百 六、六、八、七、二、三〇
 ヒヤクカン日 交
 雹 二〇
 病氣、身体異常 (の呪い) 三〇〇(呪)
 病氣見舞 四〇
 ひょうげもん 二二
 ひょう除け 三〇
 雹乱除け 六、六
 雹乱除けの方法 六
 びり 二二
 拾い親 呪
 ヒロマ(広間)型 三、一五
 貧乏稲荷 三三
 副食料 三〇(三)
 ブクノハライ 六
 フクボーキ(イナボ) 七〇
 福マキ(福まき) 交、交
 不幸田 二七
 不幸の膳 三
 フゴツパタキ (ふごつぱたき) 三、七、三三
 富士講 二六
 富士信仰 二四
 富士浅間様 三六
 富士嶽神社(館林市藤原) 四、呪

富士塚 二四、二六
 富士見田 一六
 藤原長良 一五
 ふだんの飯 三〇
 仏壇 交
 ブツツアラ 三三
 ブツテイ 二七、三〇
 不動講 五、五
 不動様 九
 フナザッコ 七
 フナの甘露煮 三
 フリ棒 三〇
 コロバ 五
 ブンノグド (ぶんのぐど) 五、一四
 ぶんのくどの毛 一四
 分家 六
 ペッコ 二二
 ヘツクリ 五、六、七、七、元
 ヘツナリ 四
 へだつたなか 二二
 別火 八
 蛇に関するもの(呪い) 二七(一三)
 蛇の信仰 四
 ヘヤアキ 四
 へらぎぐち 七
 ベンケイ 三
 便所 元、交、元
 弁天様 四、五、七、三三

へんぼらい 二二
 ホイロ 三
 棒打ち唄 一六
 奉公人 七
 ほうずき 二八、一四
 ほうそう 三三(一四)
 蓬萊山 四
 黒子(ほくろ) 三〇
 ほくろ地藏 三〇
 ボ 四
 ボタフリ 三
 ボダテ 元
 ボタ餅(ぼた餅) 七、七、七
 ぼつくそ 二二
 ボツツアラ 三三
 ほっとれ 二二
 ボデの木 二七
 仏がる 六
 ホマチ 五、六、七、七、元
 ホマチ仕事 元
 掘抜井戸 五
 盆 七、一三〇
 盆荒 七
 盆送り 七
 盆おどり 七
 (盆踊り) 一八
 盆踊り唄 一六
 本家 六
 本様のほし 一四、一四
 本ドウパン 交

(盆の)食習 七
 (盆の)贈答 七
 盆の用意 七
 ホンパカ 三
 ホンマ 三、一五、一六、一七
 盆迎え 七
 マ行 七
 まいだんご 七
 マイリパカ 三
 マクラガイ 三
 マクラガエン 三
 マクラダング 三
 マクラメシ 三
 マガリ(曲り) 二、七
 マガリの家 一六
 マクリ 四
 孫祝い 四
 孫のイチゲン 四
 マゴノイワイ 四
 孫の里帰り 四
 マコモ 五、六
 マコモ馬 七
 マコモの馬 七
 マコス 三
 的場 二四
 ママ(地形) 二六
 まめ(の呪い) 三〇(一三)
 豆まき 七、六
 まゆだんご 一四
 まわし 七

饅頭 笠	六
ミカゲツ田	四
三カ月様	九、二五 三三、四
ミクンチ	三三
ミケゴ(みけご)	一九、三〇、三〇
水 番	一五、一五
ミズミマイ	一
ミソカッパライ	三
ミソガマ	四
ミソ玉	三〇、三二
水 鳥	二二
みためし	五
御手洗池	一、九、一〇 二、三、三、一〇 二四、五〇、二五
ミツカ(水塚)	六
ミヅコ	三三、三六、三九 四四、四四、四四
三つ つじ	三
ミツツノイワイ	三
三峯のお札	三
巳の 日	三
巳待ち	三
耳の神様	一四
耳の病(の呪い)	一四
耳ぶた	三二
ミヤゲダンゴ	三

みやげ物	四
ミヤコ柱	四
明神様	一四
みより	二二
迎え盆	一四
麦	三〇
麦打ち唄 (麦打ちうた)	三、五、一〇 一六、二〇
麦作儀礼	三
麦だんご	一五
麦念仏	六、七、八
麦の食べ方(洪水時の)	二
ムギノテッポオカッギ	三三
麦干し	三
麦まき	三
ムクツチヨ(鳩)	三三
虫下し	一四
むじな	二九
むしば	二七
むてっこじ	二二
胸のつかえ(の呪い)	一四
むふつきよ	二二
村鎮守	三〇
村づきあい	四
目かいご(みけご)	三〇
メクラッパタ	二七
めしくいともだち	二二
メシクイバ(カッテバ)	一四、一六
メシタキ	三
メシ餅	三

目にゴミが入ったとき(呪い)	一四
目まい	一四
目をひきつけたとき(呪い)	一四
メシ板	三
メシ棒	三
もうぞうもん	二二
もかもか	二二
もちあいじんしょう	二二
餅草	二二
藻採り唄(モクトリ唄)	一五
もの作り	七
ものび	一四
物をなくした時(呪い)	三六
糶谷の獅子舞	一五、一五
モモ引	二五、二六
モヤゼン	三
モロコシ	三〇
ヤ行	三〇
や(谷)	一〇
ヤカガシ	七、七
八木節	一〇、二七、八五
やきもち	二五
やきもちっこ	二二
柳生の明神様	三〇
楽師様	一四
ヤクジンガミ	三三
ヤクジンヨケ (厄神除け)	三、三 三三、三六
厄除け	三三

厄年の人	三五
疫病除け	二五
厄除け護摩	三五
疫除け大師様	三五
やけど	三〇、三六、三七
ヤゲン	三
八坂神社	一四
ヤシキ	九、一〇
屋敷稲荷 (ヤシキ稲荷)	一五、一六、七 七、三六
ヤシキ神(屋敷神)	一〇、九
ヤシキチンジュ (やしきちんじゅ、屋敷鎮守)	四七、九、一四
屋敷八幡様	三九
ヤシキ林	二〇
やせっぽね	二二
八浅間	二五
屋根大工	二二
やぶれまんが	三、九
ヤマイリ(山入り)	三、九
山の神様	一四
ややんが	二二
ヤヤンゲ	三三
やろ	二二
ヤンメ	一九、三〇
遊戯の一時中止	三
祐天様のまつり	三
祐天上人	三
ユカン(湯カン)	三
ユギリッコロシ	三三

湯に酔ったとき(呪い)	一兎
弓取式	七、六、八
夜遊び	五
容器(食具)	三
ヨオカダango (八日だんご、八日ダango)	七、八、三
よくったかり	二
よこね	三、三
ヨシ	五
葦切	三
よつ辻	四、七
よどれ	二
夜泣き	三
夜泣き地藏	三七
よなべ	三、三
よめめ	四
よめご	二
嫁の里帰り	四
ラ行	
ライサマ	二
雷電様	三、三、三、三、三
雷電様の代参講	先
雷電神社	五、六、七、八、九、一〇、一一
(雷電神社) 代参講世話人名簿	一〇〇、一〇一
雷電神社の夏越	七、七、七
雷電神社の輪くぐり	三

雷電木	三
落雷よけ	三
ラントウバ(乱塔場)	五、五、三
らんとぼ	三
陸の孤島	七、五、三
竜灯の縦	二
両墓制	三
料理用具	三
留守まいり	三
労働着	五
六合ぼたもち	一
六算	一、三、三
六算様	一、三、三
六算様	九
ロクブノボチ	六
六盆	七
ワ行	
ワカインガシラ	五、五、五、五
ワカインシュ	五、五、五
若い衆口	六
(若い衆組と)婚姻	五、五
ワカインシュグミの仕事	五
ワカインシュグミへの入り方	五
わかいいんきよ	二
若い衆組	三
(若衆組と)祭祀	五、五
(若衆組の)娘の管理	五
若衆仲間の遊び	五、五、五、五
ワカレトウバ	六

ワケーション	五
和讃	一、六、一、七、二
棉畑	一、五
わたりもん	三
わらじ	一、四
わら仕事	七
わら仕事始め	七
わらでっぼう	六、四
童唄	五、五
わら唄	三
腕貸	二、五

あとがき

群馬県の民俗調査報告書も、片品、上野、板倉と三冊世におくる
 ことができたが、今回の板倉町の民俗調査報告書は、地元板倉町の
 方々の絶大な御援助により、今までにない地元の調査報告まで含
 めてまとめることができたことは、編集者の大きな喜びとするこ
 ろであります。この調査をきっかけとして、地元の小・中学校の先
 生方の研究活動がさかんになったことも、今までにない大きな収穫
 といえると思います。

次に、調査委員の方々ですが、炎熱の中を朝早くから夜お
 そくまで熱心に調査され、県としてもそれに応える経済的な裏付け
 ができなかったが、この報告書をお手もとにお送りすることが担当
 者としての唯一の感謝の方法であり、続いて行なわれる調査にも御
 協力を切に願います。

おわりに編集、校正、索引にいたるまで担当協力された井田安雄
 氏、地元を中心となつて寝食を忘れて御世話下さった宮田茂氏に衷
 心より感謝申上げてあとがきといたします。

(近藤記)

板倉の民俗

昭和三十七年三月二十八日印刷
昭和三十七年三月三十日発行

非売品

編集兼発行者 群馬県教育委員会

発行所 群馬県教育委員会事務局

前橋市前代田町二八二

印刷所 朝日印刷工業株式会社

電話(2) 四八二一
七五七一〇番



正誤表

頁	段	行	誤	正
17	上	1	高島早川敏夫氏宅 オカギ様	高島… オカギ様
23	上	14	草案	草履
26	上	15	魚撈	漁撈
27	上	19	エビブツテリ	エビブツテイ
28	上	写真説明		
35	下	9	…資料を別記する…	…資料を列記する
67	下	18	三方荒神	三宝荒神
84	上	8	ナイダ、ナイダ	ナイダ、ナイダ
105	下	20	〃	〃
105	下	26	神宮	神官
115	上	10	煙滅	埋滅
119	下		Ⅲまじない	Ⅲをとる
121	上		Ⅳ禁忌その他	Ⅳをとる
124	上	9	庚申様	庚申様
127	三段目	4	かぎつるし	かぎつるし
128	四段目	13	〃	〃
141	二段目	最後の行	白南	白南天
142	〃	4	(南・高島…)	(南―高島…)
142	四段目	12	はひかぜ	ばひかぜ
144	一段目	6	南地区	南地区
148	四段目	3	とげぬき地尊様	とげぬき地藏様
149	附記	9	当つてした	当つてきた
154	上	1	Ⅵ排水機の出来るまで	Ⅵ排水機の…
155	下	調査こぼれ話	調査こぼれ話(12)、(13)	調査こぼれ話(11)、(12)